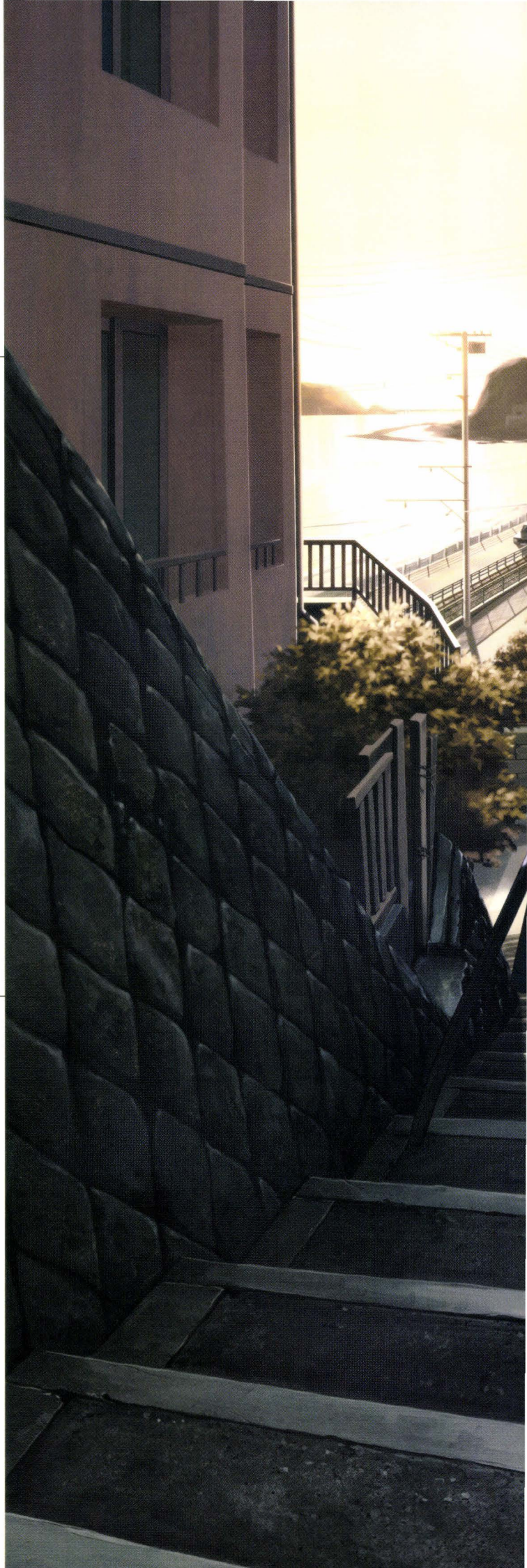
ホワイトブレス
with faint hope
オフィシャルファンブック

お買いあげありがとうございます～。ついに出来ましたファンブック！

これでゲームでは語られなかった設定やエピソードなども、ようやく伝えることが出来ました。色々あったんですよ～(笑)。それと取材旅行で撮り貯めてた写真などがお披露目できたので、自腹でやってきた事が、これで少し酬われるって感じです(笑)。

草薙こうたろう

本を手に取っていただきありがとうございます。ファンブックということで、長い間眠っていた絵がようやく表に出せると思うと感慨もひとしおです。……これでも半分くらいですが（笑）。意味不明なラクガキから未使用原画まで、「コレは！」というのを厳選して載せていただきました。楽しんでくださいー。(＾＾ﾉｼ

橋本タカシ

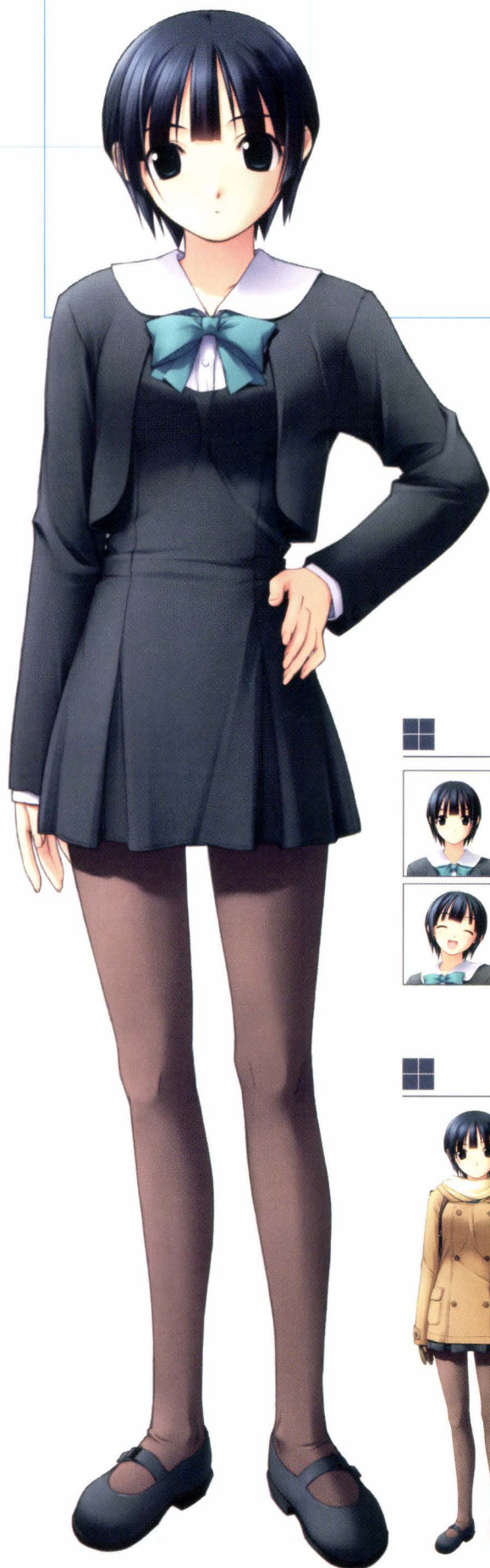
Contents

卒業まで、あと1年と少し
はっきりとした進路は見えないけれど
なにかを決めなければと不安が少しずつつのる日々
けれど……

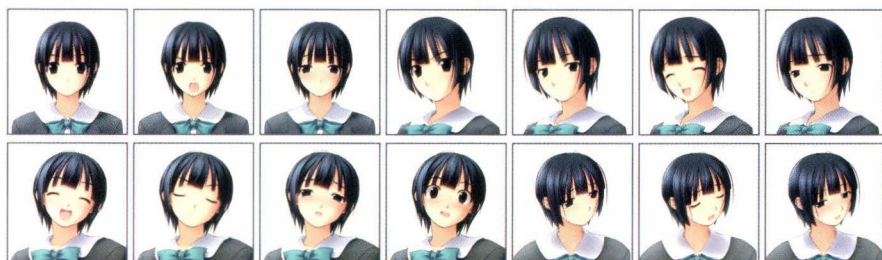
毎日の朝を知らせてくれるラジオ・パーソナリティの声も
ガタガタ揺れながら走る電車から見える湘南の海も
学園へと上る坂道で毎朝交わされる挨拶代わりの言葉たちも
何にも変わってなんかいないんだと思わせてくれる

そんな冬の日
雪が舞い降りる12月
白い息の中で立ちすくむ君たちに祝福あれと
誰かが小さく祈った

一ノ瀬　未緒

ichinose,MIO

身長：157cm
血液型：O型
星座：牡羊座
誕生日：4月2日
茜坂学園2年生

司のクラスメイトで、一緒にラーメンを食べに行ったりする気のおけない間柄。冬でも愛用のマウンテンバイクで風を切って登校したり、司と口喧嘩をやり合うなど、活発な面を持っている。弓道部所属。家庭内の事情から、司の家で同棲生活を送ることになるのだが……。

Other Face

Other Fashion

友人である刹那の幼なじみでクラスメイト。
憎まれ口を叩き合いながら一緒にラーメンを食ったり、
下校時の足代わりに自転車に乗っけて貰う女の子。
俺のなかでの彼女は、それ以上でもそれ以下でもない存在だったんだ。
そう、あの日が来るまでは……。

02

……コツ……コツ……

部屋でくつろいでいた俺の耳に、聞き慣れない音が入ってくる。
「何の音だ？」
……コツ……コツ……
どうやら窓に何かが当たっている音らしい。
窓から外を見下ろすと、玄関の前に人影がみえる。
こんな時間に一体誰が？
「……一ノ瀬……」
外にいたのは一ノ瀬だった。雨の中、傘も差さずにいたのか全身がずぶ濡れになっている。
とにかく、このまま外に立たせておく訳にもいかないので、俺は彼女を部屋に招き入れた。
「司ちゃん……はい、タオル」
凪沙姉さんがタオルを持ってきてくれた。
「だ……誰？」
姉さんのことを知らない一ノ瀬は、一瞬身構えてしまう。そんな彼女を気遣って、姉さんは温かい飲み物を煎れに、キッチンへと下がっていく。
「……今のままじゃいけないのかな……」
ようやく一ノ瀬が口を開く。
「……私……これからどうすればいいの……わかんないよ……」

朝。一ノ瀬はまだ眠っている。
俺は、昨夜の一ノ瀬の言葉を思い返していた。

「私……いらない子だったんだ」
ポツリ、ポツリと一ノ瀬が重い口を開く。
「全然知らなかった……小さい頃、今の家に預けられていたなんて」
「本当の親だって……ずっと思っていた」
「それが……今日……」
「迎えにきたって……本当のお父さんが」
俺には一ノ瀬の話を黙って聞いてやることしかできなかった。ただ、居場所の無くなってしまったアイツを、家に置いてやろう。そう思ったんだ。それには姉さんも同意をしてくれた。俺を頼ってきたんだから、力になってやれと言われた。
俺にはなにが出来るんだろう？

翌日、一ノ瀬は実家に荷物を取りに帰った。ウチに居るということを両親には俺の方から伝えてある。

一ノ瀬がウチで生活を始めて数日が経った。特に問題となる出来事も無く、どこかで気が緩んでいたのだろうか、一ノ瀬が小さなミスを犯してしまった。

「私……いらない子だったんだ」

――ピンポーン

チャイムが鳴る。たまたま俺は着替えのために自室にいて、一階には一ノ瀬しか居ない状況。アイツは気を利かせて接客に出たのだろうが、来客が悪かった。
俺が慌てて下に降りると、そこには困惑した表情の一ノ瀬と、後輩の浅葉が立っていた。
浅葉は料理の入った鍋を持って立ちつくしている。
「お母さんが……お裾分けをって……」
浅葉の母親――俺の昔の義母が、作ってくれた料理を持ってきたらしい。ほぼ独り暮らし状態である俺のことを気遣ってか、これまでにも何度かお裾分けをして貰っていた。たまたま、タイミングがかち合ってしまったらしい。
奥からでてきた姉さんが、一緒に夕飯をと誘ったが、浅葉はちょっと困った笑みで誘いを断り、帰ってしまった。一ノ瀬は、浅葉と俺の関係を姉さんから聞いたらしい。

翌日、家の前で鍋を取りに来た浅葉と鉢合わせた。取りあえず家の中へと招き、一ノ瀬が俺の家に居る理由を説明することにした。

「……という訳なんだ。ちゃんと話していなかった俺が悪かった」
浅葉は状況を理解したのか、少し沈んだ表情で
「ううん……そんな、誰も悪くないですよ。あたしだったら、同じことができるかどうか」
「それを言うんだったら、俺だって大したことは出来てないさ」
そう……まだなにも解決しちゃいない。俺は、ただ一ノ瀬を家に置いてやってるだけだ。これは、問題の先送りをしているだけかもしれないのに……。
「いえ、もうしてますよ」
「だから未緒センパイは……ここにいるんですよ」
そうなのだろうか？　俺にはわからないが、浅葉がそう言うのなら、そうなのかもしれないな……。

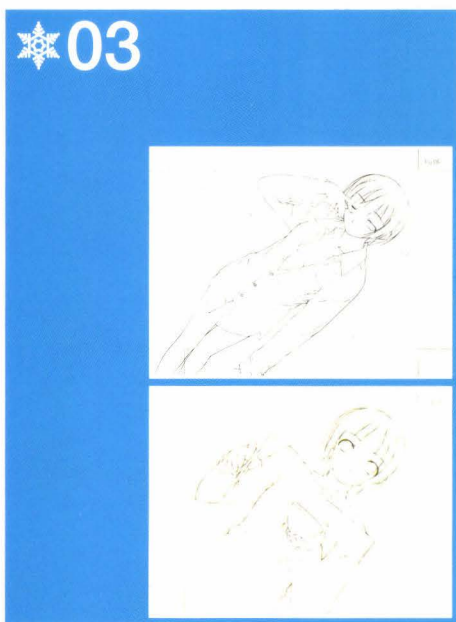
──クリスマス
　姉さんは友達とパーティーがあるとかで出かけてしまった。俺は俺で、いつものメンバーが集まって、ウチですき焼きパーティーだ。
　美味しい肉とケーキを堪能して、みんなで騒ぐクリスマス。最近、重い空気が多かっただけに、こうやって素直に騒げる時間はとても楽しかった。
　しかし、楽しかった時間は終わりを告げ、みんなそれぞれの家へと帰っていく。
　一ノ瀬も自宅に帰るフリをして外に出たが、みんなの姿が見えなくなったところで家へ戻ってきた。

「来年も、こんな馬鹿騒ぎしたいな」
　何気なく出た俺の一言だったが、一ノ瀬には深い意味を持つ言葉だった。
「来年……か」
　一ノ瀬はそうつぶやくと、うつむいて何かを考えるように、ぼうっと床を見る。
「お前、来年は不参加のつもりじゃないだろうな？」
　俺は少し強めの口調で言い聞かせるように話しかける。
「また、集まって騒ごうぜ？」
　俺は言葉を続ける。
「無責任な言い方だけど……来年も……当たり前に……当然のことのように……みんなで集まろうぜ」
「お前の居場所は、ちゃんとあるんだからな」
　一ノ瀬は視線を逸らしてしまう。俺も、少し恥ずかしくなって背中を向けてしまった。
　背中越しに、一ノ瀬の泣き声が聞こえてきた……。

　年が明けて一月。
　今日は嬉しいハプニングが発生した。共同生活になれてきたのか、たまたま朝が弱いのか、寝ぼけた一ノ瀬がワイシャツ一枚でキッチンに降りてきた。柔らかそうな膨らみや、白い下着が見えて……。
　その後、意識のはっきりした一ノ瀬に角が生えたのは言うまでもない……でも嬉しかった。

　学校からの帰り道、偶然会った一ノ瀬のおじさんにお茶に誘われた。おじさんはコーヒーを飲みながら、俺に詳しい話を聞かせてくれた。
……一ノ瀬の本当の母親は、もう居ない。

「お前の居場所は、ちゃんとあるんだからな」

03

　夜。あの時の夢をみる。真っ暗な視界。ぬめる地面。血の匂い。もう、ずっと前の出来事で、完治したハズなのに……。意識が……遠くなる。

　目覚めたときには気分がスッキリとしていた。きっと、姉さんの言うとおり疲れが溜まっていたんだろう。
　一ノ瀬がずっと付き添っていてくれたらしい。ふたりには心配を掛けてしまったな……。

　一ノ瀬が、実の父親と会うことになった。これまでも何度か会いに来てたらしいが、ふたりで時間をとってゆっくりと会うのは初めてだ。ひとりでは不安だろうと、俺も同席しようとしたが、一ノ瀬はひとりで大丈夫だと言った。その顔は落ち着いていて、覚悟は決まっているようだった。これなら俺がいなくてもいいだろう。
　これで、何かが変わるのかもしれない。どういう方向かはまだ判らないが……きっと。

　夕方、一ノ瀬が帰ってきた。色々と話をしてきたらしい。実の父親の思いを聞いて、もっと早く話していればと少し後悔をして泣いている。母親のことはまだ知らないらしい……。

04

部活も終わり、家に戻った俺は強烈な睡魔に襲われた。いつものベッドで仮眠を取ろうとしたところで意識が途切れてしまう。
気付くと、床で眠ってしまったらしい。部屋には、雑誌やCDが散乱している。眠ったのでは無く倒れたのだろうか？
肩……腕……腰。いたるところに痛みが走る。スウェットが汗で肌にへばりつき、気分が悪い。
一ノ瀬はまだ帰って居ない。
大丈夫だ、ちょっと疲れが溜まっているだけだ。俺は完治している。大丈夫だ……。
呪文のように繰り返し、俺はなんとかアイツが帰る前に普段の自分を取り戻した。
——ガチャリ
玄関の戸が開く音。一ノ瀬が帰ってきた。しかし、なにか様子がおかしい。
寒さのせいか、身体が震えている。
俺は、とにかく一ノ瀬のコート脱がせると、エアコンを入れ、暖かいお茶を煎れてやる。
一ノ瀬は、小さく泣き出してしまった。

風呂に入って少し落ち着いたのか、一ノ瀬は少しずつ今日の出来事を話し始めた。
父と母の出会い。自分が生まれた時のこと。その後の苦悩。そして、母親が他界したこと……。
俺には何もしてやることが出来ない。ただ、泣いている一ノ瀬を抱きしめることしか……。

翌日、俺は病院に行った。診察の結果は
——すぐにでも検査入院の必要アリ
いつまで……自分の身体を騙せるだろうか？

浅葉が家に来た。一ノ瀬は家を出ていった。一ノ瀬に気を遣ってウチに来なかった浅葉と、浅葉に気を遣ってウチを出ていこうとする一ノ瀬。
俺は……一ノ瀬を選んだ。
俺にとって、浅葉ののかという存在は、もう、家族ではなく……ただの後輩だから。
俺は一ノ瀬を追って表へ出た。
外は雪が降っていた。自転車のタイヤ跡が雪の上に残っている。俺はその跡を追って走った。
駅前に一ノ瀬がいる。その姿はとても儚げにみえた。
俺は一ノ瀬を後ろから抱きしめた。
「俺は……これからも、一番放っておけない奴の側にいる……だから……お前の帰る場所が見つかるまで、居ていいんだ……」

俺たちは家に戻った。そこには、浅葉が待っていてくれた。
浅葉は、俺たちを笑って迎えてくれた……。

俺と一ノ瀬の生活が始まる。今までと変わりない生活。だけど、どこか違う生活……。

05

家に帰ると、一ノ瀬が浮かない顔で待っていた。
仕事で留守にしていたオヤジから電話があったらしい。留守電のランプが点滅している。内容は、聞かなくても判る。
俺たちの生活が、終わろうとしていた……。

学校からの帰り道。いつの間にか普通になっていたふたり乗りでの帰り道。一ノ瀬の素直な気持ちを聞いた。

「好きだよ……」

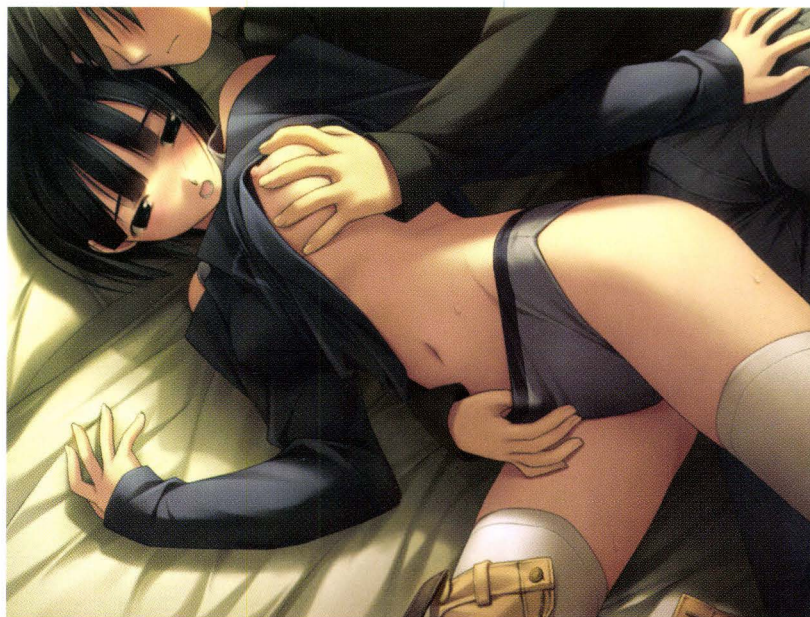
一ノ瀬は、俺の心の中にいつの間にか入ってきていた。悪い気はしなかった。なんでだろうと思ったときもあったけど、そのままでいいかなと思えた。俺が、俺のままでいられる相手だったから……。
……だから、俺もアイツに素直な言葉を伝えられた。

「俺も……好きだ」

──その日、俺たちは恋人同士になった。

「好きだよ……」

「俺も……好きだ」

06

一ノ瀬は実家に帰った。入れ替わりで、姉さんとオヤジが帰ってきた。今までの普通の生活。だけど、どこか寂しい生活が戻ってきた……。

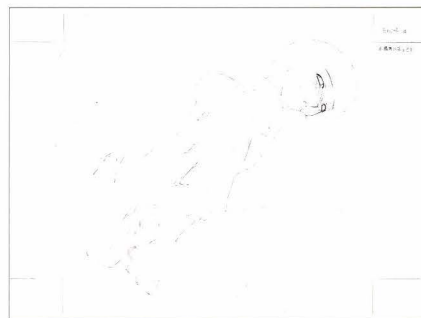
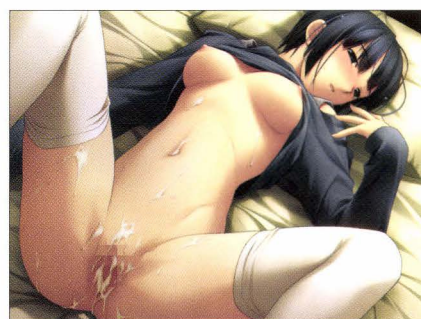
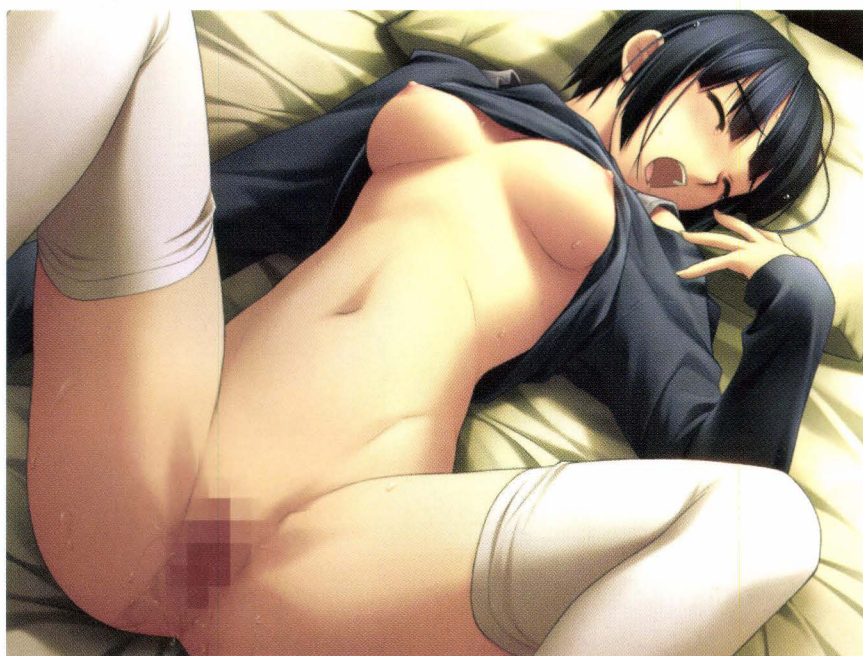
それでも一ノ瀬は、何かにつけては家に来て、家事の手伝いをしてくれる。もちろん、以前のように泊まりがけではないが、それでも俺には充分だった。

一ノ瀬に頼まれた買い物の帰り、家の前で利那と出会った。
「お前はいつまで、一ノ瀬とママゴトをするつもりだ？」
いきなり核心をつかれた俺は、返す言葉を見つけられずに、黙っているしか出来なかった。
「結局一ノ瀬が決めることだからって、ただ場所を貸してやってるつもりか？」
「それは、結局何もしていないのと一緒だ」
「もし、アイツが元の家元に帰るとしたら、もう会えないと思った方がいい。しきたりを憶えさせられ、その家にふさわしい教育をされるだろう」
「たまに会える？　そう思うのも結構だが……甘い。なにせ家の存続問題で、子供ひとりを無かったことにしてしまう家だ。常識が通じない、そんなバカなって世界にアイツは行ってしまうかもしれない」
「わかっていたはずだろう？」

考えなかった訳じゃない。考えないようにしてたんだ。そして、信じていた……。

家に戻ると、一ノ瀬の姿はなかった。机の上に書き置きもない。黙って消えてしまったのか？　嫌な予感がよぎる。
「……んぅぅ」
ベッドの当たりで何かが動いた。
「あー……司。おかえりなさい」
一ノ瀬が毛布にくるまりながら身体を起こした。
「寒ぅい……司、エアコン付けて」
俺は暖房をつけると、一ノ瀬の隣に腰を下ろした。一ノ瀬は、俺を毛布でくるむと、身体を寄せてきた。一ノ瀬の柔らかさと暖かさが伝わってくる。
こうしているだけで安らぐ。この心地よさを……ずっと感じて居たかった。この温もりを手放したくなかった。
「司……離さないで……」
「離すもんか……」
心も身体も一つになれた気がした……きっと、これからもずっと。

「司……離さないで……」

「離すもんか……」

07

朝、目を覚ますと一ノ瀬は居なかった。机の上には「家に帰るね」というメモが置いてあった。
俺は、「家に」が「実家に」と読めて少し不安な気持ちになった。いつか、本当にアイツは「家に帰る」ことになってしまうかもしれない……。
「!?」
突然俺の身体を痛みが走る。視界が歪む。
──再発？
まさか……よりによってこんな時に。
アイツに……一ノ瀬にだけは知られちゃいけない……。ようやくここまで来たのに、こんな面倒まで背負わせるわけには行かないんだ……。
なんとか気力を振り絞って、平静を保つことができた。
まだ……まだ大丈夫だ。

進級も間近に迫った3月。俺たちは集まってお茶をすることにした。春日も刹那も俺と一ノ瀬のことを気付いたらしく、散々冷やかされた。
別れ際、一ノ瀬は少し悲しそうな顔で俺に手を振った。
「……バイバイ」
俺は嫌な予感がした。
電車が動き出す。一ノ瀬はずっとこっちを見ていた。
俺の頭から、一ノ瀬の切なそうな顔が焼き付いて離れなかった。

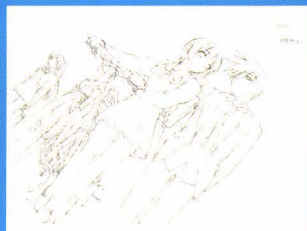
翌日。一ノ瀬がなかなか登校をしてこない。
遅刻ギリギリで登校してきた刹那が俺に話しかける。
「ここいらでは見かけない車がいた……一ノ瀬の家の側に、止まっていた」
刹那の言葉に言いようもない不安がよぎる。
「アイツは、来てるのか？」
「イヤ……」
「……そうか」
俺は教室を飛び出した。後ろから、教師の怒鳴り声が聞こえるがそんなことは知ったこっちゃない。
校門を駆け抜ける。いつも通っている坂を下る。一ノ瀬の乗った自転車が視界に入ることを祈りながら。駅前。海沿いの道。アイツの通る道を逆に走っている。だけど、アイツの姿はどこにも見あたらない。
嫌な感じはしていた。でも、これ以上不安になりたくなくって考えないようにしていた。いつもと同じように過ごしていれば、何事もなく過ぎ去っていくと思いこんでいたんだ。

刹那の言葉を思い出す。
──「結局一ノ瀬が決めることだからって、ただ場所を貸してやってるつもりか？」
──「それは、結局何もしていないのと一緒だ」

家の近くまで来ると、一ノ瀬のおじさんが立っていた。
「……向こうだ」
おじさんにはすべて判っているようだった。

「未緒────！」
「司……」
「黙って行っちまうなんてどういうつもりだよ……」
「……わ、わたしが迷っている間にも、色々な人を傷つけた……お父さん、お母さん、ののちゃん……そして司まで」
「……こんなことになるなら……私は……」
「バカいうな……」
「……お前だって苦しかったのを俺は知っている……」
「お前は、人のことばかり心配して……頑張りすぎだ」
「でも……このままじゃ……」
「ちゃんと……考えたのか……お前が本当はどうしたいのかってことを」
「俺は、その答えが聞きたい」
「みんな、その答えを待っているんだ……だから、お前はどんなわがままを言ってもいいんだ」
「……でも」
「俺も……お前のわがままに付き合ってやる……」
「だから……行くな、未緒」
「司……」
未緒が俺に抱きついてくる。離れたくない……愛おしさが俺の心に広がっていく。もう、離さない……。
未緒を抱きしめ、どこか心地よい気分に包まれながら……俺の意識は真っ暗な闇へと落ちて行った。

「だから……行くな、未緒」

08

「司……待ってたよ、ずっと……」

──数ヶ月後。
　いつもと同じメンバー。いつもと同じ日常。ただ、誰かが足りないだけ……。
　病室に利那の姿がある。
「早いもんだな……お前が居なくなって……」
「みんな落ち着いてきたが、やはりいつものクセがでる。それだけ……お前の存在は大きかったって訳だ」

──波の音が聞こえる。
「何してんの？」
　未緒の声に目を開けると、さんさんと輝く太陽光が目に入る。
「ねぇ、せっかく遊びに来たんだし、寝てちゃもったいないよ。今年は受験なんだから、たっぷり遊びだめしようって言ったじゃん？」
（……今年……受験？　今は……夏……だったか？）
　それから、俺は未緒と夏の海を目一杯楽しんだ。サーフィン、かき氷、ビーチバレー……。
（でも、まだだ……まだ、俺にはやらなきゃいけないことがある……。ずっと……未緒の側を離れないって……そう誓ったんだ。だから……まだ……）
「司？　お昼寝？　そんなとこで寝ちゃだめだよ」
「司…………」

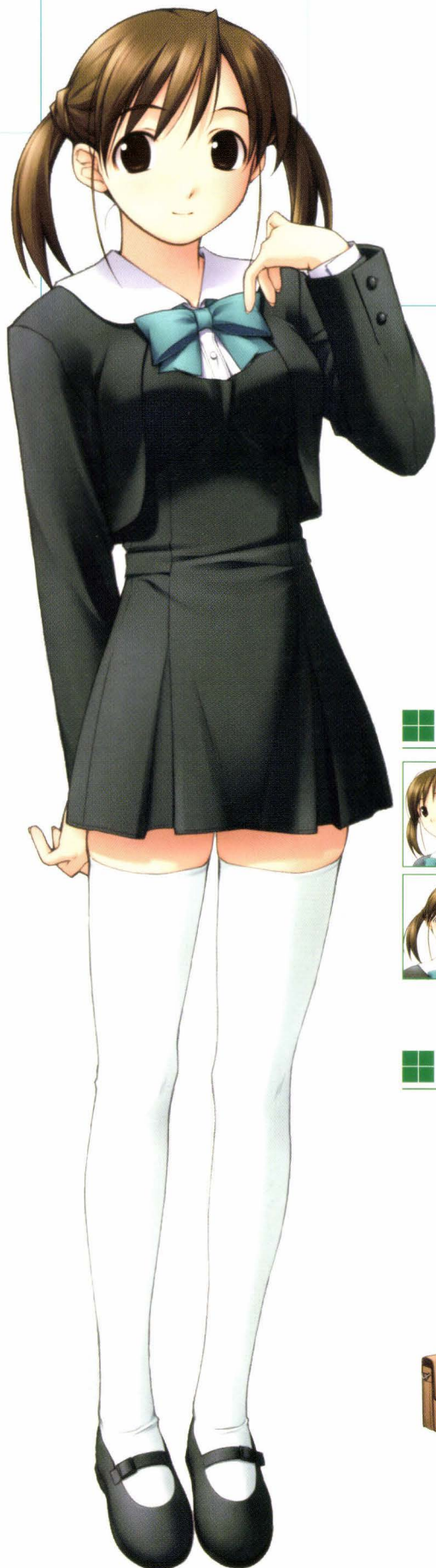
　視界が明るくなってくる……背中が……むず痒い。
　周囲がなにやら騒がしい……騒いでいるのは……看護士？　ここは……病院なのか？

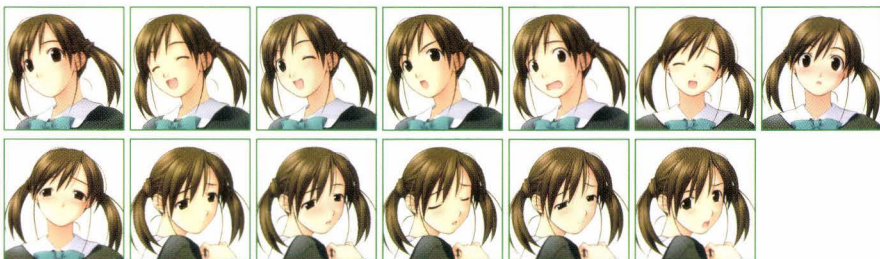
　どうやら俺は、あの後数ヶ月間意識不明だったらしい。学校は休学扱い。出席日数も当然足らず、留年することになった。あいつらには先に卒業されてしまうが、それもしょうがないことだろう。利那は医大へ、春日はどこかの事務所への就職が決まったらしい。そして、未緒は……。

　未緒は、俺を待って、一緒に留年をした。

──「司……待ってたよ、ずっと……」

春日　美乃

kasuga,YOSHINO

司のクラスメイトで、仲良しグループのひとり。非常に面倒見がよく、誰にでも世話を焼きたがるのでグループの母親的存在になっている。美術部に所属し、過去に絵画展などでさまざまな賞を受賞している。最近母親が再婚し、幼い弟妹ができて喜んでいる。

Other Face

Other Fashion

「紹介するね、うちの可愛いおちびちゃんたちでーす」

学校からの帰り道。

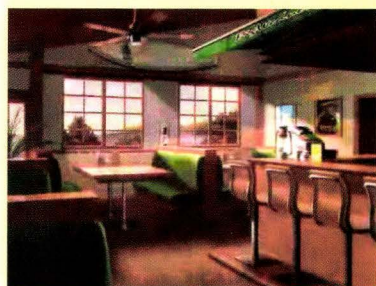
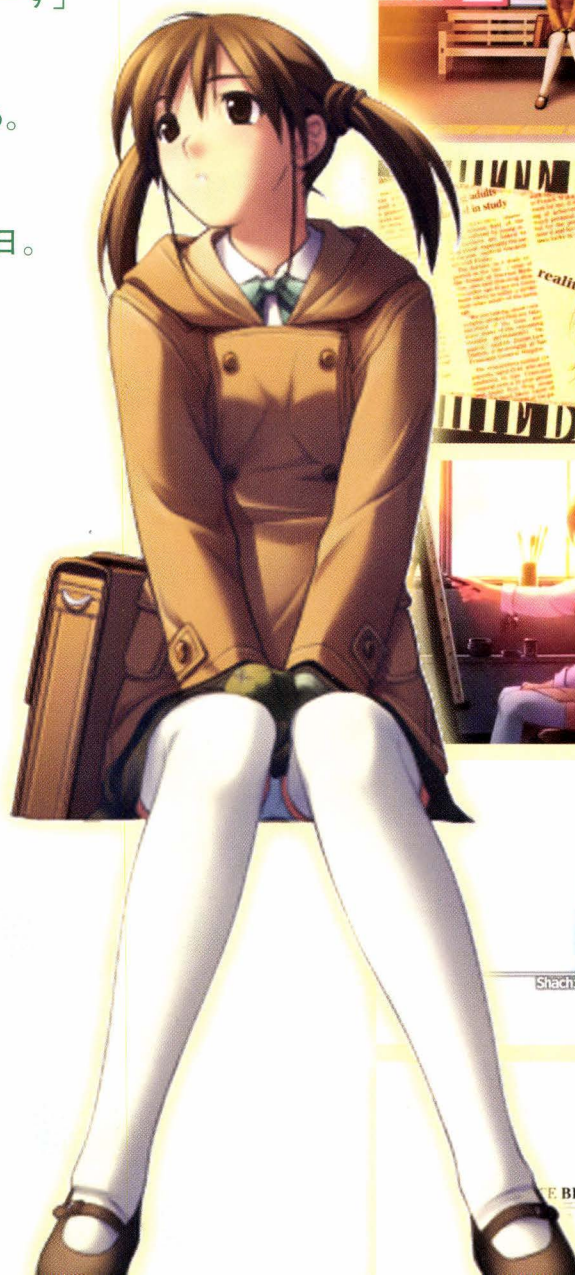
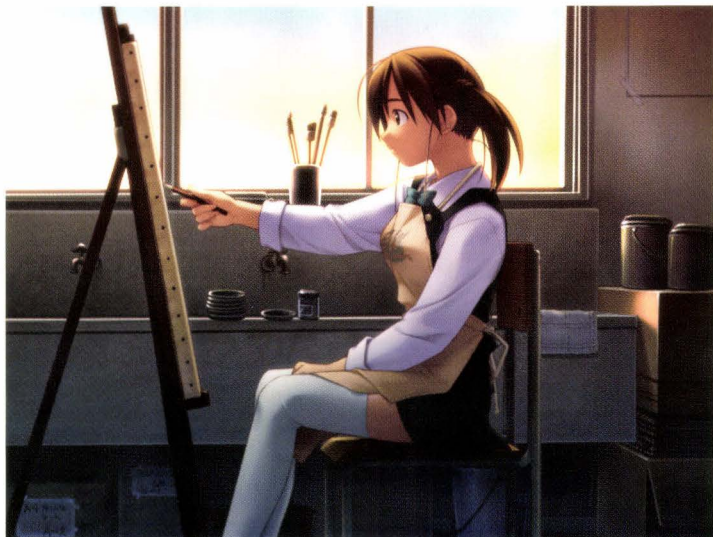
偶然会った春日に、新しい家族を紹介される。

太平と洋子というらしい。

母親が再婚して、まだ幼い弟妹ができた春日。

面倒見がよく、俺たちの間でさえ

母親のような存在になってる春日のことだ、

良いお姉さんをやっているんだろう。

01

「う、うん……やっぱり、お兄さんのほうがいいのかな」

授業もすべて終わった放課後、俺は春日に誘われて美術部の部室でお茶を飲んでいた。話題は、来年の進路のこと。俺や悪友の刹那、一ノ瀬なんかはみんな進学希望だったが、春日は就職を希望しているらしい。美術部の春日は美術系の学校に進むと思って居たんだが……色々な賞も貰っているのにもったいない話だ。

「あ、いらっしゃーい」
行きつけの喫茶店、ビッグウェンズデーに顔を出すと、バイト中の春日がいた。ここは、春日の叔父が経営している喫茶店で、手伝いをしているらしい。
「ん？　なんか店の雰囲気変わった？」
いつもの殺風景な店内ではなく、少し華やかに見える。
「へへぇ、わかる？　ちょっとだけクリスマスの飾り付けをしてみたの」
「別にこんなゴテゴテしたもんはいらねーけどな」
客を客として扱ってくれないマスターが無愛想に口を挟んでくる。
「クリスマスもバイトなのか？」
「えっ？　あ、うん……書き入れ時だからね」
折角のイベントなのに、バイトって何か可哀想だな。もっとも、俺みたいに何にも予定無いよりはマシだろうけど。

放課後美術準備室へ行くと、春日が絵を描いていた。今まで見たこともない悲しそうな表情でキャンバスに向かう姿に、俺は一瞬戸惑ってしまう。
声を掛けるべきか悩んだが、春日の表情が気になったので、普段と同じように声を掛けた。
さっきまでの表情は嘘だったかのように俺と会話をする春日。本人が何も言わないのなら、俺も気付かない振りをしたほうがいいんだろう。

授業も終わり、家へと帰る俺の前に、まだ新しいサッカーボールが転がってきた。
「……返せよ」
太平がいつものように無愛想に話しかけてくる。
俺がボールを蹴り返すと、妹の洋子が
「……ありがとう」
とかすれるような声で礼を言ってきた。
「車に気を付けて遊ぶんだぞ」
「……おい。サッカー上手いのか？」
俺がその場を去ろうとすると、太平に引き留められる。返事代わりに軽くリフティングをしてみせると、洋子が目を輝かせて見ている。太平は俺に対抗してか、必死にリフティングに挑戦しはじめた。なんだかんだいってもまだまだ子供だ。
「司くん」
学校帰りの春日が俺たちに気付き、近寄ってきた。
「遊んでてくれたんだ、ありがとねっ」
「あ、あたしにもボール貸して……よーし、行くよ太平君」
「とう！」
「ぐあ!?」
春日が太平にパスをしようと、思いっきりボールを蹴った瞬間、俺の後頭部に衝撃が、そして視界に閃光が走った。どうやらボールが直撃したらしい。
「ご、ごめんなさい。大丈夫？」
春日が走り寄ってきた。
「ちょっとしゃがんでくれるかな？　血とかでてない？」
「大丈夫だって」
と言いつつ俺がしゃがむと、春日は俺の頭を抱え込むように後頭部をチェックする。
頭に柔らかいものが押しつけられる。吐息がくすぐったい。
「も、もう平気だから。ほら、パスしてやれよ」
春日に頭についた泥を払って貰うと、俺はドギマギしながら立ち上がった。
「う、うん……やっぱり、お兄さんのほうがいいのかな」
春日は太平にボールを返すと、そんなことを呟いた……。

クリスマスを間近に控えた土曜、俺は春日に誘われて買い物に出かけた。週末らしく、家族連れやカップル、観光客などで混雑する商業施設でクリスマスプレゼントを選ぶ春日。買い物の途中、幼い頃からひとりで過ごすことの多かった春日は、新しく出来た家族を大事にしたい……はやく、本当のお姉ちゃんになりたいと、俺に話してくれた。

02

街が華やかに彩られ、人々もどこか暖かい気持ちになるクリスマス。特に予定もなく、普通の日と変わらない俺は、いつもと同じようにビッグウェンズデーへコーヒーを飲みに行った。
店内は綺麗にデコレーションされ、流れる音楽はムードのある選曲、手作りケーキを食べるカップルの姿も多く、春日の売り上げ貢献作戦はまずまずの成果を上げているようだった。
やがて店内の客が一段落し、春日が夜のケーキの仕込みを始めようとすると、マスターがレジから千円札数枚を引き出し、春日に手渡した。
「美乃、今のウチに休憩してこい。今日は疲れたから、まかないは無しだ。外で適当に食ってこい。1時間位帰ってくんな」
「テメエも、いつまでも居座ってんじゃねぇよ」
俺と春日は、半分追い出されるような感じで店を出た。

「ごめんね、司くん」
春日が申し訳なさそうに謝ってくる。
「いいや、いいよ。あんまり粘るとキレそうだったし」
特に用事も無く、暇な俺は春日に誘われ、駅前のハンバーガーショップで軽く食事を取った。クリスマスっぽくはないが、それでも取り留めもない話しで盛り上がった。そうこうしているうちに時間は過ぎ、店に戻るとドアには「本日終了」と殴り書きされた紙が貼ってあった。
マスターからの不器用なクリスマスプレゼントを貰った俺たちは、友達のパーティーに呼ばれていた太平たちを迎えに行き、家に帰ることにした。
春日を送っていった俺は、帰り際に手袋をプレゼントされた。ロマンチックとは無縁の俺だが、この手の温もりだけは、春日の気持ちがこもっているんだろう……。

闇……真っ暗な空間……血の匂い。全身を不気味な喪失感が包み込む……。幼いころの怪我の記憶……もう完治しているはずなのに。
目覚めると全身が汗で濡れていた。今まではこんな夢を見ることはなかったのに。姉さんは心配して病院へ行くように進めてくれたが、そこまでしなくても大丈夫だろう。ただの夢だ……。

年が明けると、俺たちの進路指導も徐々に本格的になってくる。就職希望の春日だが、彼女の絵の才能を惜しむのは俺たちも教師も同じらしく、美大のパンフなどを渡されるらしい。奨学金や推薦などもあるし、もう少し親に相談してみてもいいんじゃないだろうか？

学校の帰り道。いつもの坂を、大量の荷物を抱えて下ってくる春日を見つけた。流石に女の子の持つ量ではないので、重そうな物を持ってやったのだが……見かけ以上に荷物は重く手が痛くなる。
春日がお茶を煎れてくれるというので、お邪魔していくことにする。正直、荷物持ちで少し休憩もしたかったし。

春日が着替えに行ってしまい、手持ちぶさたになった俺は、テーブルの上に置かれていた連絡ノートを手に取ってみる。悪いなと思いつつ中を覗くと、仕事で忙しい母親との家庭的な伝言が書き込まれていた。
テーブルにノートを戻したところで、春日が戻ってきた。連絡ノートは子供の頃からやっていることだという。
家でひとりぼっちの春日。母親とは顔を合わせることが少なく、ノートでの伝言がほとんどの毎日。どれだけ寂しい思いをしていたんだろう……。

「ありがとう、太平くん……でも、これはもういらないの」

帰り道、弟妹だけで遊んでいる太平たちにあった。1人で壁打ちをしてたので、少し遊んでやると
「ねーちゃんと付き合ってるのか？」
と太平に聞かれた。最近のガキはませてると言うかなんというか……。洋子は、俺のために花飾りを作ってくれた。春日は、その様子を見て、なつかれてうらやましいなんて言ってたけど、春日だって十分にお姉ちゃんしていると思う。でなきゃ、俺に彼氏かどうか確認なんかしないだろうに。

部活の帰り。今日はいつも以上に疲れた。悪寒もするし、汗も止まらない……風邪でも伝染されたか？
何とか家の近所まで来たところで、強烈な目眩に襲われる。意識がハッキリせず、いま自分がドコで何をしているのか判らなくなってくる……。
「司くん！」
目の前がかすんでいく寸前に、春日の声でなんとか意識を繋ぎ止める。俺は、春日の肩を借りて、フラフラになりながら家に辿り着く……そして、そのまま意識を失った。

意識が戻ると、自分の部屋のベッドで寝ていた。姉さんが心配そうな顔で部屋に入ってくる。
「インフルエンザかな……ほら、熱だけ急にでるし」
姉さんを心配させないように、なんとかごまかす。
「そうかもしれないわね。最近、司ちゃん無理してるから」
姉さんはいまいち納得してない様子だったが、何とかごまかすことができた。
いや、ごまかした訳じゃない。俺は大丈夫だ……。そう自分に言い聞かせた。

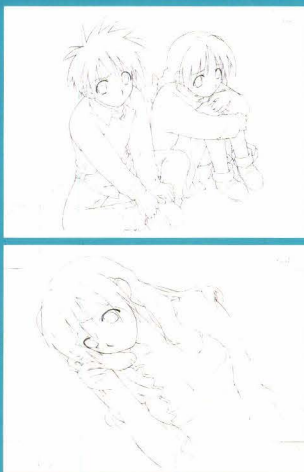
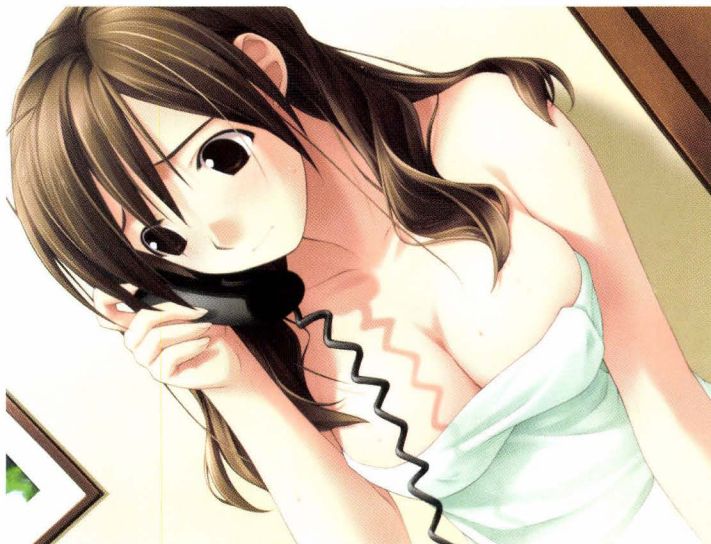
クリスマスプレゼントを渡していなかった俺は、先日買ったクッキーを持って美術室へ顔出しに言った。春日の煎れてくれた紅茶を飲みながら、進路について話をする。春日は、まだ大学行きを両親に話せずにいるらしい。本人は諦めたと言っているが、書きかけのキャンバスには、美大のキャンパスが描いてあった……。

「まったく……さっきまで何ともなかったせに」
いきなりの夕立に辟易しながら家路を急ぐ俺の視界に、ずぶ濡れになった太平たちの姿が入ってきた。
「なんだお前ら、傘持ってないのか？」
「ねぇよ」
「だったら早く帰れ」
「わかってるよ。いくぞっ」
「やぁ!?」
いきなり走り出した太平に引っ張られた洋子が転び、ずぶ濡れになってしまった。泣きそうになっている洋子を抱えると、太平と一緒に春日の家まで運んでやる。

春日はまだ帰っていなかった。太平は、洋子の面倒をみるために部屋に行っている。静まりかえった家は、世界から誰も居なくなってしまい、本当に自分ひとりになった錯覚を憶えさせる。春日も、太平も、洋子も、この寂しさを知っている……だから……。

「お、おにいちゃん……ありがとう」
怪我の消毒を済ませ、着替えた洋子が居間に入ってくる。
「お、おい……なにか飲むか？」
太平が気を遣って聞いてくる。
「気にすんな、もう帰るから」
流石に春日の居ない家にいつまでも上がり込んでいるのも失礼だし、俺は洋子の無事を確認したら早々に退居するつもりだった……のだが。
「あ、あの……でも」
「ねーちゃん……もうすぐ帰ってくるし、いろよ」
ちびどもに引き留められ、帰るに帰れなくなってしまった。ふたりは、何とか俺を接待しようと、冷蔵庫からキンキンに冷えた牛乳をコップに注いで持ってくる。
冬の雨に濡れた俺は、出来れば暖かい物が飲みたいのだが……ふたりの緊張した雰囲気に押されて、冷たい牛乳に口を付ける。
俺が牛乳を飲んだのが嬉しかったのか、ちびどもの表情が柔らかくなった。精一杯俺を持てなしたかったんだろうな。
五時を知らせる役所の鐘が鳴る。春日はまだ帰ってこない。ちびどもは、いつもの日課なのか、各部屋のゴミを集めて戻ってきた。
ふと、太平の持っているゴミが目に留まる。
「おい……太平……チョット貸せ」
それは、春日の持っていた美大のパンフだった。
「それ、ねーちゃんのゴミ箱にあったんだ……。でも、捨てていいのかな……ねーちゃん、ずっとコレをみてたんだ」
太平が真剣な面もちで口を開く。
「にーちゃん……しゅうしょくってなんだ？」
「それは、働くために会社に行くことだ」
「じゃあ……ねーちゃんは働くのか？」
「そうらしいな……」
「にーちゃんも就職するのか？」
「いや……俺は大学に行く」
「なんで一緒じゃないんだ？」
「……わかんねーよ」
俺には、もちろん春日の家の事情は判らない。なぜ、行きたい大学を我慢して就職をしなければならないのか、それは春日にしかわからない。俺が判るのは、表面上のことだけだ。真剣に聞いてくるこいつらに、俺の口から勝手に説明するわけにはいかない。
「春日に聞いてみたらどうだ？」
俺は……ズルイんだろうか。
「なんでねーちゃんは言ってくれないのかな……」
「ねーちゃん、凄い悲しそうだった」
「ただいまーーーー」
春日が帰ってきた。太平は、何かを決意した顔で、春日が来るのを待っている。
「ひゃ!?　つ、つかさくん居たんだ？」
「びっくりしたー。太平くんたちと一緒にいてくれたんだね。ありがとー」
いままでの会話を聞いていない春日は、いつも通り明るく話しかけてくる。
「ねーちゃん……」
太平が口を開く。
「うん？　どーしたの？」
「これ……落ちてた」
「!?」
太平の持つパンフをみた春日の顔に一瞬で影が差す。
「ありがとう、太平くん……でも、これはもういらないの」
「しゅ、しゅーしょくするから？」
「そうだよ。太平くんは何も心配しなくていいの」
春日は太平の手からパンフを受け取ると、夕飯の買い物に行ってしまった。
俺は春日に夕食に誘われたが、家に帰ることにした。

数日後の朝、登校途中に春日たちにあった。ちびどもの顔が心なしか明るくなっている。理由を聞くと、父親が単身赴任から帰ってくるらしい。春日も、この機会に進路の相談をすればいいんだけどな……。

04

「ねーちゃんが自分の好きなことを出来るようにお願いするんだ！」

2月。太平たちの表情がまた暗くなった。理由を聞いてみると、父親が帰ってこれなくなってしまったらしい。だが、ただ寂しくてしょんぼりしている訳ではなさそうだった。なにがこいつらを暗くさせてるんだろう？

姉さんが受験のために実家に帰ってから数日。誰も居ない部屋に居ても暇だし、春日でも冷やかしに行こうと思った瞬間、俺の身体を鋭い痛みが貫いた。
「な……なんで」
これまでとは比べ物にならない衝撃が全身を走る。心臓が尋常ではない速度で動いているのが判る。視界は歪み、平衡感覚も完全に麻痺してしまった。

——再発？

まさか……もう完治したは……ず……。
俺の意識は闇の中に飲み込まれていった。

意識が戻る。時計は夕方を差していた。激しい寒さに襲われた俺は、キッチンで湯を沸かし暖を取る。人心地ついたところで電話が鳴った。
「お願い……助けて」
電話の相手は春日だった。外から掛けているらしく、激しい雨の音が聞こえる。

俺は、傘を差して外へでる。
春日からの電話は、太平たちが行方不明になったという内容だった。
この雨の中、どこに言ったのか検討もつかない。心当たりの場所は春日に任せ、俺は手当たり次第に探し回った。
近所の公園やオモチャ屋、本屋など子供の居そうな場所を探したが、どこにも見あたらなかった。
雨宿りのために、どこかのビルに入ってたとしたら、まず見つけることはできない。俺は、ダメもとで駅のコンコースに入っていくと、片隅に座り込んでいるちびどもを見つけた。
「よっ。珍しいとこであうな」
俺は、つとめて普通に話しかけた。
「なぁ……ふくおかってどーやって行くんだ？」
太平が突拍子もないことを言いだす。
「お前……福岡に行こうとしてたのか？」
そこで俺はあることを思いだした。
——福岡。太平の親父さんがいるところだ。
「ねーちゃんを……おとうさんに助けてもらうんだ」
ぽつり、ぽつりと福岡に行きたかった理由を話し出す。
「にーちゃん……連れてってよ……福岡に」
春日を思う気持ちが高じての行動に、俺は慎重に言葉を選んで太平に答えた。
「わかった……でも、今はダメだ」
「どうして！」
「春日が心配している……今は帰ろう。春日には黙っていてやる。俺が力になってる。だから……帰ろう」
俺が太平たちを説得していると、後ろから聞き覚えのある声が聞こえてきた。
「太平くん……洋子ちゃん……」
「春日……」
「ねぇお父さんのとこに行くって……それって……」
「春日……違う。そうじゃないんだ……」
自分の側にいるのがイヤなんだと勘違いした春日は、半分放心状態に陥ってしまう。
「ねーちゃんのことをお願いするんだ！」
太平が叫ぶ。
「ねーちゃんが自分の好きなことを出来るようにお願いするんだ！」
「ど、どういうことなの？」
突然の展開に驚く春日。
太平は、美大のパンフを取り出し、春日に渡す。
「ねーちゃんはそこに行きたいんだろ？　だから……おとうさんに……」

春日は太平の言葉を聞くと泣き出してしまった。自分がどんなに弟妹から思われているのか判っただろう。春日たちは、とっくに本当の家族になっていたんだ。

05

俺は春日たちを家まで送っていった。春日は、迷惑を掛けたし、お茶でも飲んでいってくれと俺を誘ってくれた。
疲れ切った太平たちを部屋に運び、ずぶ濡れのままの春日をとりあえず風呂に入れさせる。春日の入浴中に母親から電話があり、春日がバスタオル一枚で慌てて飛び出してきた。目のやり場に困っていた俺に、いきなり受話器を渡される。

「お母さんが、司くんにもお礼を言いたいんだって」
俺は受話器を受け取ると、春日を風呂場に戻して電話を替わった。おばさんは俺にひとしきりお礼を言ったあと、今日の出来事について聞いてきた。
家庭の事情について口出しをしていいのかと一瞬悩んだが、自分に判っていることだけをおばさんに伝えた。

ただ最後に……俺は、春日が進学について悩んでいること、そして春日と一緒に進学をしたいという俺の気持ちを付け加えてしまった。
春日が風呂から上がってきた。俺は、いつの間にか眠ってしまったらしく、春日に起こされた。
風呂上がりの春日はいつもと違う香りがした。
春日と太平たちの気持ちは通じ合った。
そして、俺と春日の気持ちも……。

翌日の朝。通学で使う駅に春日はいた。いつもと変わらぬ朝なのに、いつもとは違う関係。お互いに少し照れてしまう。
お互いの想いがひとつになった。そんな暖かい気持ちに包まれながら、俺の意識は途絶えていった……。

「あたしたち……一つになれたんだよね……」

背中が……むず痒い……喉もカラカラだ……。周囲もやけに騒がしい……ここはどこだ？
俺はゆっくりと目を開けると、そこは真っ白な部屋だった。
「……病院？」

俺はあれから10ヶ月もの間、意識を失ってしまったらしい。その間、何度も手術や治療を受けたが、最悪の場合、意識が戻らないかもしれないという重体だったと聞かされた。医師や家族、そしてもちろん春日にも目一杯説教をされた。
さすがに10ヶ月という期間は長く、全身の筋力が衰えてしまった俺は、ひとりで満足に食事をすることも出来なかった。しかし、春日が持ち前の面倒見の良さを発揮し、俺の世話を焼いてくれたおかげで徐々に快復し、松葉杖を使って歩けるようにまでなった。

俺の肉体的な快復は問題は無かったが、精神的な部分ではひとつ気になっていることがある。

――結局春日はどうしたのだろうか？

病室で寝ている俺の元へ、太平が息せき切って駆け込んでくる。
「にーちゃん……ねーちゃんが……」
「春日がどうした？」
「いいから……来て！」
太平の様子に不安を感じた俺は病院を抜け出し、動かない体にむち打って太平の後をついていく。
太平がここまで焦って俺を呼びに来るってことは……まさか。
俺の中で不安が大きくなっていく。
太平の後を追い、駅にたどり着くと、そこには電車を待っている春日の姿があった。
「司……くん。太平くんまで。どーしたのふたりとも？」
駆け寄って来る春日を俺は手で制した。
「春日……お前」
俺が春日に質問する前に、太平が口を開く。
「おねーちゃん、じゅけんがんばってね！」
「……じゅ、じゅけん？」
俺の予想とは正反対の言葉に、いきなり力が抜けてしまう。
「太平……お前……」
完全にやられた。ガキのくせに憎い演出をしてくれるもんだ。
「春日、受験ガンバレよ」
俺は、精一杯の祈りを込めて、春日を送り出した。

──十数日後。

　俺と春日は、大学の合格発表を見に来ている。
　自分の受験番号を探し、掲示板を順番に見ていく春日。すると……。
「あったよ！」
　春日の歓喜の声が響く。
　俺たちは、周囲の目をはばかることもなく抱き合うと、その場をくるくるとまわった。本当に嬉しかったんだ。

「次は、司くんの番だよ」
　ひとしきり合格の喜びに浸った後、春日は俺の目をみてそう言った。

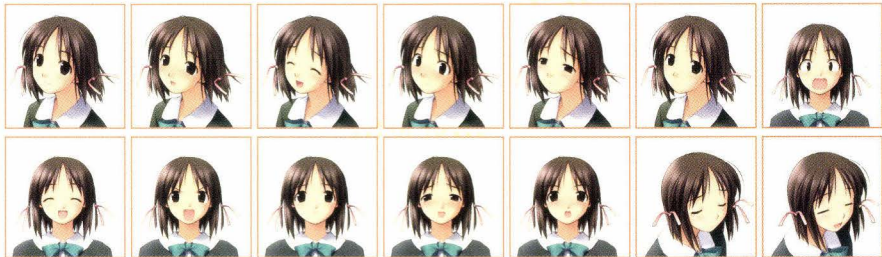
「司くんが、今度は幸せになるんだよっ」

「司くんが、今度は幸せになるんだよっ」

浅葉　ののか

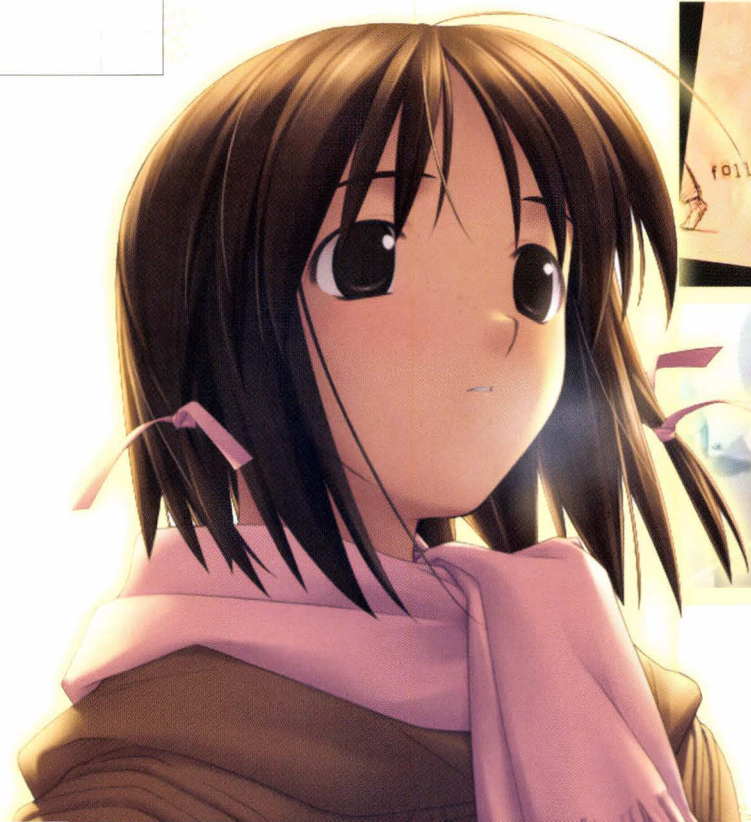
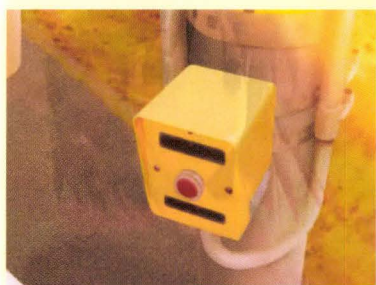
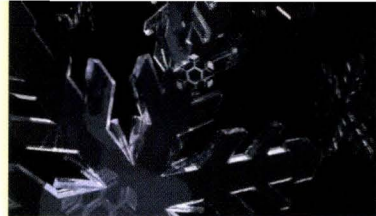
asaba,NONOKA

　司の後輩で、サッカー部のマネージャー。学年は違うが、司だけでなく未緒や美乃にもなついている、グループのマスコット的存在。普段はのんびりした性格で多少間の抜けたところもあるが、意外と体育会系のノリを見せることもある。猫舌で熱い物が苦手。

Other Face

Other Fashion

——初めて会ったときは義妹としてだった。

——再会したときは後輩としてだった。

——そのままの関係で、ずっといくと思っていた……。

「センパーイ！　おはようございます」

「センパーイ！　おはようございます」
寒さ厳しい12月の朝、今日も元気一杯の浅葉が挨拶をしてくる。
「センパイ、クリスマスにパーティーとかしないんですか？　今なら、ウチの店でケーキの予約受け付けてるんですけど」
チャッカリと家業であるコンビニ営業をかましてくる浅葉。商売熱心なことだ。最も、クリスマスの予定など立っていない俺は、軽く流して遅刻ギリギリで校門に滑り込んだ。

浅葉の母親——一時期は俺の母親でもあった——は、近所でコンビニを営んでいる。そのおかげで、賞味期限は切れてしまったが捨てるには忍びない弁当などの廃棄品を分けて貰ったり、色々とお世話になっている。浅葉は俺の所属しているサッカー部のマネージャーもやっていて、差し入れにスポーツドリンク等も持ってきてくれるため、部員の評判もかなり高い。
浅葉もよく手伝いをしているらしく、バイトの足りないときは深夜勤もやっているらしい。そんな時は栄養ドリンクなどで乗り切るらしいが、若いんだか親父っぽいんだか微妙な話だ。

浅葉が晩飯の差し入れを持ってきてくれた。凪沙姉さんがいることを知らなかった浅葉はかなり驚いていたが、説明したらすぐに納得してくれた。まぁ、赤の他人って訳じゃないしな……。

俺が部屋でくつろいでいると、窓に何かが当たる音が聞こえてくる。何かと思い外に出てみると、雨の中に傘も差さずに一ノ瀬が立っていた。
とにかく家に入れ、何があったのかを聞いてみる。
ちょっとした親子喧嘩で家を飛び出してきたかとたかを括っていた俺は、一ノ瀬の語り始めた内容に言葉を失ってしまった。
今、一緒に暮らしている両親は、本当の家族では無いということ。
本当の両親は別にいて、一ノ瀬は幼い頃に預けられたということ。
そして……今日、一ノ瀬の本当の父親が迎えに来たらしい……。
話を聞いた俺は、取りあえず居場所の無くなってしまった一ノ瀬を、家に置いてやることにした。

数日後、一ノ瀬が家に居ることが浅葉に知られてしまった。
俺が二階で着替えている間に浅葉が差し入れを持ってきて、気を利かせた一ノ瀬が応対に出てしまったらしい。
浅葉は、俺が説明をする前に帰ってしまった。早めに誤解を解かないといけないな……。
一ノ瀬は、俺と浅葉の関係を姉さんから聞いたらしい。

家に帰ると昨夜の鍋を取りに来た浅葉とばったり出会った。一ノ瀬が家に居る理由を説明して、理解して貰えることが出来た。やっぱり微妙に誤解をしていたらしい。誤解が解けて本当によかった。

クリスマスイブ。姉さんは友達のパーティーに出かけてしまった。俺は俺で、いつものメンバーが集まって、ウチでパーティーをすることになっていた。
パーティーも終わり、浅葉を家まで送っていくと、途中でクリスマスプレゼントをもらった。
懐中時計。俺が、腕時計は嫌いだということを憶えていてくれたらしい。
家の近所まででいいという浅葉を、俺は見えなくなるまで見送り続けた。

夢を見る。暗闇の中、血のニオイが充満している……背中がぬめる。喉から熱い物がこみ上げて来る……完治しているハズなのに……なぜ……。

額にひやりとした感触を感じる。姉さんが、心配そうな顔で、濡れタオルを置いてくれた。一ノ瀬がずっと付き添っていてくれたらしい。ふたりに心配をかけてしまったな……。
夕方、学校から戻ると姉さんが居なかった。買い物に行って、まだ戻ってないらしい。一ノ瀬はテレビを見て笑っている……笑える位の元気は取り戻せたようだ。それとも、無理に笑っているのだろうか？
そんなことを考えていると、姉さんが買い物から帰ってきた。なぜか浅葉も一緒に居る。買い物の途中に会って、荷物持ちを手伝ってくれたらしい。
夕食は、浅葉も含めて4人での食事になった。それぞれ一品ずつ調理を担当したらしく、品数は豊富で無国籍バイキングのような食事なった。

02

食後、みんなが一休みしていると、浅葉はひとりで後片付けを始める。なんでも進んでやるいい子だと思うが、こんな時ぐらいは気を遣わずに居ても良いだろうに……。
「どんな時でも、私たちの後輩なんだ……」
一ノ瀬の言葉が胸に響く。

「センパイ……朝ですよ。起きてください」
夢の中でまどろんでいると、遠くから声が聞こえてくる。
「センパイっ！」
「んぅ……あと5分……」
「えい！」
「ぐあぁぁ……」
心地よい世界に突然白い光が射し込んでくる……まぶしい。
「ひゃあぁ！」
突然俺の身体に重力がかかる。浅葉がのしかかってきたらしい。
「あ……と、す、すみません」
くにゅっと柔らかいものが押しつけられた。
浅葉の匂いと、甘い吐息が俺をゾクゾクさせる。心臓の鼓動がたかなる。
取りあえず着替えるからと言って浅葉を一階に戻し、ひとりでドキドキとする、そんな間抜けな朝だった。

部活の朝練が始まる。練習試合も終わり、身支度を整えていると、浅葉が話しかけてきた。どうやら、マネージャーからおにぎりとお茶のサービスがあるらしい。他の奴らに食い散らかされる前に取り分を確保しようと急いでいると、一ノ瀬が登校してきた。
「ご飯食べてないだろうから、簡単なものだけど持ってきたよ」
紙袋の中には、弁当箱とポットが2つ入っていた。
「朝ご飯と、お昼のお弁当。ののちゃんとふたりで分けてね。んじゃ、私も部室寄っていくから」
一ノ瀬は弓道部の方へ歩いていく。その後ろ姿を見ていた浅葉が
「未緒センパイ、やさしいですね……かなわないな」
と、小さな声でつぶやいた。

翌日、ビッグウェンズデーへコーヒーを飲みに行くと、浅葉がひとりで何やら作っている。テーブルに近づくと、色とりどりの紐がたくさん散らばっていた。
「ミサンガか……」
「試合になったらあたしたち何もできませんから、これぐらいしかできないんです……」
きっと、必勝の願いが込められてるんだろう……そして、俺たちはそれを身につけて試合に臨む。いつの時代にもどこかで同じことが繰り替えされている。
ちょっとロマンチックなことだと思えた。

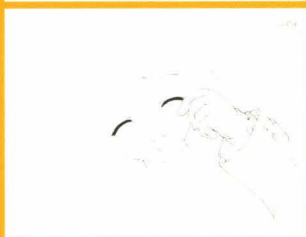
一ノ瀬が、実の父親と会う決心をした。その顔は落ち着いていて、覚悟は決まっているようだった。これなら俺がいなくても平気だろう。一ノ瀬を乗せた車は、海の方へと走っていった。ここからは、一ノ瀬の問題だ。
「……センパイ？」
俺が車の走っていった方を見ていると、後ろから浅葉に声を掛けられた。
「未緒センパイ……ですよね？　いま車に乗っていったの」
「あぁ。今日は、親父さんと話しをするって。アイツも……避けてばかりは居られないからな」
「センパイ……優しいですよね」
「仕方ないよ……急なことだったしな」
「お前、暇だったら茶でも飲んでいくか？」
何となく沈んできた空気を振り払おうと、俺は勤めて明るく浅葉に話しかける。
しかし、浅葉は用があるからとその場を去っていった。

俺が部屋で休んでいると、浅葉が入ってきた。母親の作ったシチューを差し入れで持ってきてくれたらしい。なんだかんだと話していると、今度は一ノ瀬が買い物を頼みにやってきた。浅葉が行こうとするのを引き留め、俺が行くことにする……が、一階に降りたところで、財布を忘れたことに気付く。金も持たずに何を買いにいくつもりだったんだか。
「ねぇ、ののちゃん……普段アイツのこと、なんて呼んでいるの？」
「え？　センパイのことですか？」
財布を取りに部屋の前までくると、浅葉たちの話し声が聞こえてきた。
「センパイは……センパイです」
「それじゃ学校と変わらないよ……家にいるときぐらい」
「センパイを困らせたくないんです……もう、あたしとセンパイは家族じゃないから……だから、ケジメなんです」
「で、でも……おかしいよ。だって、仲良くしてるじゃない。家族じゃなくたって……」
「ううん……これでいいんです。あたしには、センパイっていう新しい関係が出来たから……」

再会したころは浅葉のことを昔と同じように「ののか」と呼んでいた。ただ、刹那や一ノ瀬に紹介するとき、名前で呼ぶのが気恥ずかしくて「浅葉」と呼んでしまった。
そんな些細なことから、俺たちの距離は遠くなってしまったのかもしれない。

「センパイは……センパイです」

何気なく窓からグラウンドを見ると、センパイがリフティングをしていた。
1回、2回、3回、4回……。
あたしは教えて貰ったけど、3回ぐらいしか上手くいかない。
センパイは、あたしと会う前からサッカーを続けてきたと言っていた……そんなセンパイに、あたしは……。

03

「や……やだ、あたし。
なんで泣いて……」

姉さんは受験が終わり、実家へと帰っていった。一ノ瀬とふたりだけの生活。これまで姉さんがたくさんの家事をこなしていてくれたことを痛感するのに、時間は掛からなかった。姉さんだけじゃない。俺が、いままで沢山の人に助けられ、甘えていたことに気付かされた。いつまでも甘えているわけにはいかない。俺が、誰かのために出来ることを考えてみよう。
——浅葉のために出来ることを考えてみよう。

一ノ瀬が実の父親と会いにいった。アイツはアイツなりに頑張っているらしい。
このまま家にいてもしょうがないので、俺もどこかに出かけようかと思った瞬間だった。
「!?」
一瞬身体が浮いたかと思うと、全身を強烈な痛みが襲う。
「う……ううううう」
あまりの痛みに視界は歪み、うめくことしかできない。
——まさか……再発？
バカな……あのときの怪我はすでに完治しているはずだ。今頃になってぶり返すハズがない。サッカーで思いっきり走ることだって出来るようになったんだ。
ソファーを支えていた腕が耐えられなくなり、俺は仰向けに倒れ込む。
（真面目に病院に行っておけばよかったか）
一瞬、後悔が脳裏に浮かぶ。試合が近いこんなときに……なんで。
何とか意識を繋ぎ止めようと気合を入れると、徐々に波が去っていく。暴れ回っていた心臓も落ち着きを取り戻し、失いかけた意識も次第にはっきりとしていった。
——まだ……笑える
——まだ……大丈夫だ

翌日、病院に行くと検査入院が必要だといわれた。いま入院したら、確実にレギュラーからは外されるだろう。処方された薬で、なんとかごまかすことができるだろうか？

試合当日、俺は集合時間よりかなり早く起きてしまい、学校でウォーミングアップをしていた。スタメンに選ばれた俺は、それぐらいこの試合に掛けているんだ。
相手チームが到着する。
試合前に、浅葉がミサンガをくれた。このミサンガには、浅葉の想いが詰まっている。浅葉の気持ちが、ミサンガを通じて伝わってくるような気がした……。

3−2。残念ながら、試合は負けてしまった。いい試合は出来たと思う。でも……だからこそ、勝ちたかった。
だけど、不思議と気分は良かった。自分のやってきたこと、そしてこれからのことが、ほんの少しだけ見えたような気がした……。

帰り道、俺は浅葉に自分の思いを伝えた。
「俺……浅葉からもらった想いに答えられるように頑張るから。今すぐって訳にはいかないけど……見ててくれよな」
浅葉に、ミサンガを付けた手をみせる。
浅葉の想いに答えることが、俺の願い。それが叶うまで俺は……。
「せ、センパイ……」
「おいっ、浅葉!?」
「や……やだ、あたし。なんで泣いて……」
「す、すみません。それじゃあたし」
浅葉はきびすを返すと、振り返ることなく家の中へと駆け込んでいってしまった。
俺は、なにか悪いことを言ったんだろうか……。
「……司」
振り返ると、一ノ瀬が立っていた。

登校中の電車に浅葉が乗り込んでくる。昨日の涙が嘘だったように、浅葉は接してくる。
——あの涙はなんだったんだろうか？

午前中だけの授業も終わり、ざわめき始めた廊下で一ノ瀬に誘われた。せっかく午前中で終わったのだから、浅葉と三人で遊びに行こうということらしい。
待ち合わせの場所に行くと、少し遅れて浅葉がやってくる。一ノ瀬は、まだこない。
しばらくすると、一ノ瀬から携帯に連絡が入った。
「ごめーん、先生に捕まっちゃったから、先にいっててー」
ということらしい。仕方なく、俺と浅葉は一足先に横浜に行くことにした。

結局、一ノ瀬はドタキャンし、俺と浅葉はふたりでぶらぶらとすることになった。
食事をして、ウィンドウショッピングをして、甘い物を食べて……。
いつも一緒にいるのに、こうしてふたりで過ごしたのは初めてだったかもしれない。

04

「資格が無いんです……」

一緒にいることが、こんなにも自然なのに……。
「センパイ……今日は本当にありがとうございました」
楽しく遊んだ帰り道、浅葉が急に真剣な口調で礼を言う。
「……いい思い出になりました」
「そうか？　じゃあ、また今度……」
「ううん……センパイ、これから大会や受験で忙しくなるし……これ以上センパイに迷惑かけられないから……」
「いままでだって一杯面倒見てもらっているのに……これ以上センパイになにかして貰うなんて、バチが当たっちゃいます……」
「……浅葉……」
何で……何で、あんなに楽しかったのに、そんな寂しそうな顔で、そんな哀しいことを言うんだ……。
「お前……この間もそうだったけど……何を」
「資格が無いんです……」
浅葉が目に涙を浮かべながらハッキリという。
「あたしには、センパイに優しくしてもらう資格なんて無かったんです……あたしは……センパイの……側にいちゃ……」
「……さようなら、センパイ」
「浅葉！」
浅葉の背中が遠くなる……俺は、追いかけられなかった。

家に帰ると、一ノ瀬が待っていた。明日、家に帰るという。今の自分と、しっかり向かい合うんだと、そう言った。

――そして、俺はまたひとりになる……

……浅葉が泣いている。利那が、俺の足を治療してくれた。包帯を巻かれたが、怪我自体はたいしたものじゃない。
2年生の夏休み。全国大会地区予選第一日目。地方予選ということで、いろんな人が競技場に集まっていた。
浅葉は他校の生徒にからまれていた。俺はもめ事を起こしたくなかったので穏便に済ませようとしたが、そのうちのひとりと喧嘩になってしまった。そのとき足をひねってしまい、利那に治療をしてもらった。
「センパイは……今日は大事な試合だっていうのに……」
浅葉は責任を感じて、泣きじゃくっている。
「だから、もう何ともないから……嫌なことは、早く忘れろ」
「このことは、みんなに黙っていてくれ……浅葉は、責任を感じることはないんだ」
「とにかく、浅葉が無事でよかったよ」
「センパイっ」
「ほら、そんな顔してるとみんなが心配するぞ？」
結局、この試合は負けてしまった。俺の怪我がどうこうという以前に、完全な実力差だった。
浅葉はずっと泣いていた……。

「……う……ん」
……夢……か。結局、俺はあのときのことを気にしていたのか？
そして、浅葉も……。

翌朝学校に行くと、利那から浅葉がマネージャーを辞めるという信じられない噂を聞いた。まさか、あの時のことをずっと気にして……。

「……彼女はいままで、ずっと謝っていたんだな」
利那の言葉が胸に響く。
「……浅葉クンは、お前にとって……なんだ」
利那が俺に問いかける。
俺にとって浅葉は……。
「大切な……ヤツなんだ……」
俺は浅葉を探しに教室を飛び出した。

校舎内、グラウンド、駅……どこを探しても見つからない。俺は、祈るような思いで電車に乗り込んだ。
浅葉はいまどこにいるのか……俺はそれだけを考えながら、窓の外を走る風景を眺めていた。
電車が一台のマウンテンバイクを追い抜く。
――一ノ瀬と……浅葉だった

電車がホームに滑り込む。俺は満員の電車から飛び出す。ホームの向こうには、話をしている一ノ瀬と浅葉の姿が見える。
……浅葉っ。
足から急に力が抜ける。だが、ここで倒れるわけにはいかない……俺は、アイツに伝えなきゃいけないんだ。
「センパイ！」
「司！」
俺の方に駆け寄ってくるふたり。視界がぼやけていく。
「センパイ！　しっかりして下さい！」
抱き留められ、そして優しく包み込まれる。
俺は……なんで気付かなかったんだろう……こんなに近くにあったのに……。
「ゴメン……のの……か……」
視界が闇で塗りつぶされていく……。

05

「センパイ……今、どんな夢を見ているんですか……」

センパイの病室へ行く。そこには、昨日と同じ風景が広がっていた。10ヶ月前から何も変わらない病室。時間だけが静かに流れていく……。
「センパイ……今、どんな夢を見ているんですか……」
アタシはセンパイのいるベットに顔を埋めると、静かに眠りに落ちていった……。

「お帰りなさい。今日は早かったね……」
「春から茜坂に通うの？　あたしも……受けようかなぁ」

「お疲れさまです。今日からマネージャーになりましたっ」
「よろしくお願いしまーす」

「センパイ……ごめんなさい……ごめんなさい」
「今日は大事な試合だっていうのに……」

「あたしには、センパイに良くして貰う資格なんか、無かったんです……」
――ののか……俺は、お前に会って、もう一度……。

白い天井……足下に暖かく、柔らかい重みを感じる。微かな匂い……。
「のの……」
俺は、何度コイツに悲しい思いをさせれば気が済むんだ……。
小さな肩をそっと揺する。
「セン……パイ……」
「……スマン。驚かせちまったな……」
「ううん……センパイと……また……こうやってお話することが出来ました」

それからの俺は、様々な検査をすることになった。
色々な人に泣かれ、色々な人に怒られた。
俺の周りは、こんなにも大事なもので溢れていたと、あらためて思い知らされた。

その後の経過は良好。リハビリの成果もあり、松葉杖を使えば何とか歩ける程度にまで回復していた。
ののには相変わらず迷惑を掛けている……倒れる前と……何も変わっちゃいなかった。

俺は転びそうになりながら、坂の上を目指す。時計は10時をまわっている。どうせ休学中の身、遅刻は気にする必要はない。一歩一歩、確実に坂を上っていく。

学校に着く。俺の姿を見つけたののが駆け寄ってくる。
俺は、自分の思いをののにぶつけた……だが、ののの想いは結局聞けないままだった。
――俺たちの関係は……とっくに壊れていたのかな……。

保健室で休んだ俺は、家に帰ることにした。早く元気になって、元の生活に戻ろう……これ以上、ののを悲しませる訳にはいかない。
――これからはひとりで……。

「センパイ！」
　校門を抜けようとしたところで、ののの声が聞こえる。
　俺は、彼女の真剣なまなざしに見つめられて、身動きがとれなくなった。
「あたし……ずっと考えてきました。あたしにとってセンパイは、いつも気に掛けててくれて、側で見守っててくれた……優しいお兄ちゃんになってくれた……」
「でも、あたしは妹になれなかった……」
「だからせめて……後輩でもよかったんです……」
「でもあたしはまた……あたしには、資格がなかったんです。センパイに何も出来ないあたしなんて……側にいる資格が無かったんです……」
「バカいうなっ」
「俺は、お前が居てくれたから……今までやってこれたんだ」
「俺は、ののと一緒にいて……嫌だったことなんて一度もなかった……うれしかった……」
「お前のことが好きだから」
「センパイ……あたしも好き……大好きなんです……」
　俺はののを抱きしめた。ののは、俺の胸のなかで泣きじゃくった。
　俺とののは、お互いのことをずっと見ていた……相手のことが気になって、傷つけまいとしていた……。
　でも、本当に大事だったのは、ふたりで解決していくことだったんだ……。

──その日俺たちは、兄妹でも、先輩後輩でもない新しい関係になった……。

「センパイ……あたしも好き……大好きなんです……」

「……おにいちゃんと……こうしてることが……
いま……すっごく……うれしい……」

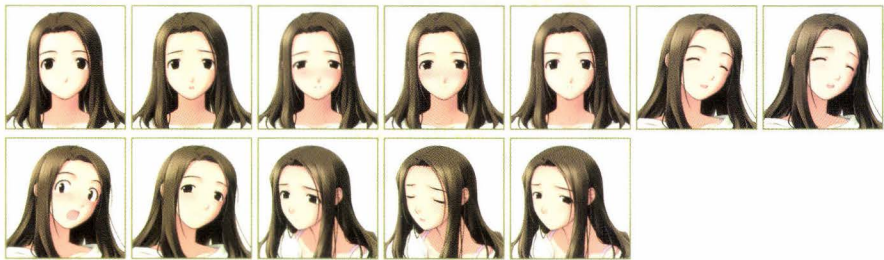
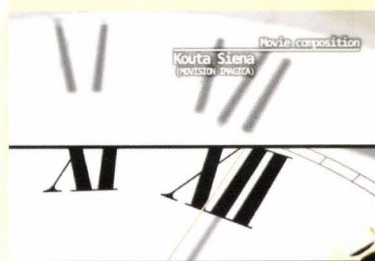
08

３月。
今日、一ノ瀬たちは卒業をしていく。寂しくないと言えば嘘になる。でも、昔の級友たちの輪の中で嬉しそうにしているあいつ等を見ても、不思議と暖かい気持ちになれた。

――俺は、ののと一緒に新しい道を歩きだした。

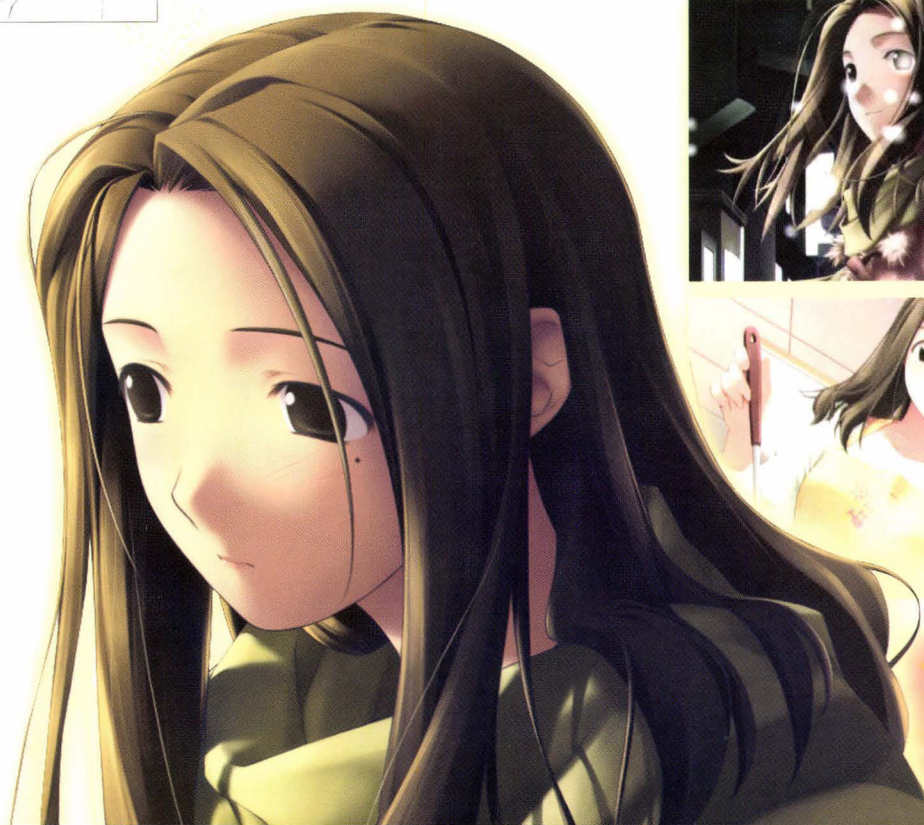
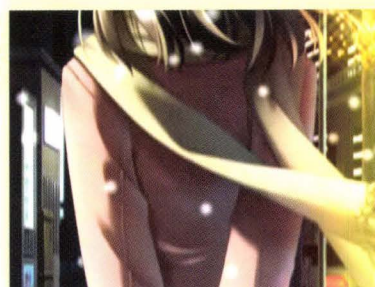
遠峰　凪沙

司の父方の従姉弟で、姉のような存在。幼い頃に近所に住んでいて、司を弟のように思っている。落ち着いた雰囲気を持つ大人の女性だが、年下の司をからかうお茶目な部分も持っている。現在浪人生で、受験準備のために司の家で生活することになる。

Other Face

Other Fashion

小さいころ、家の近所に歳の近い従姉弟の姉さんが住んでいた。
良く遊んでもらったが、おてんばだったのを憶えている。
久々に会った姉さんは、落ち着いた大人の女性になっていた……。

01

「ねえさ……」

「きゃあ!?」

「あら、お帰りなさい」
「ただいま」
親父とのふたり暮らし。その親父も仕事で家を留守にしがちで、ほぼひとり暮らしな俺にとって、いつもとは違う生活が始まった。
「お腹空いてる？」
「まぁ、そこそこには」
「じゃあ、そろそろ準備はじめたほうがいいね」
従姉弟の凪沙姉さんが大学受験の準備も兼ねて家に泊まり込み、ついでに俺の世話をしてくれるように親父が手を回していたらしい。
キッチンに立つ姉さんの後ろ姿は、まるで新婚の奥さんみたいだった。

俺の記憶ではもう大学に行っているはずだったが、昨年の入試では運悪く風邪をひいてしまい、本来の力を出せずに留年してしまったらしい。姉さんは「今年こそは」と気合を入れているようだ。俺も、姉さんの邪魔にならないように気を付けないといけない。

俺が部屋でくつろいでいると、窓に何かが当たる音が聞こえてくる。何かと思い外に出てみると、雨の中に傘もささずに一ノ瀬が立っていた。

「司ちゃん……はい、タオル」
凪沙姉さんがタオルを持ってきてくれた。
「だ……誰？」
姉さんのことを知らない一ノ瀬は、一瞬身構えてしまう。そんな彼女を気遣って、姉さんは温かい飲み物を煎れに、キッチンへと下がっていく。
ちょっとした親子喧嘩で家を飛び出してきたんだろうとたかを括っていた俺は、一ノ瀬の語り始めた内容に、言葉を失ってしまった。
話を聞いた俺は、取りあえず居場所の無くなってしまった一ノ瀬を、家に置いてやることにした。

一ノ瀬が家に来てから数日。初めは居心地の悪そうだった一ノ瀬も、姉さんが家事を任せたり、ウチでの仕事を分担させてアイツの居場所を作ってくれたことで大分打ち解けてきた。正直、俺ひとりだったらもっと重苦しい空気が続いただろう。姉さんは受験が控えているのに、一ノ瀬のことまで考えてくれている。

翌朝、リビングに降りていくと姉さんが大事そうに何かを眺めていた。パッと見は写真のように見えたが、姉さんにとってのお守りのような物らしい。何が写っているのか判らないが、御利益があるといいな……。

「ねぇ、ちょっと」
一ノ瀬が俺を呼びに来る。
「お鍋吹いてんだけど？」
「見てないで止めろよ！」
いくら姉さんの料理だからって、状況判断ぐらい出来るだろうに……。
俺は鍋の火を止めると、姉さんを呼びに部屋へと向かった。
「ねえさ……」
「きゃぁ!?」
扉を開けると、見慣れない格好をした姉さんの姿と悲鳴が飛び込んでくる。
後から上がってきた一ノ瀬に、しこたま怒られたのは言うまでもなかった。

クリスマス。特に予定の入ってない俺たちは、三人で簡単なホームパーティーをした。骨付きの鶏もも肉に唐揚げ、手作りケーキと家庭的だが楽しいパーティー。
姉さんが留学先で教えられた「親しい人を家に呼ぶのが一番のおもてなし」というのが良く分かった夜だった。

年が明けて一月。勉強中の姉さんに差し入れをして、意外な目標があることを知った。姉さんは、海外の日本人学校で教師がしたいらしい。ホームステイをしたときに、日本人学校の人たちに親切にして貰い、自分も海外で頑張ってる人たちの手助けをしたり、日本のことを海外に紹介したいと思ったのがキッカケだそうだ。
姉さんの夢……叶うといいな。

背中が引っ張られる感覚。背中に冷たい床の感触を感じる。一面の闇……。身体を起こそうと手をつくと、ぬるっとした感触が絡みつく。鉄の匂い……血。
意識がぼんやりとしていく……。

額に冷たい感触。目が覚めると、姉さんが心配そうな顔で俺を見ていた。気分は嘘みたいにスッキリしている。きっと、疲れが溜まっていたんだろう。
一ノ瀬がずっと付き添っていてくれたらしい。

「司ちゃん……もう少しだけ、考えさせて」

✲02

姉さんに付き合って買い物に行く。必要な食料、日用品などを買い込み、お茶でも飲んで休憩しようと駅前へ行くと、急に姉さんの動きが止まった。
　視線の先にはチャラチャラとしたカップルが居た。
「京介くん……」
「っ……凪沙……」
　姉さんの姿をみた男の顔に、明らかに狼狽の色がみえる。
「誰？　元カノ？」
「いや……知り合いだ」
　脇にいる派手な女の問いに、京介という男は否定をする。しかし、姉さんとの関係は一目瞭然だった。
「まさか……今年も受けるのか？」
「うん……」
「んじゃ……俺行くよ」
　二人はどこかへ消えていった。
「へ、へんなとこ見せちゃったわね……」

　姉さんは家に帰り、晩ご飯の片づけが終わると部屋に引っ込んでしまった。
　一ノ瀬も心配しているが、まだ……そっとしておこう。

　翌朝、姉さんは何事も無かったかのように家事をこなし、出かけていった。
　俺たちと違って大人だから……ひとりで解決するんだろうか。俺には、何も出来ることがないんだろうか……。
　気になった俺は、姉さんの後をついていくことにした。
　何も出来ないかもしれない。それでも、確かめたかった。姉さんのことが心配だから……姉さんの力になりたいから。

　いつもの通学路……そこに、姉さんと京介の姿があった。
「誤解すんなよ、この間の女はただのツレで、別に……」
「……付き合ってるの？」
「ンなことねぇよ。ただのダチだ……」
「そ、そうだ、そっちこそ、一緒にいた男誰なんだ？」
「あ、いや、別にいいんだ。俺だって放って置いたんだし……」
「何言ってるの？　京介君……」
「そっちもそっちで上手くやってんのか？」
　京介のその言葉が聞こえた瞬間、俺は耐えられなくなった。
「姉さん!!」
「つ……司ちゃん!?」
「……ねぇ……さん？　おい、男まで連れてきたのかよ？」
「俺が勝手についてきただけだ」
「あ？　何だよ。文句でもあんのか？」
　突然現れた俺に一瞬ひるんだ京介だったが、何とか体勢を整えようと、必要以上に挑戦的になる。
「誤解してるようだから、はっきり言っておく。凪沙姉さんは俺の従姉弟だ」
「い……とこ……ざけんな！」
「そっちこそ都合が良すぎないか？」
「あぁ!?」
「先に裏切ったのはどっちだって言ってんだよ……」
　俺は、殴りかかりそうな自分を押さえて、京介に言う。
「やめて……お願いだからやめて……」

　結局、俺は姉さんと京介の幕引きを早めてしまった。あそこで出ていかなければ良かったんだろうか？
　最悪の結果を招いたことに、今更ながら罪悪感を感じてしまう。

　家に帰ると、姉さんは京介のことを話してくれた。
　出会ったのは2年前。京介の方から姉さんに声を掛けてきたらしい。そして、受験のときも志望大が同じで、一緒に勉強して、一緒に合格しようと約束をしていた。
　しかし、姉さんは風邪を引いて浪人。
　それでも、京介は待っていると言ってくれたらしい。だから、姉さんはなんとしても合格するために、会いたい気持ちを我慢して勉強を続けていた。
　ただ……皮肉にも、その会えない時間が二人の距離を離していった……姉さんはそう言っていた。

　あの日から、姉さんはぼんやりとすることが多くなった。
　すぐに吹っ切れることじゃないのは判っている。
　受験までもう少し……姉さんは、アイツと同じ大学へ行くために頑張ってきた……受験……大丈夫なんだろうか？
「姉さん……受験……しないの？」
「…………」
「夢……諦めちゃうの？」
「司ちゃん……もう少しだけ、考えさせて」

03

姉さんと夕食の買い物に出かける。いつもと同じ笑顔で、いつもと同じように日用品や食材を買う姉さん。あの日も、こんな感じだった。
姉さんは、買い忘れがあるとかで店に戻っていった。俺は、買い物袋をぶら下げて待っているのも恥ずかしいので、本屋で時間を潰すことにする。
書店に入って目に留まった「入学願書販売中」の文字。姉さんが受けるはずの藤沢大学の願書も置いてある。
──俺は、藤大の願書を手に取ると、レジに持っていった。
「あっ……と、すみま……せ」
書店を出たところで人とぶつかってしまった。謝ろうと相手の顔を見たところで、思わず言葉が出なくなる。
……京介。
「なんだ、まだ文句言い足りないのか？　それとも……俺が謝ってヨリを戻せってか？」
「別に、アンタには何も期待なんかしていない」
僅かに身構えるような京介に対し、俺は冷静に言葉を続ける。
「姉さんの気持ちも考えずに……どうして……最後まで聞いてやらなかったんだよ……」
「さびしかったのは……アンタだけじゃない」
「二人とも……」
……姉さんが戻ってきた……手に持っていた荷物がどさりと落ち、中に入っていた物が俺の足下に転がってきた。
「……この前は言い過ぎた……待ってやれなくて……ゴメン」
京介はそう言うと、雑踏の中に消えていった。

夜、部屋で願書を眺めていると、一ノ瀬がお茶を呼びにきた。とっさに願書を隠したが見つかってしまった。
俺は、一ノ瀬にすべてを話した。
「司が考えていることをすれば良いんだよ」
俺の話を聞いた一ノ瀬は、そう言ってくれた。

一ノ瀬が実の父親と会いに行く。今日は、先方の希望もあって、俺も同席することになった。一ノ瀬の親父さんと一緒にレストランで食事をし、俺は適当なところで先に帰ることにした。親子の会話も大事だろう。
帰りがけ、駅の方へと向かっていく姉さんの姿を見つけた。
どこか不安げな姉さんの様子に、心配になった俺は後をつけていく。
姉さんは本屋に入ると、藤大の願書を見つめて居たが、買わずに店を出てきてしまった。
まだ……心の整理はついてなかったんだ。
いつもと同じように笑っていた姉さん……。
結局、俺は何もしていないのと同じだった。普段のように振る舞って、逆に気を遣ってくれていたのは、姉さんのほうだったんだ……。

2月。一ノ瀬が家に帰った。
──アイツは心の整理がついたんだろうか？
──姉さんの心はどうなんだろう……。
──そして、俺の心は？

今日の夜は外食だった。姉さんオススメの創作和食の店。値段は高そうだったが味に文句はなく、楽しい時間を過ごせた。
一ノ瀬が居なくなってからの食卓は、少し寂しかったので、いい気分転換になった。

「本当に私がしたいことは何か……。
彼と出会えたとしても、
その先にあることを考えなきゃいけなかったの」

04

それでも……メニューが終わりに近づき、デザートを食べる頃になるとやっぱり寂しさはやってきた。

帰り道。姉さんは俺の前を歩く。いつもと違い、細く、か弱く見える。手を伸ばせば届く距離に居る……。今まで、俺は姉さんの優しさに甘えてばかりだった。

俺は……姉さんの手を引いてでもゴールへ連れて行くべきなのだろうか？

俺は……前に語ってくれた夢まで……諦めて欲しくない。

俺は……最後まで……姉さんを……

「司ちゃん」

俺が決心を固めたとき、姉さんが歩きながら言う。

「未緒ちゃんが、何で家に帰ったかわかったわ」

「私のためだった……」

「本当に私がしたいことは何か……。彼と出会えたとしても、その先にあることを考えなきゃいけなかったの」

「姉さん……」

「ありがとう……。二人が私のこと、すごく大切に想ってくれてたの……感じてた」

「司ちゃん……私………やめないわ」

そう言って振り返った姉さんの顔に、もう迷いは無かった。真っ直ぐな瞳で見つめてくる姉さんは……とても綺麗だった。

受験当日。姉さんは気合充分で受験会場へと向かった。今の姉さんなら、きっと合格するだろう。俺はそう信じていた。

姉さんを見送り、俺も学校へ行こうとした瞬間、俺の身体に電流が走ったような衝撃が襲う。

「く……な……なんで」

全身を痛みが支配する。あまりの苦痛に視界が定まらない。身体が言うことを聞かない。

――まさか……再発？

「よりによってこんなときに……」

意識が遠くなっていく……しかし……まだだ。

まだ……姉さんが……合格を決めるまでは……。

必死の思いで意識を繋ぎ止める。

やがて、暴れていた心臓も落ち着きを取り戻し、痛みも波が引くように去っていく。

――まだ……保ちそうだ。

夜、姉さんの帰ってくるころを見越して、ささやかながらねぎらいの準備をしていた。男の手料理でたいした物は出来なかったが、それでも喜んで貰えた。食事が終わり、風呂に入った姉さんはかなり眠たそうだったので、早めに寝かしつけた。きっと、今までの疲れが一気に出てきたのだろう。

俺は、今まで姉さんがしてきてくれた後片付けをしている。皿を洗い、テーブルを片付け、余り物の処理をする。姉さんが今までしてくれたことの重みが改めて判った。俺は、どんなにか姉さんに甘えていたんだろうか……。

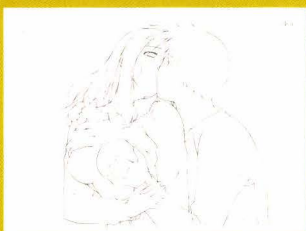
従姉弟である姉さんは、実の姉以上に俺と接してくれた……。

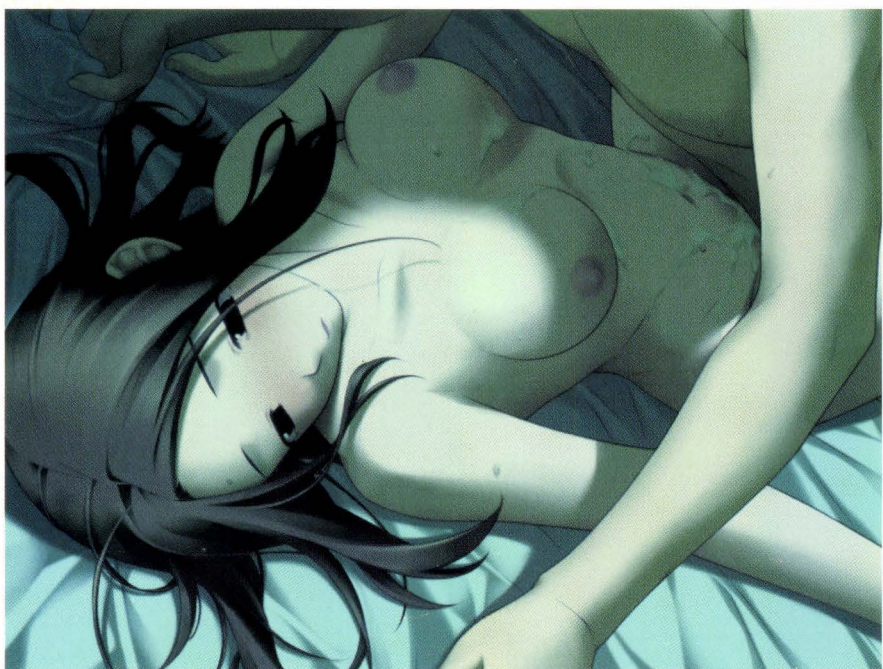
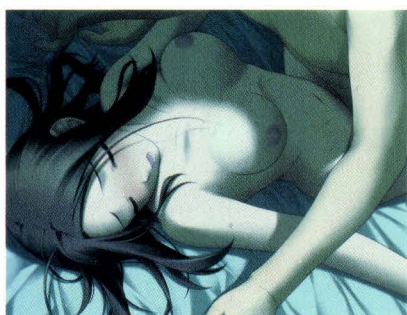
もし。

もし、姉さんと俺が従姉弟ではなく、赤の他人だったら、どんな関係になっていたんだろうか？

――姉さんのことを、こんなに意識したことは無かった。

「司ちゃん……私…………やめないわ」

05

明日……親父が帰ってくる。
明日……姉さんは実家に帰る。
当然のことだ。姉さんは、受験のためにウチに来ていた。親父がいないから、俺の面倒も見てくれていた。
受験は終わった。親父も帰ってくる。姉さんがウチにいる理由はなにもなかった。
──悲しい
俺は、自分の気持ちに気付いて愕然とした。寂しいではなく、悲しい。それが、姉さんが居なくなることに対しての、俺の感情だった。
「姉さん……俺……」
「従姉弟としてじゃなく……姉さんのことが……好きなんだ」
「司ちゃん……」
姉さんは俺を優しく抱き寄せてくれた。俺も、姉さんのことを自然と抱きしめた。
「司ちゃん……私でいいの？」
「うん……」
姉さんは、静かに目を閉じた。
俺は姉さんに口づけをする……甘い香りが漂ってくる。

ベッドの上……姉さんは、生まれたままの姿で俺の前に居る。俺は、姉さんと一つに……。

❄08

「あなたはひとりじゃない……私がいるから……」

……違う。
俺の中で、もうひとりの俺が叫ぶ。
姉さんは……まだ、振り切ってはいない……。
俺の気持ちを受け入れようとしてくれる姉さん……。
──俺はまた、同じ過ちを繰り返そうとしている。
俺は姉さんから身体を離した。
「姉さん……ごめん」
「ううん……私が悪いの……司ちゃんが気にしているのは判ってたの……でも、司ちゃんの気持ちが嬉しくって……忘れたくって……」
「司ちゃんを、受け止めてあげたかった……」
気持ちは通じあっているのに……踏み込めなかった。
でも、焦ることは無いのかもしれない。
──こんなに、相手のことを考えているんだから。

姉さんは実家に帰った。
住み慣れた家だというのに、広く感じる。何かが足りない……。
学校から帰ると、留守電が2件点滅していた。一件はオヤジから。もう一件は姉さんからだった。合格発表は今週の土曜日だという。
俺は、姉さんの実家に電話をして、一緒に発表を見に行くことにした。

土曜日。姉さんとの待ち合わせ場所、藤大の校門前へ向かう。すでに発表を見た受験生たちが、歓声を上げたり、泣き崩れたりしている。
もうすぐ姉さんのやってきたことの結果がでる。姉さんの長かった冬が終わる。
俺は、一番最初におめでとうと伝えたかった。

約束の時間まで後少し。姉さんが遅刻するということは無いだろう。
すぐ……ここに……。
──目眩がする。
姉さんが来て……。
──周囲の音が遠くなる。
ふたりで……ごうかくはっぴょ……
──周りの景色がフェードアウトしていく
「あ、司ちゃーん……司ちゃん!?」
──地面が近づいてくる……。

司ちゃん……お寝坊さんだね……。みんな、司ちゃんに会いたがっているよ？
私……待つことには慣れているから……。
ずっと、側にいるね……。

──姉さん……なんで泣いているの？

背中がむず痒い……周囲で人の声がする……。
ここは……病院？
「司ちゃん……」
「ね……姉さん」
「おはよう。気分はどう？」
姉さんはいつもと同じように微笑んでくれる。
「ゴメン……俺は……大切な……」
「大切なのは司ちゃんのほうよ……」
「だから……本当によかった……」
「姉さん……大学は……」
「うん……司ちゃんのおかげよ」
姉さんは、泣きそうな顔で微笑んでくれた……良かった。

それからの数日。姉さんは、看護士さんより厳しく俺に安静をすすめた。その御陰もあってか、俺は順調に回復していく。姉さんは、毎日お見舞いに来てくれた。

「10ヶ月か……」
我ながら、随分と長い間眠っていたもんだ。
「司ちゃん……」
俺のつぶやきを聞いた姉さんが、優しく抱きしめてくれる。体中の筋肉がそげ落ち、満足に動くことができない俺の身体が、柔らかく、心地よい温もりに包まれる。
「大丈夫だから……」
俺はその言葉を聞いた瞬間、ふっと力が抜けた。
一ノ瀬……春日……利那や浅葉……そして、部活のみんな……。
みんな、俺を置いて先に行ってしまった気がする……。
でも、それは取り戻せる……これからの俺でも……。
「あなたはひとりじゃない……私がいるから……」
「司ちゃんをずっと待っててあげる……」
「一緒に歩けるようになるまで」

05

3月。
俺はようやく松葉杖で歩けるようになった。
学校へ行くと、みんなそれぞれの道を歩き始めていた。
俺も負けずに自分の道を歩いて行かないと。

帰り道。線路にはまらないよう、苦労して歩いていると、見覚えのある顔に声を掛けられる。
「もう……良くなったのか？」
──京介。
「凪沙……いま、お前ん家に居るのか？　お前の世話でかかりっきりなんだな……」
「……何がいいたい？」
「その様子じゃ何も聞いてないようだから、俺が言ってやる」
「アイツに……留学の話が来ている」
「研修を兼ねた留学だ……アイツ、日本語学校の教師になりたいって言ってたよな……」
「チャンスを活かすのは、アイツしだいさ」
京介はそれだけ言うと、振り返りもせずに去っていった。
留学……姉さんの夢……。
アイツがわざわざ言いに来たってことは……。

家に帰ると、玄関前で姉さんが待っていた。
やっぱり、いつもと変わらない笑顔で迎えてくれる姉さん。
……俺は、こんな形で姉さんを縛り付けていいのか？　それじゃ、今までとなにも変わってないんじゃないか？
今、姉さんにとって大事なのは俺じゃない……。
俺は……もう、決めた。
──出遅れた一年を取り戻すために。

「姉さん。留学の話……受けた方がいいよ」
「つ、司ちゃん……どうして」
「京介から聞いた。姉さん、行った方がいい」
「でっ、でも……司ちゃん」
「俺だってこのままじゃない……出遅れた一年を取り戻すために頑張るんだ」
「姉さん……一緒にこれからのことを考えようよ」
「俺、姉さんにサッカーやってる姿を見せたい」
「それに……姉さんが先生やってる姿見たいよ」
「司ちゃん……」
俺の胸で泣く姉さん。
今度は、俺が優しく抱きしめる番だった……。

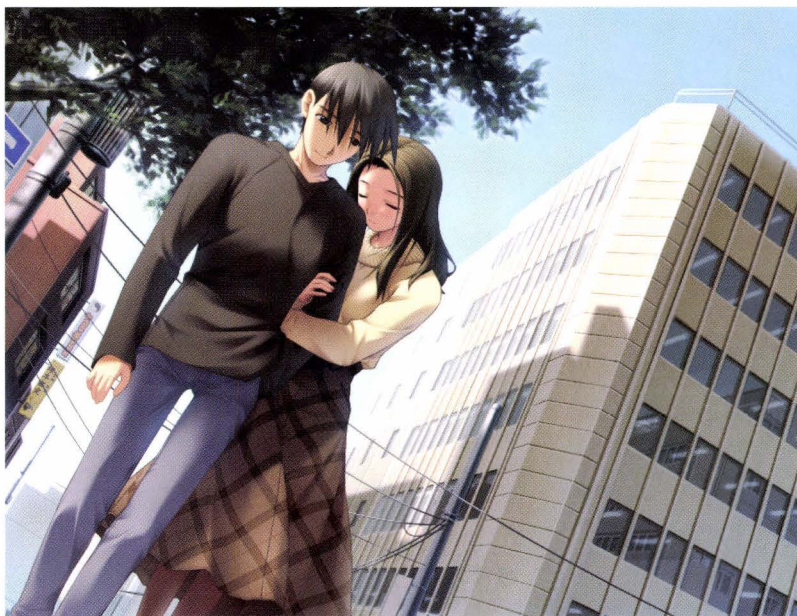
「司ちゃん……私……行ってくるわ……。
……待っててね……」

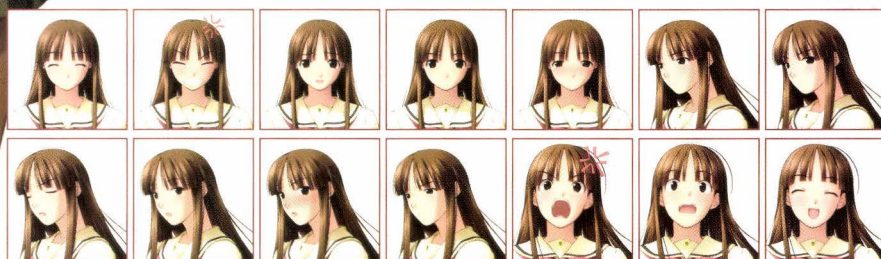
❄08

それからしばらくして、姉さんは旅だって行った。
それを俺は見送り……帰途についた。
これから俺も……自分のために……。

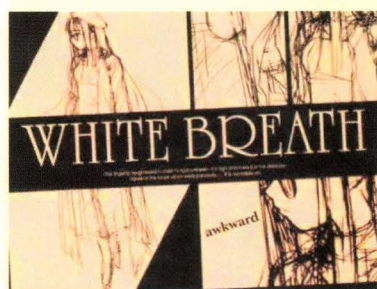
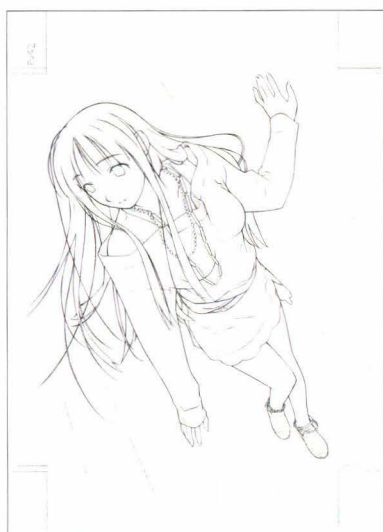
——春風が吹いた……

——俺たちの冬は終わり……これから……

柊　歩

hiiragi,AYUMI

St.エルシア学園の2年生。幼いころからモデルとして仕事をしており、自分に厳しく、立ち居振る舞いも颯爽としている。早くから社会に出ているせいか自分の未来にしっかりとした目標を持っているが、母親との確執があり家庭内に問題を抱えている。

出会いは偶然だった……そんな言葉を良く聞く。

でも、運命による必然の出会いもあると俺は思う。

少なくとも、彼女との出会いは必然だったんじゃないかと……。

01

喫茶、ビッグウェンズデー。春日の叔父がやっている店と言うことで、俺たちの溜まり場にもなっている喫茶店だ。ここのマスターは俺たちのことを客だと思ってないらしく、無下に扱われることも少なくない。刹那とコーヒーを飲みに行ったこの日もそうだった。

「おい、おまえらどっちかパシリになれ。そこら辺に客が忘れてった手帳があるから届けろ。小田急線の駅前にいるベレー帽被った女だ」
目の前に出されたコーヒーに口を付ける前に雑用を押しつけられる。マスター曰く、
「俺が居なかったら誰が店やるんだ？」
仕方なく俺が手帳を届けるはめになった。

3つの線が乗り入れる駅前は、帰宅ラッシュでごった返している。
「ちょっとあなた」
持ち主が見つけられずに右往左往していると声を掛けられた。
「もしかして忘れ物を届けに来てくれたの？　ありがとう、助かったわ」
帽子やサングラスで顔を隠しているのでよくは見えないが、その下の顔は間違いなく美人だった。何をしている人なんだろうか？
「じゃあ急ぐから……お礼はまた今度するわね。あ、これ名刺」
『柊　歩　モデル』
名刺にはそう書かれていた。

学校の帰り道。いつもの坂を下っていると、何かの撮影が行われていた。邪魔をしないよう、さっさと通り過ぎようとすると、ひとりの女の子が近寄ってきた。
「やっぱり……もしかしたらって思ってたんだけど。この間はありがとう。あの時は急いでたんで、ごめんなさい」
「そう言えば、名前聞いてなかったわね？」
「あぁ、俺は相模。相模　司」
「相模君ね。私は……名刺にも書いてたと思うけど、柊　歩」
「そうだ、これからお礼したいんだけど、今日これから時間とれそう？」
「いやいいよ。たいしたことじゃないし」
「スミマセンね、わざわざ」
俺が断ろうとすると、横から刹那がしゃしゃり出てくる。
「……どなた？」
「失礼、この男の学友、鳳　刹那です。以後お見知り置きを」
「はぁ……」
その後、礼を断ろうとする俺は、刹那に押し切られる形でビッグウェンズデーに行くことになった。店では俺の学校生活のことや、柊さんの仕事の話などをして別れた。

翌日、駅前に行くとたまたま会った刹那に拉致られてしまった。途中でオーディション帰りの柊さんと出会った。そして、俺たちの目の前で刹那が指差した壁には……柊さんがモデルになった献血ポスターが貼られていた。
柊さんは知り合いに見られてちょっと照れてるが、清純なイメージがよく似合っている、いいポスターだと思う。
刹那は「意図にあわせてイメージを作るのはさすがだ」などと、いつも通りの表現で彼女を怒らせていた。

学校の帰り、駅前に行くと柊さんと刹那が何やら話している。刹那の性格に慣れていない彼女は、一方的に苦手意識を持っているようだ。
「普段のほうが表情が豊かだな」
刹那は、そんな言葉を残してその場を去っていく。
俺は、その言葉は意外と当たってるかもしれないと思った。

ブラブラと駅前を歩いていると、大荷物を持った柊さんと出会った。これから横浜の倉庫街で撮影らしい。どうせ予定もなく暇だった俺は、彼女を手伝って撮影に同行することにした。撮影の度にこんな荷物を抱えてたら移動だけでバテてしまうだろうな……。
横浜に着くと、すぐに撮影が始まる。俺もただ立っているのは暇だったので、他のスタッフと一緒に人止めの手伝いをすることにした。
撮影中の彼女は本当に綺麗で、道行く人たちも足を止めてため息をつく人もいる。俺も人止めの仕事を忘れて、見とれてしまった。

二度目の荷物持ちのバイト。柊さんにスタッフの人たちに紹介して貰い、人止めの手伝いをした。彼女はモデルとしてだけでなく、スタイリストとしての役割を追うことがあるらしい。
スタジオでの晴れ着撮影の終了後、彼女がいつもしているペンダントの話を聞いた。
「これはね、父からのプレゼントなの」
「私が貰えた物って、これだけだったから……だから、いつも身につけてるの。仕事してるところを見ていてほしいから……」
「オヤジさんは……」
「……小さい頃に死んじゃった」
「悪い……」
「気にしないで」
彼女は鎖をつまみ、ペンダントを小さく揺らしていた。

撮影の休憩中、柊さんの肩を揉んでやる。想像より華奢で、ちょっと力を入れると折れてしまいそうだった……女の子って、みんなこんなもんなんだろうか？
「んぅぅ……きもちいい」
猫のようにのどを鳴らす彼女。刹那が言っていたセリフを思い出す。
――普段見せない、無防備な表情。
――仕事時の顔とのギャップ。
何となく、本当の彼女を見られたような気がして、ちょっと得した気分になれた。

「私が貰えた物って、これだけだったから……
だから、いつも身につけてるの。
仕事してるところを見ていてほしいから……」

❄02

駅前で柊さんと待ち合わせ。運悪くというかなんというか、刹那が待ち合わせ場所にやってきた。相変わらず彼女の神経を逆撫でしている。
「いーーーーっだ！」
――パシャッ！
彼女が癇癪を起こしたところで、刹那が突然シャッターを切る。
「さすがモデルさんだ。良い表情をする」
「ちょ、ちょっとやめてよ」
「前よりも良い表情をするようになった」
刹那は、目的は果たしたとばかりにその場を去っていく。
「ねぇ、あなたの友達なんとかなんないの？」
柊さんは心底困ったような顔で俺に助けを求める。
「ま、アイツの言うこともあながちはずれじゃないさ」
普段の言動は意味不明なことが多いが、それでもポイントを的確に押さえているのが刹那ってヤツだ。
それに、彼女の表情に関しては、俺も刹那の言っていることは間違っていないと思う。
「……素直に納得できないけどね」
「俺も、いいもの見せて貰ったよ」
「もう！　あなたまで」
……なんとなく、刹那が彼女をからかう気持ちが分かったような気がする。

今日もスタジオでの撮影。カメラアシスタントが欠勤してしまい、急きょ代役をやらされる。プレッシャーに押しつぶされそうになっている俺を見て、柊さんは終始笑っていた。カメラマンには筋がいいって誉められたらしいけど……緊張しっぱなしで、自分が何をやっていたか正直あんまり憶えていなかった。

駅前に行くと、柊さんがいかにも不機嫌そうな顔をして、早足で歩いていく。声を掛けると、これから撮影で使う衣装を運ぶらしい。
俺は彼女の後に付いて、店に入っていった。
彼女は一心不乱に服を選んでいる……と、店員さんが恐る恐る話しかけてきた。
「あ……あのぉ」
「あぁ、此花さん、この5着借りていくわね」
彼女はこともなげに告げる。
「そ、それは困ります！」
「明後日には返すわ」
彼女はかなり強引に服を持ち出してきた。
突然の出来事に俺が困惑していると
「気にしないで……私の家の店だから」
とだけ言って、さっさと現場に向かってしまった。

クリスマス。彼女の仕事が終わってから一緒に食事をする予定だったが、思いのほか仕事が押してしまい、ドーナツ屋での軽食になってしまった。
それでも、彼女と過ごす時間は楽しく、あっという間に過ぎていく。
帰り際、クリスマスプレゼントにお菓子を貰った。口に入れると、ちょっと甘く感じたのは気のせいだろうか？

年が明けて二度目の日曜日。てっきり撮影があると思って予定を空けておいたら、今日は休みだった。
特に目的もなく駅前をブラブラしていると、またもや刹那に拉致される。そこには、キャンギャルの格好で試供品を配っている柊さんの姿があった。
……こいつはどこから情報を仕入れてくるんだか。
俺たちの姿も見つけた彼女は、あからさまにアッチ行けというオーラを出している。ひとしきり彼女をからかった刹那は、またドコへともなく去っていった。

❄03

翌日はスタジオでの撮影だった。何度か柊さんの付き人として同行している内に俺の顔も覚えられ、今では何でも屋として雑務を請け負っている。最初は判らない世界で一杯一杯だったが、最近は仕事が楽しくなってきた。
柊さんの選んだ服も認められ、スタイリストさんに店を紹介して欲しいと言われたらしい。彼女の行動が、売り上げに貢献してると言うことだ。

今日もスタジオでの撮影の前に、衣装を借りていくことになった。行き先は、当然あの店。
前回と同じように柊さんが服を選び、店員さんがオロオロしていると、店の奥から店長らしき女性が出てきた。
柊さんは店長らしい女性……おそらく母親との激しい口論の末、強引に服借りて店を出る。俺は、その場の重苦しい空気に耐えられず、飛び出すように店を出た……。

部屋が暗い……いや違う。俺の視界が真っ暗なんだ……。一面に広がる闇。足下にはなま暖かい液体が満たされている……血。俺の意識はそのまま暗闇に落ちていく……。

目覚めた時には気分はスッキリとしていた。姉さんがベッドの脇で心配そうに見つめている。最近色々と忙しかったから、きっと疲れが溜まっていたんだろう……。
念のために病院にいってみた。一応薬は処方されたが、一度本格的な検査が必要だと言われた。
不安が頭に重く張り付く……。

……遅い。いつもなら時間前にやってくるのに……。
と思っていたら、非常に不機嫌そうな顔で柊さんが待ち合わせ場所にやってきた。
今日は、また服を何着か取りに行くって言っていたから……多分、また何かあったんだろう。

結局、スタジオについても彼女の機嫌は直らず、その上スタッフの段取りも悪く撮影が何度と無く中断、スタジオの雰囲気は最悪だ。
いつもと違って感情の切り替えが上手くいかない彼女は後回しにされ、スタジオの隅でぽつんと座っている。
それから1時間後。スタジオの空気は更に悪くなり、見かねたクライアントが休憩を提案し、スタッフが次々とスタジオから出ていく。

「初めて……子供服のモデルに推薦してくれたのって、お父さんだったの」

彼女は相変わらずスタジオの隅で座っている。
「何してんだ」
「…………反省中」
彼女は胸元から首飾りを取り出し、じっと見つめていた。
「私ってダメね。嫌なことがあるとすぐに顔に出ちゃう。あの男に指摘されてから、何も変わってなかった」
彼女はまた母親とケンカをしたらしい。
「……あのさ、モデルを始めようって思ったのは……親父さんの影響か？」
「初めて……子供服のモデルに推薦してくれたのって、お父さんだったの」
「だから、たまに落ち込んじゃったりすると、これを見て思いだすの……」
彼女は首飾りを見つめながら、そう教えてくれた。

学校からの帰り道、電車を降りると柊さんが待っていた。
「あのね、今からまた服を借りて打ち合わせに行かなきゃいけないんだけど……付き合ってもらえないかしら？」
「また、店の方に行くんだ？　うん、いいよ」
俺は彼女と一緒に店に向かった。
「いらっしゃいま……ひぃぃぃぃ」
彼女の姿を見て、此花さんがあからさまに怯えている。
「お、お嬢様、今日もですか？」
「えぇ、借りて行くわ」
彼女は此花さんの脇を通り過ぎると、洋服選びに取りかかる。
ぼけっと待っていた俺は、此花さんから、服のデザインは柊さんの母親がやっているということを聞いた。

2月。柊さんは仕事のチャンスを掴んだ。原木先生という業界では有名なカメラマンの指名で、雑誌の企画に使われることになったらしい。この仕事がキッカケで、次のチャンスを掴んで……そうやってひとつひとつ積み重ねて行けば、いつか彼女の夢にたどり着けるのだろう……。

翌日、俺は柊さんに付き合って服のレンタルをしに行く。
此花さんが焦って、彼女が強引に服を決める。そこまではいつもの見慣れた風景だった。ただひとついつもと違ったのは、今日は母親が店にいたことだった。
「歩……いい加減にしなさい。ここはあなたのクローゼットじゃないのよ？」
「買うわ！　好きなだけ差っ引いて！」
彼女は財布からカードを取り出すと、此花さんの顔に向かって投げつけた。
「それじゃコレとコレは……貰っていくわ」
彼女は洋服をスーツケースに詰め込むと、店を出ていってしまう。
俺は歩の母からカードを受け取ると、彼女を追いかけた。

「おい！　ったく……ほら、カード」
彼女はカードを受け取ろうとしない。
「いくらなんでも、今日のは酷いんじゃないか？」
「いいのよ……あんな女」
俺に目線を合わせることなく吐き捨てる。
「説教するつもりはないが……事情……話してくれないか？」
俺は彼女の手を取ると、近くの喫茶店へ連れ込んだ。
「何が原因なんだ？」
しばらく沈黙が続いた後、ようやく彼女が口を開く。
「……父さんが」
「父さんが倒れたとき……仕事が忙しいからって帰ってこなかった……」
「父さんより……仕事を取った、冷たい女なのよ」
「だから……なのか？」

親子の問題……俺が口を挟んでいいものなんだろうか……。
これからどうする？
考えれば考えるほど、頭が痛くなってくる……。
「何か飲むか……」
飲み物を取りに行こうを立った瞬間、俺の身体に異変が起きた。
「!?」

❄04

「勝手に死なないで……
私を一人にしないで……」

一瞬のうちに世界が反転する錯覚。平衡感覚を保っていられない。全身に走る鋭い痛み。視界が歪む。
「おい……冗談だろう……」
鼓動が早くなり、冷たい汗が溢れ出てくる。
――再発？
手足の自由が利かない……俺は自分の身体を支えることが出来ずに、その場に倒れ込む。
天井がまわっている……。
――このまま……終わるわけにはいかない……。
そうだ、俺はまだ何もしちゃ居ない……。
「落ち着け……大丈夫だ……」
自分にそう言い聞かせる。
意識がぼやけてくる…………。

次の日、俺は再び病院へ行った。色々な部署をたらい回しにされ、色々な検査を受ける。
結果は――すぐにでも検査入院の必要性アリ。

病院を出た瞬間、なんの因果か柊さんと鉢合わせてしまった。
「相模君……どうしたの!?」
「いや、ちょっと調子が悪くてね……ビタミン不足だよ」
俺はついさっき処方された薬を軽く振って見せた。
「ホントに？　この間も此花さんが病院であなたを見かけたって言ってたじゃない……ホントに調子が悪いんなら、正直に言ってね？」
「うん、わかったよ」
とっさに出た嘘。
いま、彼女に余計な心配を掛けるわけにはいかない。

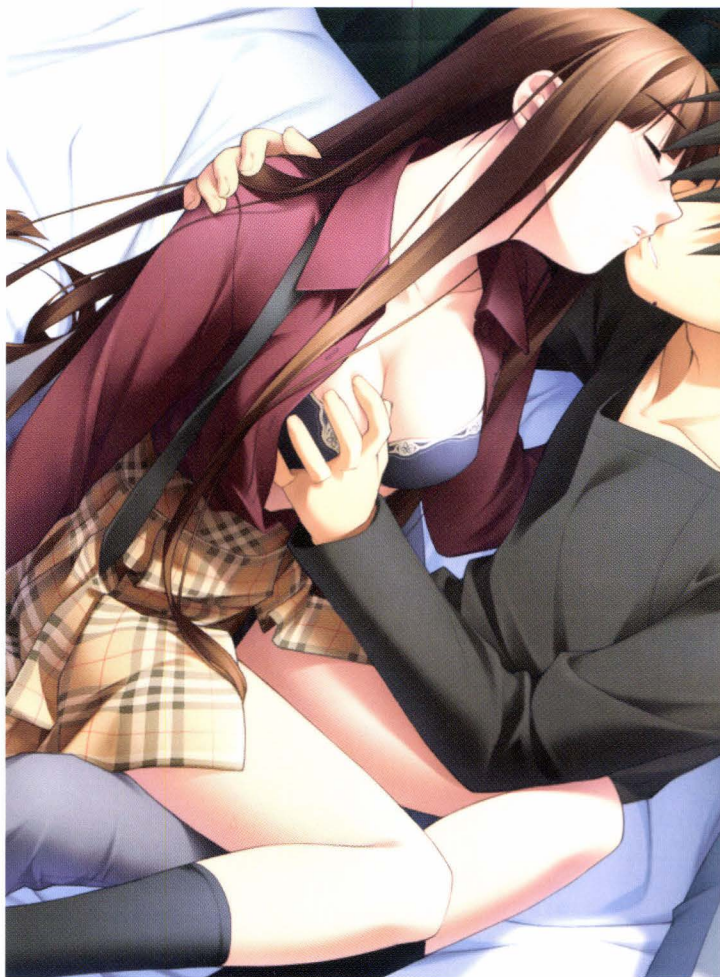
今日は大事な仕事の日。彼女の将来を左右するといっても良いかもしれない。二人とも気合を入れ、予定より早い時間にスタジオ入りした。
突然彼女の携帯が鳴った。此花さんかららしい。
「え？　なに？　良く聞こえないわ……倒れた？誰が？」
「っ……お母さんが……」
「おい、おばさんがどうしたって？」
「病院に運ばれたって……」
「どこの!?」
「……どこだっていいわ……」
「私はこれから仕事なんだから……」
「おい、ちょっと待てよ……本気でそう思ってるのか？」
「ほっといてよ！　私の母親なんだから！」
彼女は持っていたバックを俺に投げつける。
中に入っていた携帯電話が、俺の足下に転がってきた。
「いいのよ……あんな女……」
彼女は肩をふるわせてうつむく。
「……行こう」
「……どこへ」
「もちろん病院だ」
俺は彼女の腕を取ると、強引に振り向かせる。
「……いいのか？　お前は同じことをしようとしてるんだ。仕事で帰ってこなかった、母親と同じ事を……」
抵抗していた力が緩む。
「……行こう」
俺は、彼女の手を引いて病院へ向かった。

「よう」
病院の入り口前に刹那が立っている。
「悪いけどあなたと遊んでいる暇はないの」
「…………302号室」
「サンキュ」
「急いだ方がいい……」
彼女は刹那を一睨みすると、入り口へと駆けていった。
「悪いな……」
「いや、偶然さ……」
「じゃぁ、俺も行くよ……」
俺は軽くノックをして、部屋に入った。
病室の中には今までのギスギスした空気はなく、母親の心配をする娘と、娘に心配掛けまいとする母親の姿があった……。

05

夜、部屋でくつろいでいると柊さんからの電話が鳴った。
「ごめんなさい……夜分に」
「いや、別にいいけど……どした？」
いつもの彼女の声と違う。どこか動揺して、心細そうに話しかけてくる。
「あのね……私……お父さんの形見……無くしちゃったの……」
俺は彼女の首飾りを探すために、夜の街へと向かった。
「相模君っ！」
「おっす……」
駅前で彼女と合流する。
それから俺たちは、首飾りを探すために夜の街を走り回った。
……彼女の大切な物。親父さんの形見……。あれをつけて仕事をすることは、これからの彼女にとっても大切なこと……。いつ、どこで……。
街中をくまなく探したが、どうしても見つからない。今日一日の行動を整理していると、彼女がある可能性を思い出した。
「……スタジオ……」
時計はもう深夜2時を差していたが、取りあえず行ってみることにする。すると、タイミング良く最後のスタッフさんが帰る所だった。
俺たちは事情を話し、ペンダントを探し始める。
……見つからない。
室内の隅々まで探したが、ペンダントは出てこなかった。スタッフさんたちもそろそろ帰ると言いだし、スタジオの電気も徐々に落とされていく。
半ば諦め掛けていたその時……スタジオの電気が消える瞬間、片隅で何か光るのが見えた。
「ほら……」
俺がペンダントを手渡すと、彼女はその場にぺたんと座り込んでしまった。

06

スタジオからの帰り道……歩は俺に告白をしてくれた。
俺も、歩に自分の気持ちを素直に伝えることが出来た。
少し抵抗があったが、俺は歩を家に招き、部屋へと誘う。
そして……。

07

翌日の撮影……それは、歩の晴れ舞台だった。
おばさんがこの日のために用意した服を身につけ、父親の形見と一緒に……。
歩が俺に手を振ってくれる。
撮影も無事に終わり、長かった一日もようやく終わる。
──疲れた……。
俺は建物の片隅にあるオブジェに座り込む。歩が俺の元に飲み物を持って来てくれる。
──ちょっと……眠い……。
俺の意識は、急激に闇に包まれた。

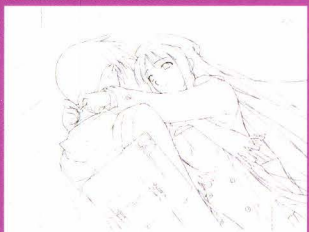
……背中がむず痒い……喉が……かわいた。
周囲がやけに騒がしい……。
「み……水……」
誰かが俺に水を含ませてくれる。

少しずつ意識がはっきりとしてくる。ここは……病院？

俺は10ヶ月もの間眠っていたらしい。
目を覚ましてから数日後、俺は色々な人から話を聞いた。
「相模君！」
歩が病室に飛び込んでくる。
「遅くなって……ゴメンなさい」
「いや……」
彼女の顔を見ると、俺は何も言えなくなる……。
そんな俺を、彼女は優しく包んでくれた。
「会いたかった……」

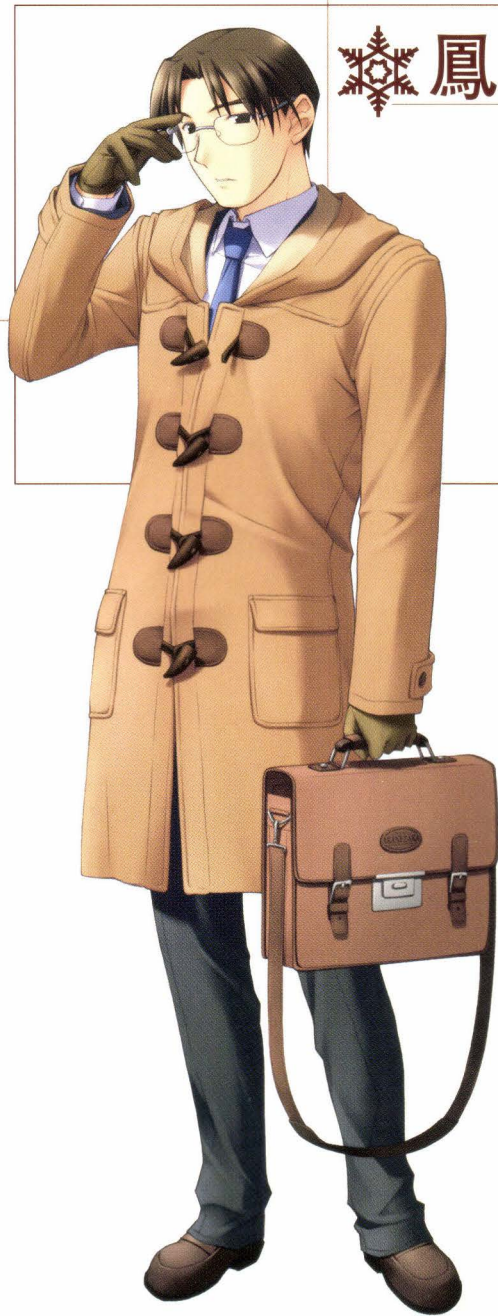
抱きしめられただけで、俺の中にあった言葉消えていく。
言葉なんかいらなかった……ただ、こうしたかった……。

それからしばらくはリハビリの日々が続く。
歩は仕事の合間にお見舞いに来てくれた。
慣れない手つきでリンゴを剥いたりしてくれる。
少しくらい形が悪くたっていい。
歩が……俺のためにしてくれるのだから。

08

3月。卒業の季節。一ノ瀬……春日……利那も卒業をしていく。
俺は浅葉と同級生になった。先に卒業していく友人たちを見送るのは……ちょっと辛い。
でも……俺は少しずつ取り戻そうと思っていた。
「おまたせ……」
歩が俺の隣に立つ。
「卒業おめでとう」
歩も今日卒業式だった。俺は、みんなの卒業パーティーのついでに歩を紹介しようと、彼女を誘った。
「ねぇ司。渡したい物があるの……」
歩はそう言うと、形見のペンダントを俺につけてくれた。
「お父さんのもう一つの遺言……」
「好きな人が出来たら……その人に宝石をあげなさい……って」
「歩……」
「ん？」
「俺……追いつくから……。この1年……出来なかったことを取り戻して……絶対に」
「うん……」
「ねぇ……司」
「ん？」
「私ね……卒業できたよ……」

──嫌な私から……卒業できたよっ。

「私ね……卒業できたよ……」

鳳　刹那

ootori,SETSUNA

司のクラスメートであり、悪友。市内でも大きな病院の末っ子。かなりの金持ち。成績優秀で、クールな秀才風のイメージで下級生を中心に人気を集めているが、実際は訳の分からないギャグを連発して司たちを呆れさす変人。たまに鋭い指摘をする謎多き男。

Other Fashion

一ノ瀬　雅人

ichinose,MASATO

未緒の父親。いつもニコニコしていて親しみやすいお父さん。家庭内では立場は弱く、女性陣に振り回されているが、実はやるときにはやるタイプ。意外と腕っ節が強かったりもする。奥さんの弥生とは大学で学生結婚した仲であり、未緒の実父である泰昭とは大学自体の親友。

一ノ瀬　弥生

ichinose,YAYOI

未緒の母親。一ノ瀬家でリーダーシップを取っているムードメーカー。家事や遊びも思いっきり楽しみ、未緒の服を勝手に借りて着たりするなど、母親と言うよりお姉さんのような若さを持っている。決してくよくよせずに、辛いときこそ笑顔を見せる、優しく強い性格をしている。

春日　太平

kasuga,TAIHEI

美乃の義弟。小学5年生。子供扱いされるのを嫌い、ぶっきらぼうで突っ張った態度を見せるが、心根は優しい子。幼いころから妹と2人っきりだったので自分が守らねばと思うようになり、いつも一緒にいる。美乃のことが大好きだが、不器用なため気持ちを上手く表せずにいる。

春日　洋子

kasuga,YOUKO

美乃の義妹。小学4年生。恥ずかしがり屋でいつもおどおどしているが、一生懸命自分の気持ちを伝えようとする素直で優しい子。仕事の忙しい父親が再婚するまでは、近所のおばさんなどが面倒を見てくれていた。兄である太平と、新しくできた姉の美乃のことが大好き。

美馬　祐士郎

mima,YUUSHIROU

美乃の叔父で、喫茶店「ビッグ・ウェンズデイ」を経営している。服の下にウェットスーツを着込んでおり、ビッグウェーブがくると店を飛び出して帰ってこない。店を始めるときに、病死した美乃の父に色々と援助して貰った恩を忘れず、美乃と母親のことを気に掛けている。

柊　郁

hiiragi,KAORU

歩の母親。ブティックを経営しており、自社ブランドの人気ファッションデザイナーでもある。夫が病死してから歩との関係がぎくしゃくしている。仕事は順調でかなり裕福な暮らしをしているが、忙しいので仕事場で寝泊まりしている。歩と同じく短気で強情なところがある。

橘　泰昭

tachibana,YASUAKI

未緒の実父。山の手にお屋敷を持つ名家の跡取。長男のため当主の意にそぐわぬ行動を禁止されていたが、未緒の実母と駆け落ち、後に娘の未緒は大学時代の親友、雅人が預かる。その結果、ほとんどの権限を剥奪され、現在は一族が経営する企業のお飾り取締役に回されている。

天女目　雫

amatsume,SHIZUKU

未緒の実母。長野の寒村の村娘として生まれた。泰昭との駆け落ちの結果、未緒を取り上げられても毅然と振る舞う強い女性だったが他界。

那由他みかん

nayuta,MIKAN

司が聞いている深夜放送のパーソナリティ。現・レイディオ藤沢専属アナウンサーで、ラジオ司会、レポーターなどと結構売れっ子の人気者。

神奈川県藤沢市 白き祝福が舞い降りた街

『ホワイトブレス』の制作に先駆け、物語の舞台を神奈川県藤沢市に決定したF&C・FC02スタッフは、現地のロケハンを数度に亘って敢行した。その時撮影された膨大な資料写真は、その後の作画作業に大きな影響を与えている。

例えばパッケージ・アート。未緒が佇む階段と全く同じロケーションが、藤沢市近郊に存在する。それが左の写真だ。

この他にも、背景CGやイベントCGのバックに、ロケハンの成果は随所に見られる。ここでは、イベントCGを中心に幾つかをピックアップして紹介していこう。

主人公自宅周辺

主人公の自宅周辺は、ストーリーが展開するメイン舞台のひとつ。背景CGはもちろん、イベントCGのバックにも頻繁に登場する。

町並みを見れば普通の街角といった佇まいだが、それぞれの土地に独特の空気感というものがある。単にリアルな背景を描くだけでなく、藤沢という街の空気感を盛り込むためのロケハン。その成果が最も盛り込まれているのが、主人公自宅周辺の背景グラフィックなのだろう。

茜坂学園周辺

学園周辺の背景グラフィックは、まさにロケーションそのままの場所が撮影されている。左が通学路。ロケハンされた実際の場所を忠実に再現しているのが分かる。写真右手は江ノ電。これだけ近ければ、なるほど車内から通学路の様子が見えるはずだ。

右のイベントCGは、茜坂学園への通学路での1シーン。アングルこそ違うが、実際にモデルとなった学校が存在した。

海岸通り～通学路

自転車で通学している未緒は、海岸に沿った道路を利用している。実際にこの道を詳細に描いたグラフィックはなかったが、司とふたり乗りをしているシーンで、ガードワイヤーと支柱が描かれている。ロケハン時に撮影された写真を見ると、海岸通りの資料が見つかった。海側に張られたガードワイヤーと特徴的な支柱は、間違いなくイベントCGに描き込まれたものだ。こうした細かい部分の描き込みは、作品の具体的なリアルさだけでなく、その場所の持つ独自の空気感までをも、ドラマの中に織り込むことを可能にしている。

■コンビニ横

少々見づらいが、ののかの後ろのコンビニも資料写真が押さえられている。『ホワイトブレス』ではイベントの背景にも細やかな気配りがなされている。

■市街地～夜景

凪沙とクリスマスの街を歩くシーン。イルミネーションも夜は灯り、ガード下の歩道というロケーションは写真の通り。クリスマスの夜などで、CGはちょっとおしゃれな雰囲気に。

■公園

街で司と出会った美乃が、自分の弟と妹を紹介するシーン。キャラがアップになっていて分かりにくいが、その背景に採用されたのは、左上の写真と推測される。写真より、やや低いアングルになっているが、街路樹や建物の雰囲気からも、この公園通りで出会ったのだろう。

■江ノ電駅舎

司の自宅の最寄り駅。駅名表示に"石上"とある。実際の駅舎の佇まいを、余すところ無くグラフィックで再現した背景CGはみごとの一言。

■藤沢駅前

藤沢駅前のワンカット。エスカレーター式の歩道橋が特徴的だが、隣のビルも忠実に再現。無粋な看板は外して、ドラマの雰囲気を高めている。

■湘南海浜公園

司と未緒がデートをした海浜公園も、もちろん実在する。湘南海浜公園だ。紹介する写真は下のイベントCGの背景に使われた。アングルはもちろん、雲間から差し込む太陽光や曽田のグラデもCGに生かされている。

■藤沢市街

藤沢市街の写真も数多く撮影されていたが、その中でも唸らされた1枚がこれ。歩の試供品配布シーンだが、背景資料用の写真はCGを意識した構図で撮影されている。ロケハン時に、既に構図アイデアがあった証だ。

～『ホワイトブレス』ロケハンよもやま話～

サンマーメンの店は藤沢に実在した！

ゲーム本編中で、司と未緒が常連客になっている中華屋「万里」。冬になると、サンマーメンがふたりのお気に入りメニューとなるのだが、案外耳馴染みのない料理ではないか？

実際にサンマーメンとは「さっぱり風味の野菜あんかけラーメン」。けっしてサンマの入ったラーメンではないので、お間違いなく。藤沢市の名物メニューなのだろうか？　との質問に、橋本タカシ氏は次のように答えてくれた。

「特に藤沢名物ではないと思います。ほかの中華料理店でもメニューにありますよ。冬にピッタリのラーメンということで、作中に登場しました」

ちなみに上の写真がロケハンで訪れた店のサンマーメン。なお、万里の店長のモデルとなったのも、このロケハン先の店長さんだとのこと。ここまで徹底した取材を実施するとは、なんとも脱帽である。

White Breath Another Story #1

Wish

浅野 健司

— 203日目 —

「おはよう、司。いい天気だよ」

未緒は病室のカーテンを開ながら、ベッドの中で眠る司にそう声をかけた。九月の終わり、木陰を映した朝日が、部屋の中に穏やかな曲線を描いていた。

「……今日も眠ったまま、か」

乱れた跡すらない清潔なシーツの上で、呼吸器をつけた司は、昨日と変わらない姿で眠っていた。髪が伸びてきたかな、と未緒は思った。今度揃えてあげなくちゃ。

さて、と小さく漏らすと、彼女はいつものように病室へ風を通し、花瓶の水を入れ替えた。それから洗面器に水を張って、軽く湿らせたタオルで司の体を簡単に拭う。それが終わると、彼女は丸椅子を引いてベッドの脇に腰掛けた。特に何をするでもなく、ときおり彼の髪を撫でながら、ただ腰掛けていた。

午前八時の病院は、既に一日の中にあった。

彼女のいる入院用のフロアは、目覚めた人々の立てる音に包まれている。衣擦れや咳の音、小さく鳴らされたテレビ。真っ白な廊下の壁に反射したそのような音が、開け放たれた扉から聴こえてくる。

窓の外に見える通りでは、外来の患者が行き交っていた。家族を送る車が路上に列を作る。眼下に見えるそれらの景色は、遠い音の重なりとなって窓から入ってきた。それから、部屋の中を風が抜けるときには、ほんの微かな波の音と、それから潮の香りがした。いつもと変わらない、半年以上もずっと同じ、朝の匂い。

「ねえ司。昨日はね、藤が丘の方に行ってきたよ」

瞼に落ちる彼の髪をよけながら、未緒は口を開く。

「あそこのお寺、憶えてる？　前に縁日へ行ったとこ。久しぶりだったけど、ぜんぜん変わってなくてびっくりしちゃった」

そうそう、あの日もちょうど今くらいの時期だったね。遠く意識の底にある記憶を辿るように、彼女は静かに語りかける。

「あの時は確か、司がジャージで来たんだ。私や刹那は浴衣だったのに、一人だけ部活帰りそのまんまで。あの恥ずかしそうな顔は、今でも思い出せるな」

そういって彼の頬をつつく。

「今年のお祭りは無理かもしれないけど……来年は一緒に行こうね」

彼の手を握り、そう囁いた。

握った手は柔らかく、ほんの少しだけ脈打っている。今にも崩れそうだったけれど、そこには生きている人間の温もりがあった。ベッドの上の陽だまりが、暖かくその手を包んで揺れた。

◇　◇　◇　◇

「今日も早いな」

その言葉に振り向くと、戸口には刹那が立っていた。

「刹那こそ早いね。おはよう」

ベッドに頬杖をついていた未緒が体を起こす。

「一ノ瀬ほどじゃない。どうだ、こいつの様子は」

そう言葉をかけながら鞄を置き、彼は窓辺に寄りかかった。未緒は小さく首を振って、いつもどおりだよ、と返した。そうか、と刹那が呟く。

「貴重な青春を寝て過ごすなんて、コイツらしいと言えばらしいが……。まったく、半年以上も眠りつづけて、よく飽きないものだな」

病室の空気をわざと掻き混ぜるように、皮肉を言って笑った。そうだね、と彼女も笑う。

「……学園のほうは、最近どう？」

「受験が近づいているからな。課題の量が一気に増えて大変だ。クラスの連中もピリピリし始めてるよ」

「そうか、もうそんな時期なんだね。冬になればあっという間に受験か」

「ストレスが溜まってるんだろうな、部活を引退した連中なんて特に酷いぞ。もっとも、後輩達はうるさい先輩がいなくなったと喜んでいるようだが」

「なんとなくわかる気がするな」と、彼女は笑う。

「美乃は？」

「よそのクラスのことはあまりわからないが、結構のんびりしてるみたいだ。ま、就職組は就職組で、受験とはまた違った苦労があるんだろうがな」

「……みんな、頑張ってるんだね」

「ああ……」

そこで会話は途切れた。静けさに覆われた部屋の中には、心電図が伝える司の心音が一定のリズムで響いていた。差し込む光は徐々にその明るさを強め、穏やかな風が肌を撫でていく。夏の名残を伝える入道雲が、彼方の水平線から湧き上がるように、窓の外にその威容をたたえていた。しばらくのあいだ二人は、黙ってその景色を見つめていた。

「コーヒーが飲みたいな」と、刹那が不意に呟く。

「なによ突然？　買ってこいっての？」

「自分で行くさ……いや、そうだな。自分で行くが、その代わりに自販機まで付き合って貰えないか？」

「……別にいいけど……どうしたの？」

いぶかしみながらも未緒は頷く。

二人は病室を抜け、ロビーへと向かった。

◇　◇　◇　◇

「君もコーヒーでいいか？」

「うん、ありがと」

カップに入ったコーヒーを手渡すと、二人は窓際に置かれた椅子に並んで腰をおろした。

入院病棟のロビーは、やはり閑散としている。平日の午前ということもあってか、他には見舞い客らしき人間が僅かにいるだけだった。控えめな話し声と看護婦の靴音が、病院特有の奇妙な静寂を作っていた。

「一ノ瀬」

刹那が口を開く。

「なに？」

「真面目な話……学園はどうするんだ」

一瞬ためらった後、意を決したように彼は聞いた。

「あいつが倒れてから、ほとんど登校していないだろう。出席日数が足りなくて確実に留年だぞ」

「……そうだね」と、彼女は答える。

司が倒れてから、未緒はほとんど学園に足を向けていなかった。毎日のように病室へ通っていることは、同様に顔を出す刹那は知っている。だがそれも、一日中付きっきりというわけではない。だいたいにして司は眠ったままだ。できる世話はそんなにはない。

「授業をサボって、何をしているんだ？」

「……特に何をしてる、っていうわけじゃないけど……」

コーヒーを口にしながら、彼女はどう説明すればいいのかを考えていた。

「あてもなく、いろいろな場所を巡ってる、か」

「えっ……なんで知ってンの？」

「フッ、君のことなら僕はなんでも知っているさ」

「……そういう冗談はいいから……」

「大して広くもない街だ。制服姿で昼間から徘徊していれば、嫌でも誰かの目にとまるだろう」

「徘徊って……」

「では放浪でどうだ？」

「だからアンタね……まあ、うろついてはいるけどさ。……でも確かに、人目につかないワケはないか」

刹那の冗談に呆れたような顔をした後で、未緒は手にしたコーヒーを見つめて苦笑を浮かべた。刹那はその視線を、窓の外に向けている。

「本当にね……何をしてるんだろう、私は？　そう思うときがたまにあるよ」

自嘲の笑みが混じったため息をつきながら呟く。

「最初はただなんとなく、気分転換だった。学園にいるとね、ついついアイツのことを思い出しちゃうんだ。最初はそれがけっこう辛かったの。だから自転車でいろんなところに行ってみた。それで、どこがどうなったとか、あの場所がこう変わったとか……そういうことを、ここで司に聞かせてたんだ。そしたらさ……なんか、返事がもらえそうな気がして……」

なんだか変なこと言ってるね、という言葉に、刹那は「いいや」と首を振った。

「なんていうんだろ……こうしている間にも、時間はどんどん流れてる。三年生になって部活も引退しなきゃいけないし……半年もすれば受験や就職があって、それでみんな卒業しちゃうんだよね。……でも、司がいない。いつも一緒にいるはずのアイツだけがいないんだよ。それがこんなに辛いなんて思わなかった……」

刹那は黙ったまま続きを待つ。

「……それは誰だって同じ気持ちさ。アイツの周りにいた人間はみんな、きっとそう思ってる。それと同じで……一ノ瀬、君のことを心配する人もいるんだ」

「うん……それはわかってるつもり……でも、それでも、ね」

カップがテーブルに置かれる。

「私が家のことで悩んでたとき、司が言ってくれた言葉がある。お前がどうしたいのか、どんなわがままで

もいい、オレもそれに付き合ってやる。そう言ってくれた。だから私もね、司のそばにいることに決めたの」
　一つだけ開いた窓から、風が通り抜けていった。
「司の為にできることとか……何をどうしたら一番いいのか、よくわかんない。だったら、自分が思うようにやってみよう。司が眠っている間のいろんなことを憶えておいて、あとで教えてあげよう、って思ったんだ。私だけでも良いから、アイツの傍で待ってようって。……それに眠り姫じゃないけど、目覚めたときに一人きりじゃ、ハッピーエンドにならないでしょ」
　そう微笑む彼女の瞳には、強い意志が宿っている。
　未緒の言葉に、刹那は素直に驚いていた。
　彼女が留年してまで司を待っても、何かが解決するわけでは、たぶんない。少なからず周囲の人間に迷惑をかけるだろうし、あまり建設的といえる考え方でもないだろう。むしろ問題を増やすだけで、そこには何の救いもないかもしれない。
　だけど、と彼は思う。
　だけど決めたのか。それでもあいつを待つと。
「なるほど……一ノ瀬らしい答えだ」
　彼女の笑みにつられ、刹那の顔にも笑顔が浮かんだ。
「そうかな……」
「ああ」
「もしかしたら、司を言い訳にしてわがままを言ってるだけかもしれないよ。なんだかアイツに頼ってばっかりみたいで情けないな」
「それでもいいだろう。後悔はいつでもできる。……まあアレだな、頼られるだけの甲斐性がアイツにもあるということだろう。どうせ眠ってばかりいるんだ。それくらいの役には立ってもらえ」
「だね。そうする」
「一ノ瀬が考えて決めたことなら、もう口出しする事はない。だが幼馴染として言わせて貰えば、たまには学校にも顔を出してみるのもいいんじゃないか？　どうせこれから毎日出席したって、留年くらいはできるんだ。アイツが悔しがるようなネタを仕込んで、後で聞かせてやるといい。それに、春日たちも寂しそうにしてるよ」
「……うん、わかった。ところでさ、刹那も寂しかった？」
「僕１人だと、クラスで浮きそうなんだよ」
　困ったような刹那の表情に、彼女は笑みをこぼした。
「笑うかね、そこで」
「ごめんごめん……でも、留年するのも大変だよね。もう一度三年生をやらせてください！　って頼んでも、やらせてもらえないんだもんねぇ」
「当たり前だ」
　二人はそういって、声をあげて笑う。
「さて、そろそろ学校に行くかな。どうせ今から行っても遅刻だが」
「ごめんね、話し込んじゃって」
「こっちが持ちかけたんだ、気にすることはない。一ノ瀬はどうするんだ？」
　少し迷ったあとに、彼女は言った。
「……せっかくだから私も行こうかな。ののちゃんや美乃にも、心配ばっかりかけてられないし」
「そうしろ。じゃあ、またあとでな」
　そういって席を立つと、彼は出口へと向かった。
「刹那！」
　その背中に未緒が声をかける。
「ん？」
「えーっと、その……ありがと。けっこう良いヤツだよね、あんたって」
　刹那は背を向けたまま、肩越しに手を振った。

◇　◇　◇　◇

「未緒ちゃん、ひさしぶりだよ～!!」
　遅れて登校してきた未緒を見つけると、美乃は涙を流しながら抱きついた。
「ちょ、大げさだよ美乃ってば。一昨日喫茶店で会ったじゃない」
「それはそうだけど～」
「お、ちゃんと来たか」
　廊下の騒ぎに教室から顔を出した刹那が声をかける。
「あんたが来いって言ったんでしょ」
「センパーイ！」
「やあ、なんだい浅葉くん？」
「アンタじゃないでしょ……それにそのネタ何回目？」
「えとっ、今のは未緒センパイにです」
「ののちゃん、無理して刹那に付き合わなくてもいいんだってば。駆けて来たから息あがってるんだし……」
「失敬な。無理強いをした憶えは一度も無いぞ」
「はいっ、大丈夫です！　無理してません！」
「……その人の良さをどうにかしないと、いつか刹那みたいなヤツに騙されるよ……」
「やれやれ、酷い言われようだ」
　久しぶりの登校に、彼女の友達は一様に喜びの表情を見せた。美乃やののかは休み時間のたびに未緒のクラスを訪れ、今までの分を取り戻すかのように話しかけた。学園へ足を運ぶのは久しぶりだが、未緒は外出をしていないわけではない。実際には喫茶店やコンビニでちょくちょく顔を会わせているのだが、再び学園で会えたことが、二人には嬉しいようだった。
「そうだ、今日はみんなでお店に寄ってよ！」
　昼食を囲んだ時に、美乃がそう提案をした。
「いいですね！　あたし行きます！」
　ののかは嬉しそうに相槌を打つ。
「私もいいけど……美乃、部活とかは？」
「コンクール終わったし、今は結構時間があるんだ。だからヘーキだよ」
「みんなで騒ぎましょう！」
「そっか……じゃあ、そうしよっか！」
そう言って、三人は声を上げて笑った。

◇　◇　◇　◇

　喫茶店を出ると、目の前の国道には帰路に着く車が溢れていた。時計は午後六時近くを指しているが、空はまだ明るい。
　未緒と美乃、それからののかと刹那の四人は、学校が終わるとその足でいつもの喫茶店へと足を運んだ。マスターは相変わらずの調子で悪態をつき、美乃がなだめながらクッキーを運んだ。四人はとりとめもない話をして、ずっと笑っていた。泉から水が湧き出すように、次から次へと話は広がり、止まることのない冗談が交わされた。学校でもさんざん話をしたというのに、その話題が尽きることはなかった。
「今日は楽しかったですね！」とののかは言った。
「受験や就職活動があるっていっても、たまには羽を伸ばさないとダメだね、やっぱり」と美乃が笑う。

「浅葉くんも、来年は思う存分苦しんでくれたまえ」
　刹那がそういうと、ののかが「ううぅ〜」とうめいて、四人はまた笑った。
「さてと。私はお店を手伝ってから帰るよ。……ねえ未緒ちゃん、明日も……来る？」
「……うん。毎日とは言えないけど、これからはなるべく顔を出すようにするつもり」
「本当!?　嬉しいよぉ〜！」
「だから大げさだって……」
「僕と浅葉くんは電車だから向こうだが、一ノ瀬はどうするんだ？」
「私は自転車だからあっち」
「そうか」
「それじゃあね、美乃」
「うん。ののちゃんもバイバイ」
「はい。お疲れ様でした」
「刹那もお疲れ」
「ああ」
「それじゃあ、また明日ね！」
　美乃は三人の背中に声をかけた。

　未緒は自転車に跨ると、海沿いの歩道を走った。砂浜にはまだ多くのサーファーがいて、大きな波が来るのをじっと待っていた。
　しばらく走った後、未緒は公園の入り口で自動販売機を見つけた。スピードを緩めて自転車を止めると、彼女はカフェオレのボタンに手を向けた。よく冷えた缶を取り出すと、マウンテンバイクを押して公園へと入って行く。それから自転車をジャングルジムに立て掛け、そばにあったベンチに腰を下ろした。彼女の他に人はいない。
　公園からは海が見えた。ほんの微かなオレンジを散りばめた青のグラデーションが、遥か彼方まで続いている。遠くの沖合いには、何隻かの船が浮かんでいる。水平線には、まだ大きな入道雲があった。
「綺麗……」
　彼女は小さく言葉を漏らす。
　この景色を、アイツにも見せてあげたい。ねえ司……ののちゃんも美乃も、みんな相変わらずだったよ。元気で楽しくて、みんな司のことを心配してた。マスターもね。みんなが司のことを待ってる。いつまで眠ってるつもりなの？
　そんなことを思いながら、彼女はそっと目を閉じた。
　海からの風は思っていたよりも冷たかった。体の周りを通り過ぎていく、その微かな音が聞こえた。遠くで学校のチャイムが鳴っている。それから車の音と電車の音がする。海鳥のざわめき。盛りを過ぎた蝉の声。そして波の音。ゆっくりと過ぎていく、時間の音が聞こえた。これから少しずつ夜が早くなり、秋が来て、やがて冬になるのだと、たくさんの音の重なりが教えてくれる。
　もう、夏が終わっちゃうんだ。目を閉じたまま、未緒は呟く。
　今の私を見たら、アイツはなんて言うだろう？　あきれた顔をして、「ばか」って言うかもしれない。誰かが自分のために何かを失うとか、アイツはそういうことに耐えられないだろうな。それとも、何も言わずに付き合ってくれるだろうか？　ときおり、あてもなく自転車を走らせる私に……。
　その胸の中に、様々な感情が浮かんでは消えていく。
　彼女は更に思いを巡らせる。
　夏の終わりの日に、私と司の乗った自転車が海沿いを走っている。ペダルを漕ぐ司は、きっと汗だくだ。それからどこかで自動販売機を見つける。スポーツドリンクを買って公園で一休みする。学校の話をして、今日あったことを話して、それからどうでもいいような他愛もない話をして、これからどうするかを考える。
「ねえ司、来年の夏はみんなで海に行こう」
　水平線を眺める司に向かって私は言う。
　缶ジュースを流し込みながら、司は「それもいいな」って言うだろう。
「美乃やののちゃんや刹那や、それから凪沙さんも誘って、みんなで泳ごう。そうだ、花火大会も行きたいな。だけど砂浜は観光の人で混むから、山のほうの高台から眺めるの。きっと空いてるよ」
　あそこの広場か？　……蚊が凄そうだな……。
「それくらい我慢しなさいよ。あとはねぇ……えーっと、国府津の方も行きたい。小田原まで自転車で行って、動物園を見る」
　自転車はキツイだろ。何キロあると思ってんだ。
「いいよ、どうせ漕ぐのは司だもん」
　俺!?　やだよ、おまえ重いんだもん。
「失礼なヤツぅ！　トレーニングにもなるんだから、文句いわないの」
　……そんな無茶な。
　司は最後の一口を飲み干しながらそういう。太陽が少しずつ傾き始めて、冷たさ含み始めた風が吹き抜けていく。波がリズムを刻みながら、砂の上に波紋を残していく。
「もうそろそろ秋だね」
　そうだな。
「なんだか、長かったような短かったような……あっという間に夏が終わっちゃった気がするな」
　うーん、まあでも、そんなもんだろ。
「まだまだやり残したことがたくさんあるよ。でも、それは来年の楽しみにとっておこう」
　ああ。
「秋は、何をしようか」
　……。
「鎌倉に行って紅葉を見るのもいいよね。そうだ、万里にラーメンも食べに行こう。サンマーメンね。それから冬がきたら、クリスマスにはまた司の家でパーティーするの。今から楽しみだな」
　お前、受験生っていう自覚はあるか？
「……ねえ」
　なに？
「二人でいろんなことをしようね、ずっと一緒に。晴れの日も、曇りの日も、雨の日も風の日も……私は、司と一緒にいたい」
　……。
「ずっと、私のそばにいてね」
　恥ずかしいことを事を言うな。
　そう言いながら、司は照れたように顔をそらすだろう……。

　目を開けると、世界はいつのまにか赤く染まっていた。半分だけ顔を出した太陽が波に揺れている。入道雲は、その形を少しだけ崩していた。雲も海も、風になびく木の葉も、全てが赤と黄色とオレンジに包まれた公園の中で、未緒は一人でベンチに腰掛けていた。立て掛けられたマウンテンバイクが、静かに夕日を跳ね返している。
　風が、少しずつ冷たさを増していく。
「……嘘つき……」
　と、彼女は小さく呟く。
　もたれかかるように体を傾けても、そこにあるはずの暖かさはなかった。ただそのまま、ベンチの上に倒れこむだけだ。そっと支えてくれるはずの、隣にいてくれるはずの、大切な人が、そこにはいない。
　ねえ司、寂しいよ。
　大好きだって、言ってくれたじゃない。
　一緒にいてくれるって、言ったのに。
　どうして、いないの？
　いつのまにか、彼女の頬を涙が伝っていた。こうして泣くのは何度目だろうな、と彼女は思う。瞳を閉じると、大粒の涙がこぼれていく。それから、司と一緒に暮らした日々のことが、浮かんでは消えていった。
　そのまましばらくの間、誰もいないその場所で彼女は泣き続けた。ただ一人で、静かに。

　公園を出る頃には、太陽はすっかり消えていた。入れ替わりに昇った月が、今度は世界を蒼く照らし始める。並んだ街灯の明かりが、ずっと先まで続いている。
　自転車を押しながら、彼女は歩いた。姿の見えなくなった鳥が、それでもどこかで鳴いていた。
　そうして一日が終わる。
　風は、少しずつ冷たくなっていく。

描き下ろしピンナップ

Pinup Illustration

●あらいぐま

WHITE BREATH

Pinup Illustration

●娘太丸

●下北沢鈴成

Pinup Illustration

●鈴平ひろ

Ko-NIYANCo

●ぽよよん♥ろっく

●まっぷ

Guest Comment

あらいぐま

雨の日ずぶ濡れで家の前で立っていた未緒ちゃんか、素肌にシャツ１枚の未緒ちゃんとか……色々と悩みましたが未緒ちゃんのEDを描かせて頂きました。これが一番お気に入りのシーンです。一緒に同じ道を歩くことを選んだ未緒ちゃんの健気さに心を打たれました！

娘太丸

ホワイトブレス、ののかサンを描かせて頂きました。
いや、まーさーか、主人公とののかサンがこういう関係だったとは思いませんでしたねえ。未緒サンとどっち描こうかと迷ったのですが…決め手はののかサンのエプロン姿でした。いえー。

下北沢鈴成

ツインテール＋ニーソの引力で美乃さんになりました。
候補の構図は他にもあったんですが（バスタオル姿とか…）やはりツインテールと制服が描きたかったので、「ハネちゃった…（ペロ）」になりました。
ニーソは入らなかったですが……。

鈴平ひろ

ハッシー本人のリクエスト（半強制？）により「Ｙシャツ未緒」を描かせて頂きました(一度、歩に浮気しようと企んだのですが描きたいモノの資料がちょっと足りなかったので断念)。てゆーか既にイベントＣＧのあるシーンを描くのは大変です。゜(つд｀)
なので寝起きすぐのベッドから出てきたトコロのイメージに。今回は「ゲーム中のシーンから」というテーマだったので描けませんでしたが、一度学生ヒロインズに某エルシア学園の制服を描きたかったようにも思いますw

ぽよよん♥ろっく

はじめまして、わたしぽよよんろっくと言う、まったりお絵描き屋さんの、女の子なの。
今回の絵は、おやすみしてたら、ストッキングがずり落ちてきて、ねこさんぱんつが顔出して、「はずかし～よ～！」な感じの絵なのですよぉ～！

まっぷ

ののかの私服の外出時のコートがとてもカワイかったです（ケープ＆リボンのぼんぼり）。クリスマスパーティーの帰り道の様子を描いてみましたが、特に刹那の変わりよう（プレゼント交換）にビックリ。各キャラが絡む数少ないシーンだったので、印象に残ってます。

Official
Illustration

店頭ポップ用画像

ショップ・プロモーション用に制作された、店頭展示立て看板で使用されたグラフィック。未緒とののかがコンビで描かれている。ふたりのポーズが、それぞれの性格を表していて面白いが、もちろんプロモーション素材としては、そうあるべき。作品のテーマではなく、等身大に描かれたキャラクターをアピールすることを主眼に置いた絵柄だろう。

マニュアル表紙用イラスト

実際に使用されたのは、ゲームのユーザー・マニュアルの表紙。通学途中の坂か階段で、ふと後ろに気付いた未緒。さりげなくお尻に回した左手が愛らしい。後ろにいたのは司だろうか、刹那だろうか。このタイミングで女性と目が合うのは、非常に気まずい状況なのだが……。その間の悪さで考えると、後ろにいるのは司なのだろう。

Official Illustration

『ホワイトブレス』メイン・イラスト

製品版のパッケージに使用されたメイン・イラスト。プロモーション用のチラシなどで目にしたユーザーも多いだろう。階段の途中からこちらを見上げる未緒。画面中央に小さく描かれていることで、周囲の風景の寒々しさが強調されている。『ホワイトブレス』の世界のひろがりをイメージしている。

ソフマップ特典テレカ画像

冬が舞台である『ホワイトブレス』だが、特典用に夏のビーチでの絵柄が使われている。キャラクターは未緒。メイン・ヒロインということで、特典用のグラフィックへの登場も多い。ゲーム本編で登場するのは白のビキニだが、ここではイエロー。元気一杯の未緒のイメージに、よりぴったりフィットするカラーになっている。

メッセサンオー特典テレカ

メッセサンオーの特典テレホンカード用イラストは、モーニング・コーヒーを飲む未緒。大きめサイズのワイシャツを素肌に着ているのは、ゲーム本編と同じだ。すこし頬を染めて正面にいる司を見上げるような視線が、未緒の艶っぽさをアピール。ソフマップのイラストとは全く違った未緒の魅力を堪能できるイラストだ。

コミックマーケット67販売抱き枕カバー

2005年冬に開催されたコミックマーケット67に出展したF&Cのブースで販売されていたのが、ののかの抱き枕カバー。左が表デザインで、はだけた制服がののかのキュートさとエロスを感じさせる。右が裏デザイン。白い下着と膝上まで下ろされたパンティストッキングの黒とのコントラストが、清楚なののかの魅力を引き出している。

Official Illustration

電撃姫付録小冊子表紙イラスト

メディアワークス発行の『電撃姫』9月号に添付された『ホワイトブレス』小冊子用に描き下ろされたイラストで、表紙に使用された。肥大上を見上げる未緒の笑顔が、快活な彼女の性格を顕わしている。相手は司か。アングルから、坂の上や校舎の2階窓など、少し高い位置から未緒に声を掛けたシーンと思われる。

Official Illustration

White Breath Another Story #2

明日へ

今 俊郎

カレンダーが二月になると、三年生はほとんど授業もなくなってしまう。私立大学の受験は本番を迎えるし、進路が決まっている生徒は、その準備や、名残を惜しむように友達との時間を作るのに忙しい。

ののかも進路が決まっているひとり。推薦で近くの女子短大への進学が決まっている。本当は卒業してすぐに家業を手伝うつもりだったが、「もう少し遊んできなさい」と母親が許してくれたのだ。

「なにも十代で将来を決めちゃうこともないでしょう。ののかには色々と迷惑もかけちゃっているし、進学させてあげるくらいのゆとりはあるんだから」

そんな言葉に甘えるように、結局ののかは進学を選んだ。地元の女子短大に決めたのは、できるだけ家を手伝えるように、との彼女なりの配慮だった。

進路も決まり姿を見せない三年生とは異なり、一、二年生はもちろん授業中だ。校庭では男子たちがサッカーボールを追いかけている。全然組織だっていないプレイの中で、何人かだけ余裕を持ってボールを蹴っているのは、多分サッカー部員だろう。ディフェンダーが多いのは、別に遠慮しているわけではないらしい。

「授業でのサッカーで走り回るのなんか、かったるくてやってられないよ」

そんな風に理由をののかに説明してくれたのは、茜坂学園のミッドフィールダー。確かに体育の時間、その人はいつもディフェンス・ラインの真ん中にいて、クラスメイトのドリブルを難なくカットしては、ボールを大きく蹴り出していた。

「最初のうちは、ですよね」

思い出しながら、笑みがこぼれる。卒業を控えて授業もないのに学校へ来ていたののかは、サッカー部部室へ行こうとグラウンドの脇を歩いていた。

何度も相手のボールを蹴り返しても、なかなか味方も相手ゴール前にボールを運べない。相手チームにも同じように考えているサッカー部員がいるからだ。そのうちしびれを切らしたサッカー小僧は、やがてドリブルで上がり始め、ハーフウェー・ライン辺りでボールをもらうようになり、結局は相手ゴール前でのサッカー部員対決になる。相手を抜いたらシュート、ボールを奪い返されたら自分のゴール前まで全力疾走。

「だからいつも授業の終わり頃には汗だくになって……、なのにセンパイは、いつも“かったるくって”って。あたし、ずーっと見ていたんですよ」

窓際の座席は競争率が高い。それでものののかは、なんとかしてその場所を確保していた。校庭の向こう側に広がる湘南の海をぼんやりと見ているのが好きだった。けれど司のクラスが体育でグラウンドを使うときは、その視線が自然と近くなる。何度か教師に注意されることもあったけれど、ふとしたことで彼女の視線は、グラウンドを走るセンパイの姿を追いかけていた。

普通ならば、そんな時間があと一年は続くはずだった。けれど一昨年の冬、司は昏倒し入院した。授業中も、部活でも、彼がグラウンドを走る姿は見ることができなくなった。そして意識を取り戻した司の隣にはあのひとがいた。そして、今も。

分かっていたけれど、二人が一緒にいるところを見るのは辛い。入院生活で一年遅れた司を、未緒センパイは、わざわざ留年までして待っていた。

「病み上がりのアイツ一人じゃ不便だろうし、一人くらい知った顔が同級生にいた方が心強いでしょ」

留年するとののかに告げたとき、未緒はあっけらかんと、そう言った。二人が好き合っていることは分かっていたけれど、その言葉はとてもショックだったのを覚えている。

(自分はそこまで強くない)

そう言えるだけの強さがあったら、もっと早くにセンパイに想いを告げられただろうか？　ううん、きっと無理。だってあたしとセンパイは……。

そのとき、足元がガクンと落ちた。

「へっ!?」

段差だ！　と思ったときには、膝から崩れていた。体勢を立て直そうと踏鞴を踏んだところで足を滑らせる。アッという間もなく、お尻から地面に落ちた。

「あ……たたたたぁ」

その痛みで、部室の前に着いていたことを知る。サッカー部のマネージャーをしていた頃、何度もこの段差を踏み外してしまった。ボールやビブスを片づけていたとき、マネージャー仲間と話しに夢中になっていたとき、そしてセンパイと一緒の時も。

「いたたぁ。こういうところ、直らないのかなあ」

目許に滲んだ涙を変に意識したくなくて、ののかは痛みに気を向ける。けれど向けた痛みは、少しずつお尻から身体の真ん中へとせり上がってくるように感じる。それが心の真ん中に届くのを振り切るように、ののかは部室の扉を開けた。

「うん、ちゃんとキレイに使っているんだ」

「ウチの部室は酷い」と、野球部やバスケ部のマネージャーが愚痴るのを洗い場で耳にした。サッカー部は年に何度か大掃除をするから比較的整理されているが、問題はその大掃除。持ち主不明のTシャツやソックスは出てくるし、雑誌はいつの間にか溜まっている。

「そういえばセンパイと一緒に大掃除をしたときに、エッチな雑誌がたくさん出てきたこともあったっけ」

お店で同じ様な雑誌を扱っているとは言え、それを整理するときは表紙もなるべく見ないようにしているののかだ。真っ赤になってアタフタする彼女を後目に、そそくさと雑誌を束ねた司。けれど、司も耳まで真っ赤にしていたのを、ののかは知っている。

「あの後、しばらくサッカー関係以外の雑誌は見なくなったんだけど」

いまではマンガ雑誌程度は復活しつつある。ミーティング・テーブルの上の雑誌を整理しながら部室の中を見回すと、壁の貼り紙が目に入った。

「目標！　インターハイ出場」

「打倒！　聖エルシア学園」

インターハイは新しい紙に書かれている。

「きっと選手権予選が終わってすぐに書いたんだよね」

夏のインターハイと冬の選手権。これに国体を加えたのが、高校サッカーの三大大会。もちろん茜坂学園サッカー部が全国大会へ出場したことはない。けれど、ののかが入学する前年あたりから、茜坂学園は着実に実力を備え始めていた。それがピークを迎えたのは司たちの学年が入学した頃。彼らが最上級生時の新チームは好メンバーが揃い、地区ナンバーワンの聖エルシア学園との練習試合も近年にない接戦に持ち込んだ。

地区ナンバーワンとの好勝負に、チームは盛り上がった。期待されながらも夏の大会直前に怪我で欠場を余儀なくされた司も、復帰してポジションを奪い返し、さらにチーム力に厚みが増した。

その時に司が書いたのが「打倒！　聖エルシア学

園」。二年前の模造紙は、少し黄ばんでいた。
「もうちょっとだったんですよね」
ののかは呟きながら、文字を指でなぞる。その試合でレギュラーとして活躍した司。けれど、それが司の高校サッカー最後の試合となった。
「だからセンパイが全国大会を狙えたのは、あのインターハイ予選だけだったのに……あたしのせいで」
地区予選の試合直前、他校生に絡まれていたののかを、助けてくれたのは司だった。見ず知らずの男子に囲まれるように声を掛けられ、オロオロしていたののかを彼らの中から連れ出してくれたとき、司は右の足首を酷くひねった。きつくテーピングをして司はゲームに出場したが、優勝候補のチームを相手に茜坂学園は完敗してしまった。
「責任を感じることはないんだ」
優しい言葉が、かえってののかの心を重くした。
「嫌なことは、早く忘れろ」
優しいはずの言葉がこの出来事を忘れがたくしていたことに、その時は司もののかも気付かなかった。

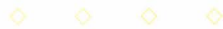
◇ ◇ ◇ ◇

「ののかに相談したいことがあるんだけれど」
いつもよりちょっと真剣な表情で、母がののかにそんなことを切り出したのは中学二年の頃。その声色に少し緊張しながら、ののかは母に好きな人がいること、再婚を考えていることを打ち明けられた。
もちろん複雑な気持ちがなかったわけではない。けれど、好きな人を紹介する母の幸せそうな様子はののかにも嬉しかったし、実際に会ってみた“お父さん”は、想像していたよりも優しそうな人だった。だからののかは、母の再婚に喜んで賛成しようと思った。
“お父さん”に自分よりも一歳年上の息子がいると知ったのは、その直後だった。一人っ子だったののかは兄弟に憧れていたし、“お兄さん”も優しそうな人だったのも嬉しいことだった。
「初めまして、司です」
少し照れながら、ぶっきらぼうに挨拶した司の声を、ののかはずっと忘れずにいる。けれど、自分がどんな風に自己紹介をしたのかは全く覚えていない。
その日、初めて我が家となる家に案内されたとき、司はののかを“のの”と呼んだ。ちょっとくすぐったい響きだったけれど、司の優しい声で呼ばれると、不思議と抵抗無く耳に馴染んだ。
ののかも、その日初めて司を“お兄ちゃん”と呼んだ。照れながら部屋を案内してくれた“お兄ちゃん”は、ののかの理想通りではなかったかもしれない。
「だけど、きっと好きになれる」
その予感は外れなかった。ふたりは仲の良い兄妹となった。ののかの母も司を可愛がり、司の父は仕事の都合で留守がちだったが、ののかを愛してくれた。
「せっかく新婚なのに、全然家によりつきやしない！」
司はしょっちゅう家を空ける父をあしざまに語ったが、それでも家族であるには違いない。母と二人の時も、それほど寂しいと感じることはなかった。けれど父親ができ、兄ができ、ののかは家がこれまで以上に明るくなったような気がしていた。
ののかの母が仕事で忙しいときは、司とふたりで夕食の準備をし、ときどき宿題を見てもらう。初めて一緒に台所に立ったとき、司の手際に正直驚いた。その日のメニューは「ポトフ」。手慣れた様子で準備をする司は、少し照れたようにののかに言った。
「放浪オヤジを父親に持つと、料理もできなきゃしょうがないんだよ」
「手伝います！」
その時、元気一杯に言ったっけ——今でも台所に立つと思い出すことがある。お皿を割りそうになったり野菜を余計に剥きすぎたり、小さな失敗ばかりだった。
「あああぁぁ、すみません」
「何をやってるんだかなあ」
しょげかえるののかを、司はたしなめる。それでも初めて二人で作ったポトフは、司に言わせれば最近にない成功作。
「美味いだろう」
そういって笑顔を向けてくれた司の優しさが、その日なによりも嬉しかった。
スラリとしたスタイルから「運動神経もいいのかな？」とは思っていたが、サッカーの上手さにも驚かされた。初めてリフティングを見せてもらった時、ののかは驚きのあまり、何度も「すごい！」を連発した。
「これくらい、部活をやっていれば誰でもできる」
ちょっとぶっきらぼうな言い方が、やっぱり司の照れ隠しだと知ったのは、それほど後のことではない。実は兄に隠れて、ののかもリフティングに挑戦してみたが、どうしても上手くはいかない。
「やっぱり凄いよ」
ののかにとって、司は大切な、そして自慢のお兄ちゃんになった。けれど、ののかの気持ちは、そこで止まってはくれない。自分の想いを自覚したからこそ、彼女は決めたのだ。
「家族になる」
そんなののかの努力を知ってか知らずか、この家庭もわずか一年後に離ればなれになる。理由は探せば、幾つも出てきただろう。けれど、ののかにとっては両親が離婚を決断したという事実だけが残る。
「ちゃんと家族になれなかった」
ののかと母は、コンビニの上のマンションに戻った。けれど母は、一人になることが多い司のために、たびたび食事を用意し、それをののかが届けた。家族にはなれなかったが、絆は切れない。そしてののかの想いもつのっていく。
司を追うようにして、一年後にののかも茜坂学園に入学する。そして再会。司のクラスメイトの前でのぎこちない会話。「浅葉」と呼びかけられ「センパイ」と呼ぶ関係。ふたりは“家族”にはなれなかった。だからののかは、心に決める
「いい後輩になろう」
まるで自分の想いを封じ込めるように。

◇ ◇ ◇ ◇

ほとんど出席者のいない教室に、終業のチャイムが響いた。
「進路が決まったからっていって、あんまりハメを外しすぎるなよ」
担任の言葉でホームルームも終わる。それでもしばらくは、ののかは教室に残っていた。
特に約束があるわけじゃない。ただ、昼休みの食堂で、司と未緒にバッタリ出会っていたのが、ののかの腰を重いものにしていた。
「センパイたちも、今日は登校日ですか」
テーブルに向かい合わせに座ったふたりに、つとめて明るく声を掛ける。
「おう、受験前にちょっとな。浅葉は進学が決まっているんだよな？」
「はい！　地元の短大ですけど、推薦を頂きました」
「そうだったよね。おめでとう、ののちゃん」
「ありがとうございます、未緒センパイ」
「あとは司がちゃんと合格すればいいんだけれど。刹那が卒業パーティをやるって言ってるんだから、そのとき合格していないと、留年＆浪人で恥ずかしいよ」
「そういうお前は大丈夫なのかよ」
「私は勉強してるじゃん。模試も問題なかったし」
未緒の明るい声。未緒はののかの気持ちを知っていた。ののかも、未緒に自分の気持ちを知られているのは察している。でもヘンに意識したくない。未緒センパイも大好きなセンパイの一人だし、やっぱりお似合いだと思うし……。
「同じ学年になったのに、さらに気ぃ使わせちまって……悪かったな」
「いっ、いえそんな！　センパイは……その、あたしのいろいろなセンパイですから」
「ホント、ゴメンね、ののちゃん」
クラスでもできるだけ目立たないようにしていた2人。物腰も柔らかく、あたし達にとけ込んでくれた。だから、上手くやっていけたんだ。
「そんなこと無いですよ。センパイ達がいてくれたから、寂しくなかったし」
「ののちゃん……」
「いまさらだけど、ありがとな……浅葉」
そんな司の言葉に、胸が苦しくなる。なんでセンパイはこんなに優しいんだろう。
「それよりののちゃん、お昼は？　売り切れちゃうよ」
「ああ、いけない！　すみません、失礼します」
「場所、取っておこうか？」
「大丈夫です、未緒センパイ。今日は友達が待っているんで、って…わきゃ!?」
慌てて振り向いて、他の生徒にぶつかりそうになる。そんなののかの背中に、司の声が届く。
「あんまり慌てるなよ。また転ぶから！」
「ウィッス！　大丈夫でっす」

サッカー部時代と同じように答えて、ののかは購買の列へと急いだ。あんまりゆっくりしすぎると、涙が溢れそうになったから。
「なんでセンパイはこんなに優しいんだろう」
放課後の教室で、昼休みを思い出してひとりごちる。学園で再会したとき、司はののかを「浅葉」と苗字で呼んだ。家族だった頃のように「のの」ではなく。
（きっとあたし、とても寂しそうな顔をしていたはず）
けれど、それが司の優しさだというのも、ののかには理解できた。あの時、司は友達と一緒だった。思えば、それが刹那であり美乃であり、未緒だった。司はののかのプライベートを気遣ってくれたのだ。だからののかも、司を「センパイ」と呼べるようになった。
「いい家族になれなかったけれど、いい後輩になろう」
その時、ののかは心に決めた。だからサッカー部のマネージャーにもなった。けれど、いい後輩になろうとするほど、司をセンパイと呼ぶ回数が増えるほど、ののかの想いは募っていく。それが恋だと分からないほど、ののかは子供ではなかった。
「もう、吹っ切れたはずなのにな」
そう呟いて、ののかは教室の窓に目を向ける。湘南の海は、いつもと変わらなかった。

それからは、ののかもあまり学校へ顔を出さなくなった。自宅のコンビニエンス・ストアのアルバイトが、大学の卒業を前にお店を去っていったからだ。
「卒業間近なんだから、遊んでくればいいのに」
そんな母を封じるように、ののかは店に入った。受験組の進路が決まるまで、することもなかったからだ。
「それに忙しければ、いろいろと考えなくてすむし」
それでもアルバイトは毎日というわけではない。空いた日は何をして過ごせばいいのか分からないまま、日にちだけが過ぎていった。
「やっほー。ののちゃん、久しぶりぃ」
2月も終わり近くのある日、客足がとぎれがちになった夕食時のコンビニに懐かしい顔が訪れた。美乃だった。一年前に茜坂学園を卒業していた彼女は、就職したせいもあって、なかなか会う機会もなかった。
「美乃センパイ。わあ、お久しぶりです」
「もう自由登校始まっているでしょ。ののちゃんならコンビニにいるかなって寄ってみたんだ。正解！　だね」
仕事帰りの美乃は、そのままレジまでやってきた。
「わあ、もうホワイトデーの準備なんだよねえ」
「センパイ、貰えるあてがあるんですか？」
「太平クンがくれると思うよ。バレンタイン、奮発したから」
あはははは。笑いが店内に響く。ちょうどその時、ののかの母が店内に入ってきた。
「なあに、ののか。大きな声で」
「あ、ごめんなさい。あの、センパイが久しぶりに来てくれて」
美乃を紹介するののか。挨拶を交わした後、ののかの母は、笑顔で二人をコンビニから追い出した。
「若い女の子のお喋りは、お部屋でしてちょうだい」
追い立てられるようにののかの部屋に入ったふたりは、他愛のない話を交わす。美乃の仕事のこと、進学先のこと、昔の思い出話。そして司と未緒のことに話題が及んだとき、「気を悪くしないでね」とちょっとまじめな顔になって美乃が切り出した。
「ののちゃん、今でも司君のこと好き？」
ドキンと心臓が跳ねた。急に心が重くなった気がした。黙り込んだののに、美乃は優しく言葉を継ぐ。
「そっか……、ののちゃん……辛かったんだね」
言われて思わず顔を上げる。
「やっぱり、か。顔色を見てたら、何となくね」
「どうして……」
おそるおそる問いかけるののかに、にんまりと美乃。
「あたしも、司君のことが好きだったから」
「えっ!?」
「今も、もちろん好きだよ……大切な友達だから」
少し照れたように、美乃は司と過ごした時間を話してくれた。そんな美乃に導かれるように、ののかも自分の気持ちを少しずつ話し始めた。一年だけ兄弟だったこと。素敵なお兄ちゃんだったこと。素敵なセンパイだったこと。そして……。
「自分では……もう割り切ってたはずなのに……何で今更、こんな気持ちに……」
司と未緒がつきあい始めたとき、ののかは二人を祝福した。その時に心を閉じた蓋が外れて、溢れる気持ちが止められない。
ふと、背中に温もりを感じた。ポン、ポンと優しいリズム。それが美乃のてのひらだと分かった。こんなあたしに、みんな優しい。美乃センパイも未緒センパイも、そして司“お兄ちゃん”も。
やがて気持ちが収まった頃、美乃が口を開く。
「ののちゃん、好きって気持ちって、成長するんだよ」
「へ？」
きょとんとするののかに、優しく美乃が語りかける。
「卒業して一年経って、ちょっとだけ分かった気がするんだ、あたし」
ののかは美乃を見つめた。
「あたしは、今でも司君が好きだよ。でも、茜坂にいたときとはちょっと違う。今では未緒ちゃんも刹那君も、もちろんののちゃんも同じように好き。うちのおちびちゃんたちと同じ。好きな人に幸せでいてほしいから、そのために自分ができることを頑張る。そんなふうに、あたしの“好き”は変わっていった。あの頃の気持ちが恋なら、あたしの恋は“好きな人に幸せになってほしい”という意志を持って、愛に成長したんだと思う。なーんて、ちょっとカッコよすぎかな？」
だからね、と美乃は微笑む。
「あたしは今でも司君が好きだし、そんな自分が好き」
こくり、とののかは頷く。
「ののちゃんの好きも、そんなふうになっていけるといいね。だから自分の気持ちに、無理に蓋をしないで」
「で……も……」
そんなふうに思える自信は、ののかにはなかった。諦め切れない気持ちを認めたら、また関係をこじらせてしまうかもしれない。ののかはぎゅっと目をつぶり膝の上で拳を握った。と、両の拳がぬくもりに包まれる。目を開くと、真剣で、でも優しい眼差しの美乃。
「ホントのことを言える関係に、なりたかったんじゃないの？」
仲のいい兄妹、そして家族。学校では、センパイをサポートする後輩。失敗しちゃいけない、迷惑をかけちゃいけない……自分はその場所を守りたかったから。でも、そんなことにこだわりたいんじゃない。自然に目が合い、微笑むだけで気持ちが通じ合う関係になりたかった。考えたこと、思いついたことを伝えたかった。バカにされても、からかわれてもいい、一緒に笑えるなら。あたしが望むのは平凡なせかい。儚い夢でもいいから。
「作ろうよ……これからも」
「よ…しのせんぱ…い……」
誰かが泣いていた。温かい手で抱きしめられると、悲しみが愛おしさに変わっていく。まだののかは、誰かにこうやって気持ちを伝えたことはないと気づく。
（出来るかな……あたしにも……）
頬をつたう涙が暖かい。
自分でも知らぬ間に、ののかは泣いていた。

卒業式が終わったら、センパイ達が「ビッグ・ウェンズデー」でパーティを開いてくれるそうだ。手伝おうと思ったら、美乃センパイから怒られてしまう。あたしは今日の主役なんだからって。
あたしとセンパイは一足先に、喫茶店へと向かう。未緒センパイは友達に挨拶をしてくると、どこかへ行ってしまった。2人並んで下る坂道。もうこの坂を一緒に走り登ることもないだろう。
いつも追いかけていた背中はもう見られない。あたしは、半歩遅れながらセンパイについていく。この距離は縮められなかった。いつも追いかけるばかり。
「悪いな」
「えっ？」
「いつも、お前をおいて先に行っちまって」
センパイは歩くスピードを落とした。あたし達は並んで歩く。バツが悪そうに破顔するセンパイ。その笑顔につられて、あたしも笑った。
（そう‥‥いつも、こうなんだ。お兄ちゃんは‥‥こういう人）
最後の最後で気づいてくれる。優しさで気持ちが溢れそうになったとき、乱暴に頭が撫でられた。
そして久しぶりに、自分の名前を呼ばれた。

クリエイター・ロングインタビュー

開発スタッフインタビュー

草薙こうたろう&橋本タカシ

仕事の合間などにキャラクターの肉付けをしたり、物語のベースを組み上げていったりしていましたね

◆今回は『ホワイトブレス』のオフィシャルファンブック収録のインタビューに、お忙しい中、お時間をいただきましてありがとうございます。

草薙こうたろう（以下草薙）　いえいえ、宜しくお願いします。

◆『ホワイトブレス』の企画が発表されたとき、草薙こうたろう氏と橋本タカシ氏のコンビということで、ユーザーからの期待もかなり大きかったと思います。

橋本タカシ（以下橋本）　でも、僕はそれほどプレッシャーを感じてはいなかったですね。『Piaキャロ3』に関わりながら企画は少しづつ進めていましたから「また、このふたりでできるのか」というくらいです（笑）。

◆『ホワイトブレス』の企画は、いつぐらいから温められていたのですか？

草薙　企画としていつから、というのではないんですが、『With You』が終わって半年くらいたったころ、原案に近いものが出てきたんです。その後、お互いに別の制作に携わっていた関係もあって、企画として動き出したのは一昨年くらいからですね。

◆当初のアイデアは、完成した『ホワイトブレス』に近いものだったのですか？

草薙　卒業式間近の冬という時期は一緒ですね。あとはそこに、お互いで様々なイメージを着けて膨らませていこう、という形でした。

橋本　「今度は冬物をやりたいね」というのが最初にありまして、草薙氏から「こんなキャラクターが」というアイデアが出てきたんです。

草薙　そうしたら、ある朝、紙が机の上に置いてあって、落書き程度のラフ絵が描かれていたんですよ。それを元に、仕事の合間などにキャラクターの肉付けをしたり、物語のベースを組み上げていったりしていましたね。

◆『With You』が終わって半年ということは、結構準備期間をかけていたのですね。

橋本　うーん、準備期間というのとは、ちょっと違いますね。お互いの仕事の合間に進めていて、それがある程度の形になったのが一昨年というだけです。

草薙　企画の前段階ですよね。「次はこういうのがやりたいね」という。で、『Piaキャロ3』が終わった後に、企画として提出しました。ただ、舞台の藤沢というのは、割合早い段階で決めていました。まずはロケーションを決めて、そこからイメージをもらおう、ということで。

◆神奈川県藤沢市というのは、どの様な経緯で決まったのでしょうか？

橋本　『With You』が終わった直後もあってか、その舞台だった横浜の近くにしよう、ということになりました。あと、当初は受験がキーになる物語だったので、高校や予備校があるくらいの規模で、あまりメジャー過ぎない街を探していったんです。それで、ある日フラっと江ノ電に乗って終点まで行ってみたら、ここイイじゃん、みたいな感じで（笑）。

◆物語の舞台を決定するとき、地名を全く変えたり、複数の街のロケーションを組み合わせたりする方法もありますが、『With You』では横浜、『ホワイトブレス』では藤沢と明確にされていますよね。こうしたアプローチの狙いとは？

草薙　場所の持つイメージを、そのままもらいたかったんです。実は地名をここまで前に出さなくても良かったんです。「こういう雰囲気の街なんだよ」というのを感じてもらえればいいのですが、『ホワイトブレス』では藤沢市と前面に出すことで、物語の舞台を鮮明にイメージ付けたかったんです。

橋本　最初は当て字で「富士沢」になっていたんですが、『With You』で横浜って言っちゃってるわけですし、ここで当て字も変かなぁ、と（笑）。ただ、藤沢という街の知名度に拘ったわけじゃなくて、舞台となる場所を探していたときに、たまたま藤沢がイメージにピッタリだった。ならば名前も当て字などで変えたりするより、そのままでいいんじゃないかと思ったんです。

◆あくまでロケーションを重視した、ということですね。

橋本　特にこの街が気に入ったというのはありますけどね。

草薙　もちろん物語のなかで使うだろう場所があるのは重要ですけどね。今回であれば海があって、坂があって。物語のなかで使える場所があるかは、探しに行きます。

◆藤沢を舞台に設定した決め手というのは、どういうことだったのですか？

草薙　海があって、大都市ではない庶民的な街であること。街の雰囲気にも、ちょっとだけ田舎の寂しさを感じられること。その二点です。

橋本　あとは風光明媚なロケーションがたくさんあることですね。

◆『ホワイトブレス』のパッケージは、まさしくそんな藤沢市の冬が描き出されていますね。

草薙　まあ、普通の地方都市の一角ってかんじですよ（笑）。

◆企画として動き出したのは一昨年ということですが、その段階でのコンセプトやテーマをお聞かせください。

草薙　コンセプトとしては"冬物""卒業"。これは最初から変わっていません。"就職"というのも、企画が動き出した当初からありました。その上で各キャラクター毎の物語を創り上げていったんですけれど、これは制作を進めるなかで変わった部分もありますね。

◆物語的なテーマという部分ではいかがですか？

草薙　やっぱり卒業を控えた時期ですから、別れが近いわけですよね。別れが見えている状況での気持ちの動きを描き出したいな、というのはありましたね。だから作品のカラーとしては寂しくなるのは当初から分かっていました。そのなかにあるささやかだけれども暖かいものが大事なんだ、ということは盛り込んでいこうと考えました。

◆なるほど。

草薙こうたろう

— ディレクター —

F&C·FC02のディレクターであり、シナリオ・ライティングも手掛ける。『ホワイトブレス』制作の中心メンバーとして、これまでの枠に囚われない、意欲的な作品作りを牽引した。

橋本タカシ

— キャラクターデザイン・原画 —

『With You』で原画スタッフとしてF&C作品に初参加。その力量が認められ、正式にスタッフとなる。『Pia♥キャロットへようこそ!!3』にも参加。業界有数の人気原画家のひとり。

草薙　で、ある日出社したら橋本が「こんなキャッチコピーはどう？」って紙を渡すんですよ。

橋本　あー、やめてくれー（笑）。

草薙　「冬なのに暖かい――」多分タイトル絵に入るんだと思うんですけれど。プロモーションでは使わなかったので、こっそりオープニング・ムービーに入れておきました。

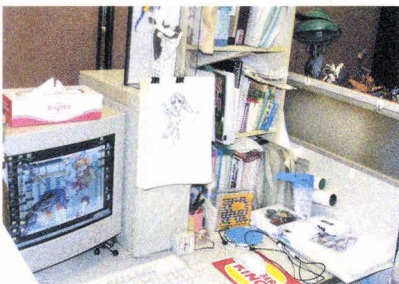
橋本　ああ、入れちゃったんだ。でも、キャッチコピーのことなんて忘れていた。

草薙　俺は何でも覚えているよ（笑）。で、その後にいろんな人に、「冬の好きなところ」って訊いて回ったんです。そこで「冬は寂しいイメージがあって、自分の気持ちに近いから好き」とか「冬は人と人とが近づいて、温かさを感じられるから好き」などの意見を聞いて、物語のイメージを固めていきました。

橋本　確かにいろんな人に訊いて回ってましたね。それよりも、キャッチを忘れていたのがショックですよ。そうか、ムービーに使われていたんだ（笑）。

世界観やストーリーを知った上で、どんな登場人物なのかを見ていってほしかった

◆橋本さんがキャラクターをデザインするときに、それぞれキャッチコピーのようなものを考えて進められるんですか？

橋本　さすがに普通はしませんね（笑）。頼まれたときに考えるくらい。「舞台に見合ったキャラクター」というのをメインに考えてデザインしました。

◆これはあくまでプレイした側からのイメージですが、F&C作品のなかでも『ホワイトブレス』はキャラクター、舞台設定、そして物語と、作品全体が等身大で描かれているな、と感じました。それは意識されたポイントでしたか？

草薙　最初は、もう少しコミカルな方向性も考えていたんです。でも物語のテーマを突き詰めていくと、やっぱりシリアスな流れでいこう、となりましたね。

◆確かに『ホワイトブレス』は、ヒロインも主人公もそれぞれに悩みを抱えています。そんな中でも等身大の日常を生きているわけですが、絵の表現としては、どういった部分に留意されましたか。

橋本　とにかく自然に日常に溶け込ませることですね。これは初めて藤沢に行ったときから意識してました。でも、ここまでデザインが“普通”なキャラクターって、これまでのF&Cの作品には無かったんじゃないでしょうか。今回も初期段階ではいろいろ飾りをつけた案もあったのですが、どうもしっくりこなかったんです。そこで敢えて記号的なものを前面に出さないで、その人物の性格や取り巻く環境からイメージしたものを、どこまで切り詰めて表現できるかを自分なりに追求してみました。そういうのもひとつ可能性なんじゃないか、と。とはいえ、必要最低限の要素は入れましたが（笑）。

◆いい意味で地味なキャラクターですよね。

橋本　そうですね。今の美少女ゲーム作品は、傾向柄どうしても記号的な表現が多くなっているように感じます。敢えてやっている部分もあるんですが、今回はそれとは逆の方向でアプローチしていくことにしました。溢れているもののなかに埋もれたくなかったというのもありますが…まぁ、良いアクセントになればと思ってます（笑）。

草薙　当初から敢えて記号は省こう、ということは話したよね。

橋本　雑誌などの紹介って、まずは絵から入るじゃないですか。その時点で記号などからキャラクターのイメージを固めてほしくなかったんです。世界観やストーリーを知った上で、どんな登場人物なのかを見ていってほしかった。

草薙　うん、そうなんだよね。

橋本　そのためにも、極力記号的なパーツは外していこうという方向になったんです。

◆F&Cというブランド・バリューもあるし、お二方ですと『With You』という代表作もある。そこで記号的なヒロインが登場すると、それを見ただけで判断されてしまう可能性もありますよね。

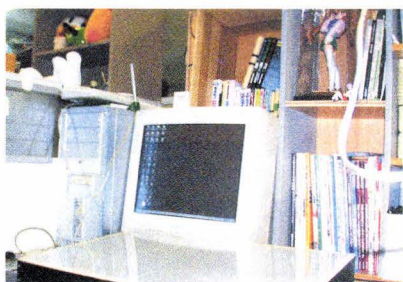
草薙　自分もあまり記号を多用せず、キャラクターや物語の本質の部分で勝負したいという気持ちが、『ホワイトブレス』に限らずあるんです。ポニーテールとかツインテールとか、メガネとかちびっ子という分かりやすい記号で語ってしまうと、そこだけでキャラクターが埋もれてしまうじゃないですか。むしろそれに頼らないことで、キャラクターの等身大の人間性を描き出すことができると思いますし、プレイされた方にも、純粋に物語を楽しんでもらえるのではないか、と考えているんです。

◆それでも現状の美少女ゲーム市場を見ると、記号に満ちあふれた作品が非常に多く、人気を博しています。『ホワイトブレス』はそうした状況へのアンチテーゼなのでしょうか？

草薙　いやいや、そういった大それたものではないんです。企画によってはポップな作品も創っていくでしょうし、内容次第で記号的なキャラが必要にもなります。ただ、『ホワイトブレス』では記号的な部分はできるだけ削って、等身大のキャラクターとストーリーでいこうとなっただけで、これはもう巡り合わせだとしか言えませんね。

橋本　ポップな作品も楽しいし、記号的を扱ったキャラクターもカワイイと思います。でも、こういう作品もアリなんじゃない？　というのが『ホワイトブレス』なんです。

◆最近では等身大のキャラや物語を扱った作品も少なくありませんが、それでも記号系作品は非常に強いですよね。そのなかで『ホワイトブレス』を発表するのに不安はありませんでしたか？

草薙　不安といえば、どんな作品を出すときにも不安はありますよ。特に開発期間が長いと、企画段階と発売時期では、時代性なども変わってしまう可能性があります。実際に製作期間中に市場のムーブメントの変化などは気になりますしね。ただ、そういった部分に左右されない、作品の本質がキッチリと伝わるものを送り出していけば、そんなに不安を感じる必要はないのかな、と思います。

◆周囲の動向とは関係なく、制作期間が長いと、そのなかで新たなアイデアなどが生まれてきたりはしないのですか？

草薙　それはもちろんありますよ。その場合は、それらを自分のなかで消化して、みじん切りのように物語の様々な部分に盛り込んでいくようにしています。僕自身、制作に関わっているときには、絶えず新しい刺激を求めているんです。その時にアンテナがキャッチしたものを、自分にきっちりと取り込んだ上で、作品に生かしていきたいですからね。

◆先ほど「F&Cのこれまでの作品にはなかったキャラクター」というお話がありましたが、ビジュアル・イメージ全般でも、そのイメージを感じます。このグラフィックについては、早い段階から決定されていたのですか？

橋本　そうですね。塗りの段階に入る前で、グラフィックのスタッフには、今回のビジュアルの指示は出していました。

◆具体的には、どういった指示だったのですか？

橋本　色彩はとにかく抑え目に。あとは影ですね。冬服ですから生地が厚手になるので、影をあまり細かく入れないように、と。シャープな部分を抑えて、柔らかく塗ってほしい、ということでしょうか。

◆今回のグラフィックの肝の部分だった。

橋本　そういう塗りをイメージして、それに合うよ

うに自分も描きました。ですので、完成形はほぼイメージ通りのものになったと思います。もちろん、ここに辿り着くまでにはたくさんの苦労がありましたけどね（笑）。

◆イメージ通りの絵になるまでのすりあわせには苦労されたのではありませんか？

橋本　なにせ『ホワイトブレス』の前に参加していたのが『Piaキャロ3』ですから、塗り以前に、絵柄を『ホワイトブレス』にもっていくだけでも大変でした（笑）。実は私自身、ここまで思い切って絵を変えたことがなかったんですよ。『With You』から『Piaキャロ3』は、それほど意識していなかったので、絵柄を変えることでユーザーさんの反応も賛否が分かれることは予想できたんです。ただ『ホワイトブレス』では、自分でも絵柄を変えてやっていきたかったので、まったく迷うことはなかったですね。

◆実際に絵が上がってきて、それがストーリーに影響を与えたことはありましたか？

こういうキャラならこう考える、こう動く、というのはある。キャラクターに自分のボキャブラリーを持たせるんです

草薙　上がってくる絵がイメージ豊かなものでしたから、それを活かすことは考えましたね。こういうキャラならこう考える、こう動く、というのはあります。これは僕のやり方なんですが、キャラクターそれぞれに自分のボキャブラリーを持たせるんです。そうしたイメージが、完成したキャラ・イラストを見て固まったというのもありました。

◆具体的には？

草薙　僕が当初ビジュアルイメージを持っていなかったのは歩なんですよ。彼女は橋本がいきなり絵を持ってきたんです。それを見たときに、「これで行こう！」と決まりました。あとはののかだよね。彼女はとあるゲームで遊んでいた橋本が、そのパロディの絵を持ってきたんですよ。で、その絵を見せに行ったときに、「これだ、これだ」って（笑）。

橋本　ののかのデザインはかなり初期に決まったんですが、当時は“冬”というキーワードくらいしかなかったんです。で、ある日「こんなのどうよ」って見せに行ったら、それに決まっちゃった。

草薙　後輩の女の子を出そうというイメージはあったんです。そのイメージにピッタリだった。

◆歩に関しては、作品中でもちょっと異質な存在ですよね。

橋本　聖エルシア学園の制服を着せるというのは決まっていたんです。だから歩は『With You』の世界の人なんですね。なので、最初は色々と飾りが付いていたんです。けれどモデルという設定ができて、外していったんです。

◆『With You』とリンクさせるというのは、早い段階で考えていらっしゃったのですか？

橋本　そうですね。『With You』では聖エルシア学園の夏服しか出せませんでしたから、今度は冬服を出せる！　と（笑）。

草薙　E-LOGINでかつて連載されていた小説の挿し絵にも出ているんですが、美亜子の、それも袖だけなんです。

橋本　だから、ちゃんと『With You』の時に、冬服までデザインしていたんだぞ！　という意味も込めて（笑）。実はもっとふたつの作品をリンクさせる方向もあったんです。『ホワイトブレス』に美亜子を登場させるとか。でも、そこまでリンクさせるのは正しいのか？　という疑問はありました。それに、作品の雰囲気自体が違いますから、『With You』のキャラを『ホワイトブレス』に登場させると、物語が壊れてしまいかねない。

◆両作品に登場するキャラクターというと、ラジオ・キャスターの那由他みかんですね。

橋本　実は私、『With You』の時は外部スタッフで、頂いた指定に合わせて絵を描いていたから、みかんの存在を知らなかったんです。なので、それを出したかったというのはありますね。

◆『With You』でできなかった部分を取り込んだ、というところもあるんですね。

橋本　藤沢へロケハンにいったのも、そのひとつです。実は『With You』の時、実際に横浜に行ったことがなかったんです。さすがに山下公園のような、いかにも横浜的な場所は知っていましたが。でもその時、「もし実際に土地を知っていれば、もっと別の描き方があるんだろうな」と感じたんです。

◆その藤沢ロケハンですが、大変な勢いで取材をされたそうですね。

草薙　2,000枚くらい写真を撮りましたね。やっぱりロケハンをすることで新しい発見がありますから、それは大きかったですね。

橋本　逆に予想していたものがなかったり。コンビニとか、想定していた場所にないんですよ。あれは困ったなあ。

草薙　パッケージの参考になった坂に、実際に行かれたユーザーさんがいて、ホームページに写真がアップされていたんですが、坂の途中に道ができていたり（笑）。

◆実際に行かれるファンの方がいるんですね。

草薙　『With You』でも、場所を探した同人誌が出ていたんですが、思わず買っちゃいました（笑）。

やっぱり未緒が、一番『ホワイトブレス』のテーマを表しているんですが、“諦めないこと”です

まあ、実際にはない風景を創った部分が多かったので、「惜しい！」と思って見ていましたが、ゲームからそれぞれの楽しみ方を見つけてくれるのは、創り手として嬉しいですね。

橋本　『ホワイトブレス』と同じように、実在の場所を舞台にしたアニメ作品がいくつかあって、試しにそこに行ってみたこともあるんですが、本当に忠実に再現されているんですよ。なるほど、これは面白い、と思いました。

◆さて、非常に盛りだくさんの魅力が込められた『ホワイトブレス』ですが、ここで各キャラクターについて、少々話をうかがっていきたいと思います。まずは一ノ瀬未緒ですが、彼女がメイン・ヒロインなのですよね。

草薙　そうですね。自分のなかでは最初からあったヒロイン像ですね。

橋本　でも、デザイン完成はけっこう遅かった（笑）。

草薙　いわゆるクラスメイトでケンカ友達。幼なじみというのとはちょっと違うんですが、主人公の近くにいる女の子です。男友達みたいな感覚を持たせて、ストーリーの最初から、主人公にとって、ちょっと特別な位置にいるキャラクターにしました。

橋本　なんでも気兼ねなく話せるんだけれども、ちょっとしたときに凛とした雰囲気を漂わせる、といったところです。

草薙　藤沢のロケハンの時に話していたんだよね。「凛とした女の子がいいよね」って。

橋本　……話しましたっけ（笑）？　そう、なにか習いものをしているってことで、最初は剣道少女だったんですよ。竹刀だと主人公とのカラミで使えそうだし。その頃はポニーテールだったんですが、なんかしっくりこなかったんです。で、いつのまにか弓道が出てきて……。

草薙　えっ（爆笑）!?

◆なんで驚いているんですか？

橋本　いや、剣道をやってて柑橘系のコロンを愛用という設定があったんだけど、なんか汗くささを隠しているようなイメージがあって。

草薙　いや、それは絵とセリフ以外でも、“周囲に気を遣う女の子”っていう演出をしたかったんだよ。

橋本　とはいえ、実際に剣道やった身としてはやっぱりにおいは気になる……偏見かもしれないけど（汗）。そこであまり動きの激しくないものということで、弓道が出てきたんですよ。取材中も、たまたま弓道部員の一団が通りがかって、「やっぱり弓道だよね」って（笑）。

◆気の置けない女の子なのに、未緒は非常に重い過去を背負っていますよね。この物語に込めたテーマというのは、どういったものだったんですか？

草薙　やっぱり未緒が、一番『ホワイトブレス』のテーマを表しているんですが、“諦めないこと”ですね。人の気持ちに合わせて流されてしまう女の子が、主人公に励まされて、自分で未来を開いていく、という部分です。未緒は、選ぶのではなく、全部を受け入れるという選択をするんですが、それこそが未緒らしさなんです。実はエンディングを決めずに橋本に相談したんですが、彼と僕の考えが一致したので、すんなり決まりました。

◆『ホワイトブレス』の制作過程では、かなりお二人で相談されていたのですね。

草薙　まあ社内の机が背中合わせですから、何か面白いアイデアが出ると、すぐイスを叩いて相談していました。

◆さて、続いて美乃です。

草薙　彼女も最初から想定していたキャラですね。

橋本　デザインはかなり手こずりました。初期は前の企画の影響もあって、ちょっと奇抜な髪型をしていたんです。「まずいかな？」と思ったんですがOKがでちゃって（笑）。でも、他のキャラと並べたときにさすがに違和感があったので、今のものに調整されました。

◆ゲーム同梱の小冊子に『With You』の美亜子みたいなキャラとありますが。

草薙　性格ではなくて、キャラクターのなかでの立ち位置ですね。みんなに声を掛けていく、という。明るいキャラなんですが、テンションは明らかに美乃の方が低いですね。その分、お母さん的なイメージになっています。

◆美乃は夢を持っていながらも、家族のために諦めて就職してしまう女の子です。

草薙　彼女のテーマは"自己犠牲"なんです。企画当初から就職するキャラクターというのは決めていました。就職するが美大へ行きたい女の子ということで、就職に関連したエピソードをもっと盛り込んでいたんですが、一度全ボツにして、"自分がやりたいことを我慢している"というのを前面に出したんです。で、それは誰のためかというと、義理の弟と妹のため、つまり家族を守るためなんです。

◆未緒のストーリーでもそうですが、家族にスポットを当てていますよね。

草薙　卒業という転機を考えたとき、その後の進路の決定に家族は決定的に関係してくると思うんです。そこでの関係性で、それぞれのテーマを描いていきたいと思っていました。

◆三人目はののかです。

草薙　彼女のビジュアル・イメージは最初から変わっていませんね。最初に3点イラストがあって、ほぼ決定でした。キャラクター的には後輩ですから、その視点で主人公たちの関係を見ているんです。それと、たった1歳違うだけで、こんなに隔てられてしまうんだという哀しみ。あと、元家族ですね。主人公と家族にもなれず、いい後輩にもなれず、と悩んでしまうんです。

◆主人公とののかの関係ですが、ゲームの途中まで明確に元家族であるとは分かりません。これは主人公の体調も同じなんですが、こういった構成にされた理由をお聞かせください。

草薙　なんかおかしいな、とユーザーさんが思ってくれるところから始めたかったんです。主人公とののかの関係も、最初に説明してしまうと、ユーザーさんの視点もそこに定まってしまうじゃないですか。そうではなく、次第に関係がわかることで、それまでの互いの対応の仕方やセリフの間などに、新しい意味を見つけてほしいと思うんです。

◆絵柄は一番早く決定したと言うことですが。

橋本　変えたくてもさせてくれなかったですからね（笑）。最初に決まったキャラというのもあって、後からどんどん他の女の子が決まってくると、比べたときにちょっとバランス的にどうかな、って思う部分が出てきたり。当初、ボブカットの女の子がいいよね、と軽い話で生まれたキャラなんですが、私的にはボブカットって、あまりいじれない完成されたヘアスタイルだったりするので。でも、シルエットが未緒と似てしまうのでリボンを付けてみました。

◆スタッフ人気も一番ということですが、ユーザーさんの人気も高かったですよね。

草薙　外部の方にお訊きしたときも、ののかの人気が一番だったんですよ。

橋本　マスコット的なキャラクターですよね。きっとサッカー部でも、そんな感じのマネージャーなんですよ。

◆人気の秘密というのは、草薙さんはどのように感じられているのですか？

草薙　うーん……普段は元気一杯なんだけど、とっても健気で、心のなかでは重たい悩みを抱えているという深みが、絵に出ているんじゃないでしょうか。

◆それを3枚のイラストで決定した。

草薙　そうなんです。

橋本　かなりふざけたイラストだったと思うんだけど（笑）。

◆凪沙は、明確にこれまでの３人とは違いますよね。

草薙　浪人生ということで、明らかにお姉さんなんですけれど、ベタベタなお姉さんじゃない。わずか2歳の差で、人間はこんなに立場が違うんだ、というのを出したかったんです。もともとは従姉弟じゃなかったんですよ。

橋本　年齢は近いんですが、他のキャラとの差別化もあって、少々大人びいたデザインにしなければならなくて、そのバランスが難しかったですね。俯いたシーンが多いので、そのときにキレイに見えるようにしよう、と考えました。それがはっきりしていただけ、パターンは決めやすかったですね。

◆凪沙の存在が、欠損家庭である主人公の家を、家庭にしていますよね。

草薙　実際『ホワイトブレス』には母親的女性が多いんです。美乃といいののかといい。でも、彼女たちはそこまで成熟していないから、やはり主人公の母親的な存在は、凪沙になるんですね。大きな優しさを持つ女性なんだけど、自分も優しさに弱いから依存してしまう性格なんです。

◆さて歩が最後です。モデルであること、他の学校に通っていることなど、凪沙と違った意味で、主人公たちとは立ち位置の違うヒロインですよね。

草薙　僕がF&Cに入って間もなく、音声収録に立ち会う機会があったんです。最初は声優さんの仕事が見られるということでワクワクしていたんですが、その現場で、プロの仕事の厳しさというのを痛感しました。で、もしかすると高校卒業後すぐや、卒業前に、こういう厳しい世界に飛び込んでいく人もいるだろうと考えたんです。そんなヒロインと、学生気分を満喫している主人公のギャップを際ださせる意味でも、歩を設定しました。

◆かなり特殊な立場に存在するキャラですよね。

草薙　美乃の対極にいるんです。「自分の好きなことを我慢して、なにをやっているの？」という、いわばアンチテーゼですね。でも、ある意味どちらも正しいと思います。その対比です。

◆デザイン的には、どういったアプローチをされたのですか？

橋本　一見クール、でも実は感情的なキャラということで、最初はすました顔と不機嫌そうな表情を意図的に描いていきました。デザインは、「クールでも崩れていても絵になる顔」というのが前提でしたね。それとエルシアの制服を効果的に見せるために、ダッフルコートを着せていこう、とか。

◆物語全体を見ると、最初に明確なテーマがあって、そこに向かってストーリーが進んでいくのではなく、物語が進むに連れて、テーマや課題が重なっていく、というように感じられました。

物語が徐々に進んで行くんだ、終わりに近づいているんだ、というのを、プレイしながら感じてほしい

草薙　物語が徐々に進んで行くんだ、終わりに近づいているんだ、というのを、プレイしながら感じてほしいんです。だからオープニングも、いきなり重いシーンなんですが、誰が入院しているのかはわからない。だけど、そういう運命を辿るキャラがいるんだ、というのは伝わるし、作品全体の雰囲気も決めてくれるんです。

◆発売されてから半年以上、ユーザーの反応などから『ホワイトブレス』に盛り込んだものは伝わったと思われますか？

草薙　どうでしょうか？　実際にアンケート・ハガキなどを見ていると、深い部分までくみ取ってくれた人もいますが、「わかりにくかった」という声もあります。同じようなテーマを扱うときに、もう少し分かりやすいアプローチはないのか。そこを模索していく必要はありそうですね。

橋本　絵柄や塗りを変えたことに対しても、賛否両論があります。ただ、自分が予想した以上には、肯定してくれる人が多いですね。"洗練された"という言葉をいただくことが増えました。

◆さて、ユーザーさんのなかには、次のソフトを期待されていると思います。もちろん企画的には色々あると思いますが、クリエイターとして、今後はどの様なアプローチで作品作りをされていきますか？

草薙　ユーザーさんが安心して遊べるソフトを提供していきたいですね。ゲーム内容はコンセプトによって変わりますし、それはその時々でも変わるでしょう。ですが、ユーザーさんが安心して遊べる、総合的な完成度の高い作品を作りたいと考えています。

橋本　『ホワイトブレス』は自分のなかでも、また市場的にも変わった切り口の多い作品だと思います。そういう作品を、今後も送り出していきたいな、と思います。

◆最後になりましたが、『ホワイトブレス』というタイトルの意味をお聞かせください。

草薙　ひとつは文字通り"白い吐息"。想いが吐息の形で現れる。そしてもうひとつ意味があって、それは『ホワイトブレス』に登場するキャラクターたちに祝福（Bress）あれという意味。卒業という時期を迎えて、様々な問題を乗り越えて新しいステージへ向かう彼女たちへの祝福なんです。

開発スタッフインタビュー

シャチ

橋本は新人というイメージがあったんだけど、ベテランだね。草薙も大ベテランだ

◆シャチさんが、草薙さんや橋本さんと知り合ったきっかけは？

シャチ　草薙こうたろうは、ずーっとF&Cのテストプレイヤーだったんです。『バーチャコール』だとか『亜希子』だとか、いろんなゲームのデバッグをしていた。デバッガーの立場から気付いたポイントを、色々指摘して来るんですよ。それを聞きながら、「こいつにシナリオを書かせたら面白いんじゃないか」と思い始めたんですね。その後、先輩や同僚が抜けていくなかで、シナリオライターを補充しようとなったときに、さっそく草薙に声を掛けてみたら、「やりたいです」というわけでして。そこでカクテル・ソフト――当時はF&C第2事業部（後にF&C･FC02となる）と呼ばれていた。――に参加させました。

◆なるほど。

シャチ　もちろん第2事業部に来た当初は雑用が主だったんですが、私が『Piaキャロ』を制作していたときに、当時の社長から「新しい企画を考えろ」と言われたんです。まあ、当時は部長だったので、いろいろと指示が来るんですよ。そうは言われても、『Piaキャロ』の制作にビッチリ入ってしまっているわけですから、もうひとつの企画を考える余裕なんてありませんよね。なので草薙に企画を考えさせたんです。その時に幾つか上がってきたなかの１本が『With You』だったんです。

◆それを採用されたのは、どういった理由だったのですか？

シャチ　その当時のゲームは、魅力的な女の子が5人や6人出てきたら、全員とエッチできるのが不文律だったんです。全員攻略できて、あたりまえ。

◆はい、たしかにそんな雰囲気がありました。

シャチ　そうなんですよ。で、『With You』もご多分に漏れず、たくさん魅力的な女の子が出てくるんですが、攻略できるのはたったふたり。これが、とても斬新だったんですね。非攻略キャラの人気がグーンと伸びたこともあってユーザーさんからはクレームもいただきましたが、その一方で評価も高かったんです。

◆その後、ダブル・ヒロインはひとつのスタンダードになりましたからね。

シャチ　『With You』の時に原画を誰にするか迷ったんですが、草薙から橋本の名前は出なかったんです。それで他の原画家さんのスケジュールを調整していたある日、草薙が会社で漫画を読んでいたんですね。それを覗いたら、可愛い女の子の絵なんですよ。「この人、可愛い絵を描くねえ」って言ったら、「知り合いなんですよ」って言うから、さっそく連れてきなさい、と。それが橋本タカシだったんですね。

◆それは『With You』の頃だったのですか？

シャチ　発売の1年くらい前だったかな。で、その時のマンガを、記念に持っているんですよ。せっかくだからお見せしたいところなんですが、これを表に出すと橋本が恥ずかしがるので勘弁してあげてください（笑）。

◆それが橋本さんとの出会いだったんですね。

シャチ　そう。でも考えてみれば、草薙もそんないい知り合いがいるなら、最初から連れて来いよと思ったんですけどね（笑）。

◆となると、お二人と出会われてから10年近く経つことになりますよね？

シャチ　草薙が14年で、橋本とも9年前くらいですか？　ずいぶん長い時間ですねえ。『With You』の時は、橋本は外部スタッフとして参加していたんです。ところが上がってくる原画が素晴らしいんですよ。なので『With You』がマスターアップした直後に、F&Cに入ってもらったんです。それにしても9年かあ。橋本は新人というイメージがあったんですが、ベテランですね。草薙も大ベテランだ。もっともっと頑張ってほしいね（笑）。

◆さて今回の『ホワイトブレス』ですが、企画をご覧になったときに、どのような印象を受けられたのでしょうか？

言い方を変えれば、『ホワイトブレス』は大変な意欲作だし実験作だぞ、と

シャチ　ノスタルジックというか、素朴な雰囲気があるな、と感じましたね。率直に言えば、『Piaキャロ』シリーズだとファミレスもので制服セレクトという明確なセールス・ポイントがあるんですが、そういうパンチには少々欠けているかな、と感じました。そこで細部を見直してもう一度出してもらったんですが、その時に設定画やロケハンの写真も大量に出てきて、非常に熱意を感じたんですね。ただ、非常に重くてシリアスなテーマを扱っている。従来のカクテル・ソフトは純愛でも、ポップで明るいラブコメ色が強かったから、ユーザーさんが混乱しないかという心配はありましたね。言い方を変えれば、『ホワイトブレス』は大変な意欲作で実験作だ、と。

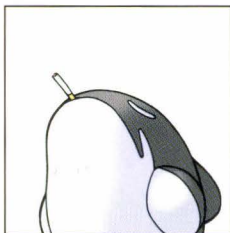
◆ハードだったりダークだったりというのは、以前のF&Cブランドでありましたが、シリアスというのはあまりみかけませんでしたよね。

シャチ　F&Cの歴史を紐解くと、『殺しのドレス』ですとか『リップスティックアドベンチャー』シリーズとかでシリアスなテーマを扱っているんです。ただ、ここ数年を振り返ると、たしかにシリアス系の作品は非常に少なかった。いまはファンも5年くらいで入れ替わってしまいますから、ハードな作品を制作していた頃のF&Cを知っているユーザーさんは、非常に少ないと思いますよ。

◆そこで修正された企画というのが、現在の形になるのですか？

シャチ　そうですね。キャラクターは最初の企画段階で、ほとんどできていたようでした。多少修正が行われていたくらいでしたね。

◆『ホワイトブレス』はグラフィック・イメージもF&C作品として新しいアプローチを導入されていますよね。

シャチ　当初企画が上がってきたときの開発コードは「冬企画」。もちろん舞台は冬ですよね。ところが、この時点でF&Cのヒット作品は、夏を舞台にしたものが多かった。それらと同じ塗り方では冬を表現しきれないだろうという疑念はありました。草薙や橋本も同じように考えていましたし、グラフィ

シャチ

― プロデューサー ―

F&Cを支える敏腕プロデューサーのひとり。『With You』『Piaキャロ』シリーズなど、多数の人気作品を手掛ける。草薙こうたろうと橋本タカシを発掘した眼力も光る。

ック・チームも同様。そこで試行錯誤しながら、『ホワイトブレス』の世界に合う塗り方を模索しました。『ホワイトブレス』塗りといったら語弊があるのかな？　でも、そのくらいの意気込みで、作品のイメージにあうアプローチを試みたつもりです。

◆その塗りの技術もあるのでしょうが、『ホワイトブレス』のイベントCGを見ると、背景にキャラクターが自然に溶け込んでいますよね。

シャチ　制作のメインスタッフによる、徹底したロケハンの成果も微少とは言えないでしょうね。実際に現場を見ることによって、臨場感も出てきたんでしょう。最終的にはグラフィックのスタッフも藤沢に行ったそうですから。

◆キャラクターやストーリーが等身大であるだけに、地に足を着けたソフトの作り方をされているのでしょうか？

草薙、橋本を筆頭として、『ホワイトブレス』の制作に携わるスタッフ全員の強い意志を感じました

シャチ　彼らの意気込みが、作品作りの部分でも、そういう風に出ているんでしょうね。藤沢市のロケハンはもちろんですが、制作に向かう姿勢にも熱意を感じました。毎日遅くまで作業をして、休日出勤も残業も厭わない。草薙、橋本を筆頭として、『ホワイトブレス』の制作に携わるスタッフ全員の強い意志を感じました。

◆その熱意は、どういったところから生まれたのだと思われますか？

シャチ　うーん、これまでのF&Cになかった作品を創り出そうといういう意欲ですね。新しいものへチャレンジしているので、これまでの経験で計算できない部分も多かったと思うんです。特に塗りに関しては、従来の1.5倍くらいかかったのではないでしょうか。この塗りを見たとき、違う企画でも使いたいな、と思いましたよ。

◆『ホワイトブレス』を制作したことで、F&Cスタッフのキャパシティが広がったのは間違いなさそうですね。

シャチ　ああ、それは間違いないですね。引き出しは確実に増えています。

◆シャチさんは、今回プロデューサーとして『ホワイトブレス』に関わられていますが、主にどのような作業をされていたのですか？

シャチ　そうですねえ、予算管理（笑）。それとスケジュール管理ですね。現場的には、とくにないんですよ。

◆よく手のかかる作品、かからない作品というのがあると言われます。特にプロデューサーという立場では俯瞰して見られると思うのですが、『ホワイトブレス』はいかがでしたか？

シャチ　聞き難いことを突っ込んできますねえ（笑）。そうですねえ……難産ではあったかな。プロデューサーとしてみると、もっとシステマチックにできる部分はあったと思うんですよ。でも、そこを妥協せずに作り上げていこうとする姿を見ると、頑張らせてあげたいなあ、と思っちゃうんです。だって新しいことが多いから、時間もかかるわけです。遅くまで会社に残っていたり、自宅に仕事を持ち帰ったりしているのを見ると、やっぱり応援したくなりますよね。そういう意味では、難産ですよね。完成したときは、私もホッとしました。

◆プロデューサーとしての難しさが、とても伝わってきます（笑）。

シャチ　確かに今はプロデューサーですけど、つい数年前までは現場の人間でしたから、みんなの気持ちは分かるんですよ。「このシステムに拘れば面白いものができる」という感覚が。私も何度も「絶対面白くなるから、スケジュールを延ばして下さい」って言ってましたからね。F&Cでスケジュール延期の常習犯といえば、間違いなく私のことですよ、いや、これは内緒の話なんですけど（笑）。だからスタッフが「盛り込みたい」というのであれば、頑張ってほしいし、そこをスケジュールや予算で単純に割り切るのは辛いんです。

◆それでも、プロデューサーとして見ていかなければならい。

シャチ　だから、悪い意味ではなく、これまでの蓄積でまかなえた部分があったのではないか、というのはあります。一昨年に企画が通ってから発売されるまで、FC02レーベルで『あいかぎ』『だぶるまいんど』が発売になっているんですから。やはり開発期間が非常にかかってしまったのが残念でもあります。

◆なるほど、確かに難しいバランスですよね。

シャチ　ソフト作りに熱意があるというのは羨ましいし、誇るべきことです。今回の『ホワイトブレス』でも様々なアイデアを試して、これでノウハウもできたでしょう。あとはベテランと呼ばれるキャリアになっただけに、いいものを作って、ユーザーさんに商品を届けるスパンに意識を向けてほしいです。なんか、プロデューサーとしての発言ばっかりなんですけどね（笑）。

◆さて、苦悩するプロデューサー（笑）、シャチさんの目から見て、クリエイターとしての草薙さんと橋本さんの仕事ぶりを、どのように捉えられているのでしょうか？

ふたりとも職人だなあって思うところがありますね。作品作りに取りかかると、一気に集中して進めていける

シャチ　うーん、そうですねえ……ふたりとも職人だなあって思うところがありますね。作品作りに取りかかると、一気に集中して進めていける。それがパワーを生むし、拘りの深さにもなっているんでしょうね。だた、その一方で周囲が本当に目に入らなくなってしまうんじゃないか、というところが若干あると思います。その部分を柔軟にやってくれるといいな、とは常に思いますね。

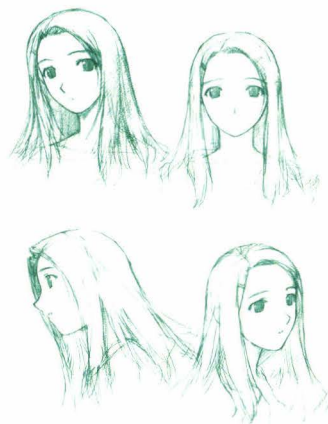
◆はい。

シャチ　ふたりとも、ゲーム・クリエイターという目で見ると、非常にレベルが高いと思います。シナリオ、塗り、舞台設定作り、作品の雰囲気など、それぞれの部分への着眼点という意味では、多分私より上なんじゃないかなあって思います。ちょっと話は脱線しますが、ゲームを制作するにあたって、原画家さんやグラフィック・スタッフなどに仕事をお願いするんですが、なかにはどうしても自分のイメージしたものとは違うものが上がってくるんです。その時に、ある一定のクオリティをキープしているのであれば、それを取り込んで作業をしていこう、と私は考えるタイプなんです。草薙や橋本は職人気質なので、上がったものが納得いかなければ、とことんディスカッションを重ねようとする。もちろんその姿勢は重要なんですが、プロデューサーという立場で見ると、もう少し取り込む柔軟性があっても、と思っちゃうんですよね（笑）。

◆いやあ、プロデューサーは大変ですね。

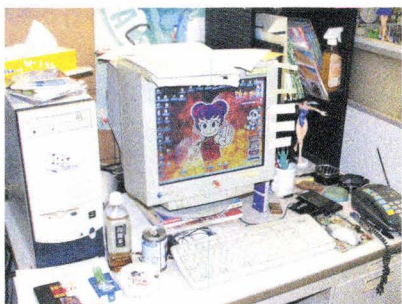
シャチ　大変なんですよ。

◆でも、そうやって次々と新しい個性が育ってくるのも、F&Cならではですよね。

シャチ　そうですね。

◆それではプロデューサーとしてお二人を語っていただくのは難しそうなので、個人的にはどのように見ていらっしゃるのか？　こちらについてうかがってみたいと思います。

シャチ　個人的な意見ですか。そうですね、二人の才能に最初に目を付けたのは、ある意味自分ですから。橋本タカシに関しては、『With You』『Piaキャロ3』そして『ホワイトブレス』と、絵が着実に進歩しています。それだけに、次はどのような進化を遂げてくれるのか。個人的にとても楽しみです。絵柄は進歩しつつ、自分が最初に彼の絵を見たときのインパクトを持ち続けているな、と感心しています。草薙こうたろうとも付き合いは長いですね。ある意味、彼らの作品の一番最初のファンは自分だと思っています。これからに期待していますよ。

◆さて、ここまでシャチさんのお話を聞いてきたのですが、『ホワイトブレス』という作品が、FC02レーベルの中で、非常に大きな存在であるのが分かります。

シャチ　大きいですね。2001年に『Piaキャロ3』が発売されて、3年たって『ホワイトブレス』が出た。『Piaキャロ3』はキラキラしたキャラクターの魅力が前面に出た作品でした。一方『ホワイトブレス』は、装飾を抑えてリアリティを重視したアプロ

ーチで作品作りに取り組んでいる。その意味で『Piaキャロ3』の対極という位置づけになりましたよね。

◆『Piaキャロ3』以降、『あいかぎ』『だぶるまいんど』と、どんどんカメラがキャラクターの内面に向かっていくような作品傾向にあります。『ホワイトブレス』は、その流れのなかの、ひとつの集大成なのでしょうか？

キャラの設定とストーリーを掘り下げてから舞台上で歩かせる、という方法を採った

シャチ　うーん、正直自分の中では、そういった意識はないんです。でも、そう言う評価をいただいているのでしたら、ありがたいですね。『Piaキャロ』シリーズは、ファミレスを舞台に、明るい等身大の日常生活を描きながら誰かと恋をする、という作品で、各ヒロインごとのストーリーはありますが、まだまだキャラクターを掘り下げる余地はありました。一方、『ホワイトブレス』はキャラの設定とストーリーを掘り下げてから舞台上で歩かせる方法を採ったんだと思うんです。その違いの部分が作品傾向の流れに感じられたのだと思いますが、F&C全体というより、草薙と橋本の制作スタイルが前面に出てきた、ということだと思います。

◆もちろんゲームのキャラクターは、作品中だけでなく、その前後も作られていますが、『ホワイトブレス』では、その部分の掘り下げも意識して行われた作品なのでしょうか？

シャチ　そう取っていただいて、問題ないと思います。描きたいヒロインを掘り下げ、さらに深く設定された主人公を絡めることでゲームを構築していったということでしょうね。

◆先ほど『ホワイトブレス』は草薙さんと橋本さんの作品制作のアプローチと言われましたが、それが結実した結果、FC02としての制作の幅も広がったと考えられるのではないでしょうか？

シャチ　我々は、そう認識しています。それと同じように、ユーザーの皆さんにこれからリリースしていくソフトが受け入れてもらえると、とても嬉しいですね。

◆実際に『ホワイトブレス』をプレイしたユーザーさんからも反応が返ってきていると思いますが、どのように捉えられていますか？

シャチ　草薙と橋本には、もう訊かれているんですよね。ふたりはなんて応えていました？

◆賛否両論があったけれど、好意的に受け止めてもらえたと言われてました。

シャチ　なるほど、確かにそうですねえ。これは発売直前に私が感じたことになってしまうんですが、ネットの書き込みやイベントでの反応を見る限りでは、ユーザーさんも「今までと違うぞ」という捉え方をしていただいたようです。これまで培ってきたノウハウの上に、新しい試みを上手く盛り込めれば、ユーザーさんに受け入れてもらえる可能性も広がるのが分かったのは大きかったです。まあプロデューサーとしては、どうしても数字が気になってしまうんですが、これは上を見たらきりがないですからね。実際、私自身が『ホワイトブレス』に期待していましたから。今回ちょっと新しい要素を盛り込みすぎたので（笑）、今後はバランスを取りながら、新しいFC02を打ち出していきたいと思います。

◆今日のお話のなかでも出ていましたが、シャチさんはプロデューサーとして活躍される以前は、制作の現場にいらっしゃいました。ソフトを制作する立場で見たとき、『ホワイトブレス』とはどういった作品でしたか？

シャチ　作り手ですか。……うーん、ディレクター視点から見ると、やっぱり素晴らしい素材が揃った作品だと思います。シナリオ、CG、キャラクター、音楽など、どれも創造力を刺激するクオリティの高いものが揃っているだけに、自分で手がけたいと思わせる作品でした。うーん、どういえばいいのかなあ。『ホワイトブレス』という料理を作るために、旬の高級素材が目の前にズラリと並べられている。それを前にした料理人の気分ですか（笑）。つくづく自分は制作寄りの思考を持った人間だと再認識させられました（笑）。

◆さてFC02は草薙さん、そして『あいかぎ』のうらわさんという二人のディレクターがいて、さらにシャチさんも、まだまだ現役という（笑）、重厚な制作布陣ですが、今後はどういった形でソフト制作を行っていかれますか？

シャチ　それはFC02レーベルとして、ということですよね。

◆はい、そうです。

これまで自分が手掛けた経験のないジャンルやテーマに取り組んでほしい

シャチ　そうですね。まずは新しいテーマとして、これまで自分が手掛けた経験のないジャンルやテーマに取り組んでほしいと思っています。例えばうらわなら『あいかぎ』『チェリッシュピザ』が代表作ですから、"妹"というイメージがユーザーさんにも定着していると思うんです。そこで、ぜひとも他のテーマに挑戦してほしい。草薙は『ホワイトブレス』で培ったリアリティのある世界観だけでなく、例えば『魔女っ娘ア・ラ・モード』のようなファンタジックな作品にも挑戦してほしいですね。まあ、これは極端な例かも知れませんが、今回の『ホワイトブレス』でFC02という制作チームの引き出しが増えたように、草薙やうらわにも、もっともっとキャパシティを拡げてほしいんです。

◆もちろん、今の良さをキープした上で、という条件が付きますね。

シャチ　そうですね。『ホワイトブレス』のアプローチと一緒で、クリエイターのベースになる部分に、どれだけ新しさを積み重ねていけるか。もちろん性急すぎても上手くいかないですし、これまでの作品のファンも大事にしていきたい。バランスを取りながら新しさに挑戦していってほしいですね。

◆それが、今後のFC02の展開になってくるのでしょうか。

シャチ　FC02はカクテル・ソフトの時からそうなんですが、キャラクター・ゲームから始まって、恋愛・純愛ゲームといった流れでユーザーさんの間にも定着していると思うんです。その歴史の流れのなかで、今度は純愛という枠組みを取り外すことで、何か新しいことはできないだろうか、と模索しているんです。まだ、「じゃあ、これを作ろう」というところまでは来ていないんですけどね。もちろん純愛系でFC02のファンになった人に受け入れられるかという不安はあります。その線引きというか、融合にどう取り組むか。そのために必要なのが、何回も繰り返すようですが、FC02のベースに加える変化のバランスなんです。

◆その上で、もちろんFC02のメインストリートを行くソフトも出していく、と。

シャチ　もちろんです。まあ、お約束と呼ばれてしまうかもしれませんがね。ただね、お約束って言葉を、とくにクリエイターさんは嫌うんですが、私は否定する必要はないと思うんです。ベタでいいじゃないか、と（笑）。ブランドの王道とちょっと変わった意欲作が揃って、初めて前進するんですから。

◆まさに、そうですよね。本日は長い時間お話いただきまして、まことにありがとうございました。最後に月並みな質問で申し訳ございませんが、F&Cファン、『ホワイトブレス』のファンの皆さんに、メッセージをお願いいたします。

シャチ　『ホワイトブレス』を購入された方、またこれから購入されるかもしれないみなさま、今回はこういう形でムック本が発売されることになりました。この本には作品の魅力はもちろん、制作スタッフの作品に込めた想いも詰まっています。ぜひとも手に取ってみてください。そして、この本を読まれた後に、もう一度『ホワイトブレス』をプレイしていただけると幸いです。今後もF&Cを宜しくお願いいたします。

開発スタッフインタビュー

OdiakeS

橋本さんから「今回僕がメインで制作するゲームがあるので、音楽を担当してくれないか」とお話をいただきました

◆OdiakeSさんは『ホワイトブレス』で初めてF&C作品の音楽を手掛けられたのですよね。これまで数多くの作品を手掛けられているので、F&C作品が始めてというのが信じられないのですが(笑)、参加の経緯をお聞かせください。

OdiakeS　実は橋本タカシさんや草薙こうたろうさんなどとは、同人活動などで付き合いがあったんです。橋本さんには以前から僕の音楽を気に入っていただいていて、「今回僕がメインで制作するゲームがあるので、音楽を担当してくれないか」というお話をいただきました。

◆『ホワイトブレス』の企画を聞いてのファースト・インプレッションはいかがでしたか？

OdiakeS　うーん、そうですねえ……『ホワイトブレス』……私の音楽のテイストに、非常に合う作品じゃないかな、と感じましたね。そういう作品にしてくれたのかな、と思うくらいに（笑）。私は基本的に、打ち込み系のようなリズム主導の音楽よりも、クラシック音楽のような楽曲の方が得意なんです。『ホワイトブレス』には生楽器のサウンドがしっくりくる雰囲気を最初から感じていました。

◆それでは『ホワイトブレス』の楽曲は、ピアノなどの生楽器を中心に構成されていったのですか？

OdiakeS　F&Cさんからの注文もありましたから。「アコースティックな楽器を中心にしたサウンドでやりたい」という。

◆確かにサウンド・ワーク全般にピアノがフィーチャーされているという印象を受けました。また、ボーカル曲以外でもメロディ・ラインがくっきりと際だった曲が多いとも感じました。

OdiakeS　そこには私の作曲スタイルが色濃く出ているんだと思います。私はBGMなどを制作するときも、メロディがきっちりと立つような作り方をするので、完全に伴奏だけ、というような作り方はあまりしないんです。『ホワイトブレス』には、特にメロディアスな音楽の方が、ぴったりハマるんじゃないかな、とも考えていました。

◆アコースティックなサウンド作りがオファーにあったと言われていましたが、メロディという点で聴いていくと、生ピアノよりもキーボード系の楽曲の方が、よりメロディが際だって聞こえました。

OdiakeS　ああ、そうかもしれません。

◆特にゲーム序盤に登場する楽曲にその傾向を強く感じました。序盤は日常生活の明るいシーンや、各キャラクターを印象づけるサウンドが多かったので、メロディがくっきりとしているのかな？　と思ったのです。

OdiakeS　うーん、特にそういった意識はしていませんでした。『ホワイトブレス』のサウンドは、本当にすんなりとできたものが多いんですよ。私の作曲スタイルはメロディが先に生まれることが多いんです。指定されたシーンから私なりにイメージするものは、メロディから作られるものが多くて、そこに肉付けしていくというパターンですね。メロディがテーマを表現するのに最適なんです。

◆発注された音楽の使用されるシーンやグラフィックを見ながらテーマを決められるんですか？

OdiakeS　一番重要なのは、相手がどういった音楽を必要としているのか、という点です。そこを押さえておかないと、行き当たりばったりの作曲をすることになってしまう。なので、そのすりあわせはキッチリと打ち合わせます。ディスカッションするだけじゃなく、メーカーさんがイメージする音楽を具体的にサンプル曲で提示してもらったり、こちらから「こういう音楽ですか？」とイメージの近い曲を聴いてもらったり。そこから導かれた結論を、私のなかで咀嚼して作曲する、というスタイルですね。

◆『ホワイトブレス』の世界はOdiakeSの世界にピッタリと先ほど言われていました。音楽もすんなりできた、とのことでしたが……。

OdiakeS　順調に進みましたよ。リテイクもほとんどなかったんじゃないかな。もちろん事前のすりあわせをきっちり行ったのもありますし、橋本さんや草薙さんが、元々私の音楽を気に入ってくれた上での発注だった、というのもあると思います。ですから、仕事として考えると、発注から納品まで、それほど時間がかからずに、自分でも納得のいく音楽が作れたタイトルではありますね。

◆最近のPCゲームではサウンドの持つ影響力も大きくなっています。そんななかで、作品にマッチした楽曲がすんなりと制作できたというのは、『ホワイトブレス』というドラマを盛り上げていく上でも、非常に重要だったのではないか、と思います。

OdiakeS　作曲スタイルとしては、本当は音楽が最後の方がいいんです。CGやシナリオがある程度揃ってからの方が、イメージを掴みやすいですからね。そうすれば作品イメージにあった楽曲を揃えるだけでなく、逆提案で「このシーンでは、この曲を入れてみたい」とか「ここではアレンジを多少変更していこう」というような、サウンド・プロデュースまで可能になりますし。『ホワイトブレス』では、さすがにそこまではできませんでしたけれど、それでも作曲に入る前に、ゲームのメインスタッフさんたちとは十分なディスカッションを重ねたのが、最終的な結果に結びついたと思います。そう、これは後から聴いたんですけれど、私が作った楽曲からインスパイアされて生まれたシーンもあったそうですよ。「この音楽を聴いて、このシーンのシナリオが書けそうだ、と思いました」って。なるほど、それも作品作りのひとつだなあ、と感じましたね。

◆草薙こうたろうと橋本タカシのコラボレーションに、OdiakeSのサウンド世界も合わさっての『ホワイトブレス』だったんですね。

OdiakeS

― サウンドクリエーター ―

数々の美少女ゲーム作品で音楽を手掛け、ユーザーの認知度も高い人気サウンド・クリエーター。意外にもF&C作品は『ホワイトブレス』が初参加だが、作品世界を盛り上げる音楽への評価は高い。

シナリオと絵と音楽では表現方法が違いますが、それが三位一体となって生まれたのが『ホワイトブレス』

OdiakeS 3人一緒になってイメージを作り上げていった部分も大きかったんじゃないですか？ もちろんシナリオと絵と音楽では表現方法が違いますが、それが三位一体となって生まれたのが『ホワイトブレス』だったのではないでしょうか。

◆『ホワイトブレス』用には、何曲くらいの音楽を用意されたのですか？

OdiakeS 15～6曲くらいかな。最近の美少女ゲーム作品にしては少ない方じゃないですか。

◆楽曲中、ボーカル曲は2曲ですね。

OdiakeS はい、オープニングの「遠い背中」とエンディングの「未来のカタチ」です。

◆2曲だけを聴き比べると、ガラリと雰囲気が違いますが、それぞれどのようなアプローチで曲作りをされたのですか？

OdiakeS オープニングの「遠い背中」は、凄絶なドラマの展開を想起させるような激しいサウンドがほしい、というお話だったんですね。で、激しさを表現するのにエレキ・ギターを入れてほしい、と。これは私の趣味なんですけど、刑事モノのドラマが好きなんですよ（笑）。それで、ああいったサウンドになってしまったんですけれど。

◆ギターの音作りなどにしても、少し懐かしい感じですよね。

OdiakeS シンプルにディストーションをかけたギター・サウンドです。ちょっと80年代テイストで。『ホワイトブレス』って物語の後半に向けて、一気にドラマティックになっていくじゃないですか。それを表現するには、あの頃のドラマ音楽に近い方が、伝わりやすいんじゃないか、と考えました。

◆オープニング曲はデモ・ムービーにも使われてますよね。

OdiakeS プリ・プロダクションの段階でF&Cさんには聴いてもらったんですが、「イントロのギターがいい」と言ってもらえてました。楽曲からムービーをイメージしていただけたみたいです。

◆ただ、『ホワイトブレス』はドラマティックな後半が見どころとはいえ、前半から中盤にかけては、主人公たちの日常が描かれていますよね。特に序盤の部分は淡々と進みますが、その直前に激しい楽曲が入ると、前半のイメージを崩してしまいかねない難しさもあったと思います。

OdiakeS オープニングはプロモーションの目的もあるので、敢えて激しい曲でいこうと考えました。

もちろん『ホワイトブレス』という世界を盛り込むことも意識しましたけれど。

◆実際にオープニング・ムービーをご覧になられての感想はいかがですか？

OdiakeS お、分かってくれてるな、と（笑）。「そうそう、ここはそんな色合いなんだよ」とか言いながら見ていました。

◆映像が入ると、制作側でも楽曲のイメージが変わったりすることがありますか？

OdiakeS うーん、そうですねえ。でも、今回に関しては、本当にイメージ通りでしたね。

◆やっぱり自分のイメージ通りのムービーになる方が嬉しいですか？

OdiakeS まあ、全然違ってしまうのに比べれば（笑）。でも、なかには「おお、ここでそんな映像を入れ込むか」なんて感心させられたりもしますから、そこは一概に何とも言えません。『ホワイトブレス』に関しては打ち合わせも綿密に行いましたし、制作期間も十分に取らせていただけましたから、イメージから外れることはないと思っていました。

◆エンディング「未来のカタチ」は、いい意味でオーソドックスなエンディング曲ですよね。

OdiakeS エンディングの王道といった曲です。最初は、凄く賑やかに終わらせようか、という意見もあったんですよ。「学園天国」ってあるじゃないですか。あんな雰囲気です。でも、やっぱりラストはしっとりと締めましょう、という方向性になったので、ならば王道のエンディング曲にしよう、と。

◆ある意味派手なオープニングとは対極に、エンディング曲では楽器の数も減らしていますよね。

OdiakeS まあ、その辺はあまり意識せず、しっとりとしたエンディング曲を、ということですね。

◆ベースが非常に前に出てきていますよね。BGMでも何か感じたのですが。

OdiakeS 実は私、ベーシストなんですよ（笑）。でも、「ベースを聴かせよう」とか、特別意識しているわけじゃないんですよ。まあ、「こういうベースラインは格好いいよな」とか「自分でも弾いてみたいな」とか思っている部分はありますけれど。

◆インタビューの最初の方でクラシック音楽がお好きとお聞きしたんですが、『ホワイトブレス』の楽曲はドラマ性を持ちながらも、大編成の大仰さはありませんよね。

OdiakeS 最初のオファーが「ピアノをメインにした楽曲」ということでしたし、実際に『ホワイトブレス』という作品から受けたイメージも、大仰なものではありませんでしたから。色々な楽器を盛り込んで、ごてごてと盛り上げるのではなく、いくつかの生楽器のアンサンブルでシンプルかつ爽やかに盛り上げたかったんですよ。

◆ピアノ主体というのも、そこからですね。

OdiakeS はい。実際に何曲かはピアニストを招いてスタジオ録音を行いましたし、バイオリンの生演奏とのアンサンブルを取り込んだりと、アコースティック・サウンドにはこだわって曲作りを進めていきました。

◆その他、今回のサウンドワークで印象的だった部分はありましたか？

OdiakeS 特にこれ、というのはないんです。『ホワイトブレス』はキャラクターごとではなく、シーンを想定して作曲したので、実際に使用されたシーンも予想通りでしたし。『ホワイトブレス』という物語のなかで曲作りができたので、ドラマのシーンにピッタリなサウンドになったのではないか、というのはありますね。もちろん今回は楽曲を提供するだけだったので、全てのシーンにマッチした音楽を用意するまでには至りませんでしたけれど、この辺は音楽監督として制作スタッフの一員となって音楽を構成していければ、より作品に密着したサウンドワークができるのではないかと思いますね。

◆それだけゲーム作品のなかで音楽の占める部分が大きくなっているのは間違いありませんが、実際にユーザーさんの反応などから実感されることはありますか？

OdiakeS ゲーム作品を選ぶ上で、音楽を判断基準のひとつにしているユーザーさんは増えてきていると思いますよ。たとえば「OdiakeSがやった作品だから、こんな物語だろう」とか。各作曲者のカラーは間違いなく出てきますから。メーカーさんの姿勢も、「音楽は誰でもいい」というのではなく、「今回はこういう作品だから誰々にお願いしたい」

と変わってきています。だからこそ今回の『ホワイトブレス』のように、私も作品性を理解した上で楽曲提供ができるんです。

◆今回のインタビューでも、クラシック音楽にベースなど、様々なキーワードがありましたが、OdiakeSの音楽的なルーツをお聞かせ下さい。

OdiakeS 最初は高校生の時でしょうか。オーケストラでコントラバスを担当していたんです。それで大学に入ってバンドを組みました。ベース担当でジャズなんかを演奏していたんです。で、以前からゲーム音楽も好きで、一番影響を受けたのは『オホーツクに消ゆ』（笑）。あれは名作ですよ。なにがすごいって、作曲したのが専門のミュージシャンではなかったのですから（笑）。作曲の才能は専門性に偏らないってことですよね。

◆なるほど。オーケストラとジャズバンドでの経験が、アコースティック・サウンドとアンサンブルの拘りを生んだのですね。

OdiakeS うん、それはあるかもしれませんね。例えばリズムにしてもメロディにしても、それ単体であるのではなく、ハーモニーを意識します。

◆これからゲーム音楽には、どういった関わり方をされていきたいとお考えですか？

オファーがあれば音楽監督として、イチから作品制作に関わっていきたい

OdiakeS 今は外部スタッフとして音楽を制作していますが、機会があれば音楽監督として、イチから作品制作に関わっていきたい。原画家さんやシナリオライターさんなどと一緒に、「音楽からのアプローチはこうしてきた」と思える作品にめぐり会い、関わっていきたいですね。

設定＆イメージボード集 ／設定ラフイラスト

一ノ瀬未緒
Mio Ichinose

初期はポニーテイルの剣道少女だった未緒。それがショートカットの弓道少女になるまでには、様々な葛藤が……あったのかはインタビューをご参照のこと。変更の理由が、草薙こうたろう氏と橋本タカシ氏で異なるのを味に感じてしまうのが、二人のコンビの良さなのかもしれない。

表情ラフカット

ゲーム前半では明るいケンカ友達の未緒だが、キャラ・デザイン決定時のラフでは、比較的おとなしい表情が多い。

制服

制服インナーの紹介カット。シンプルなジャケットと共に、リアルな作品性を強調する。

茜坂学園制服

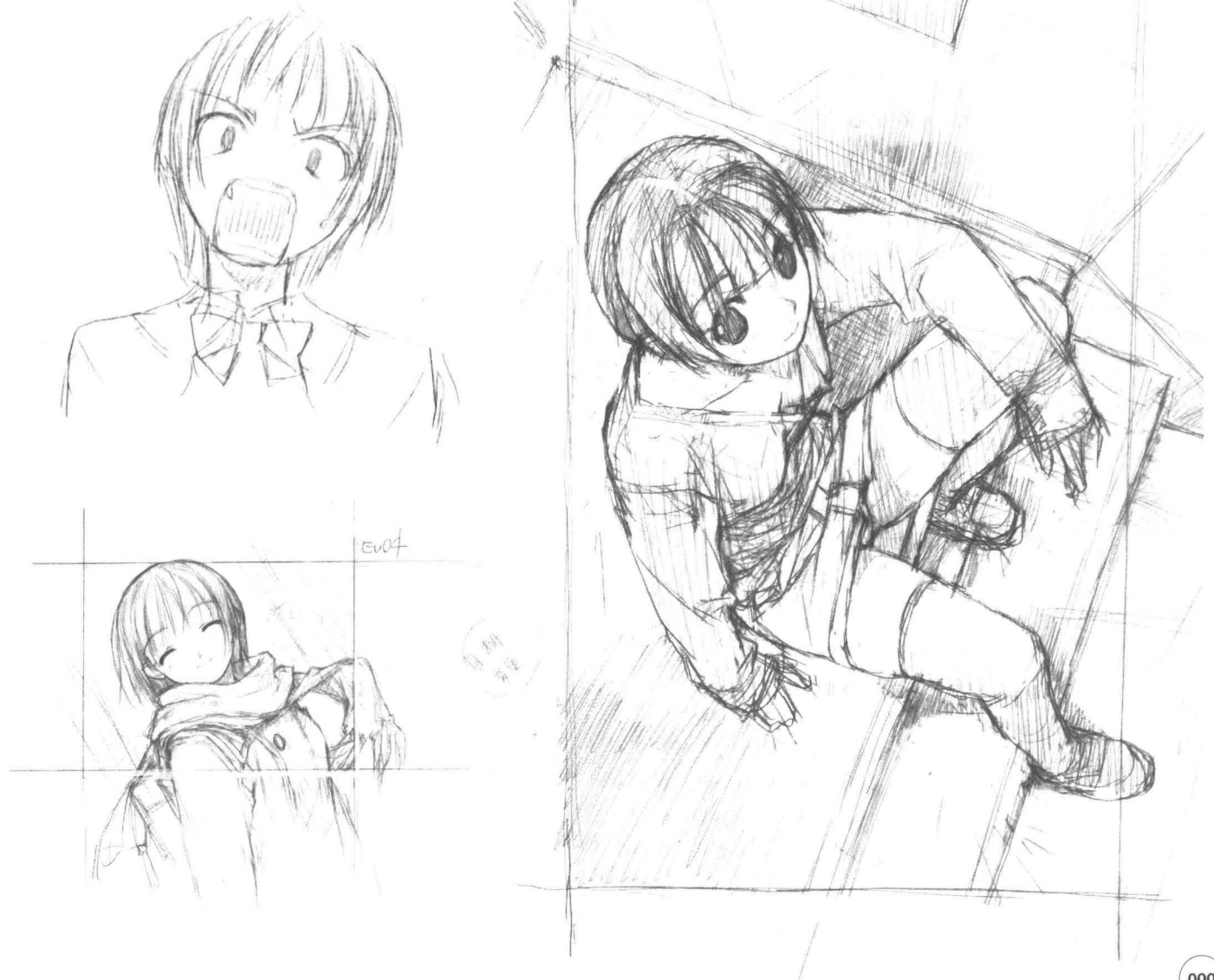
右手に弓、左手に学園指定の鞄。背負うタイプの鞄は自転車通学にピッタリだが、さすがに弓を持ち帰るときは電車通学なのだろうか。

暑くない暑くない暑くない暑くない暑くない暑くない暑くない暑くない暑くない　7/15

イメージ・イラスト

元気一杯で表情豊かな未緒。ラフやイメージ・イラストでも、魅力的な彼女の表情の変化を見ることができる。

イメージ・イラスト

キャラ設定用のイメージ・イラストでは、未緒の性格を顕わしているイラストが目立つ。上の落書きは秀逸な1枚。こうしたイラストの豊富さが、等身大のキャラを生み出す。

イベント・ラフ

自転車のふたり乗りを斜め上からのアングルで描いたカット。従来のF&C作品によく見られる構図で、『ホワイトブレス』がこれまでの基盤の上に成立しているのが分かる。

設定イラスト

弓道着のまま、自転車に跨る未緒。背中には茜坂学園指定の鞄と弓、そして肩には矢筒を抱えて完全装備。一見バランスを取るのが難しそうだが、未緒には馴れたことなのだろう。自転車に弓道着というギャップが面白い。

イベント・ラフ

カメラ・フレームの指定がはっきり分かるイベント・ラフ。エッチ・シーンだけに、ヒロイン中心のアングルになっている。ちなみにこのラフは、ゲーム本編では未使用となった。

イベント・ラフ

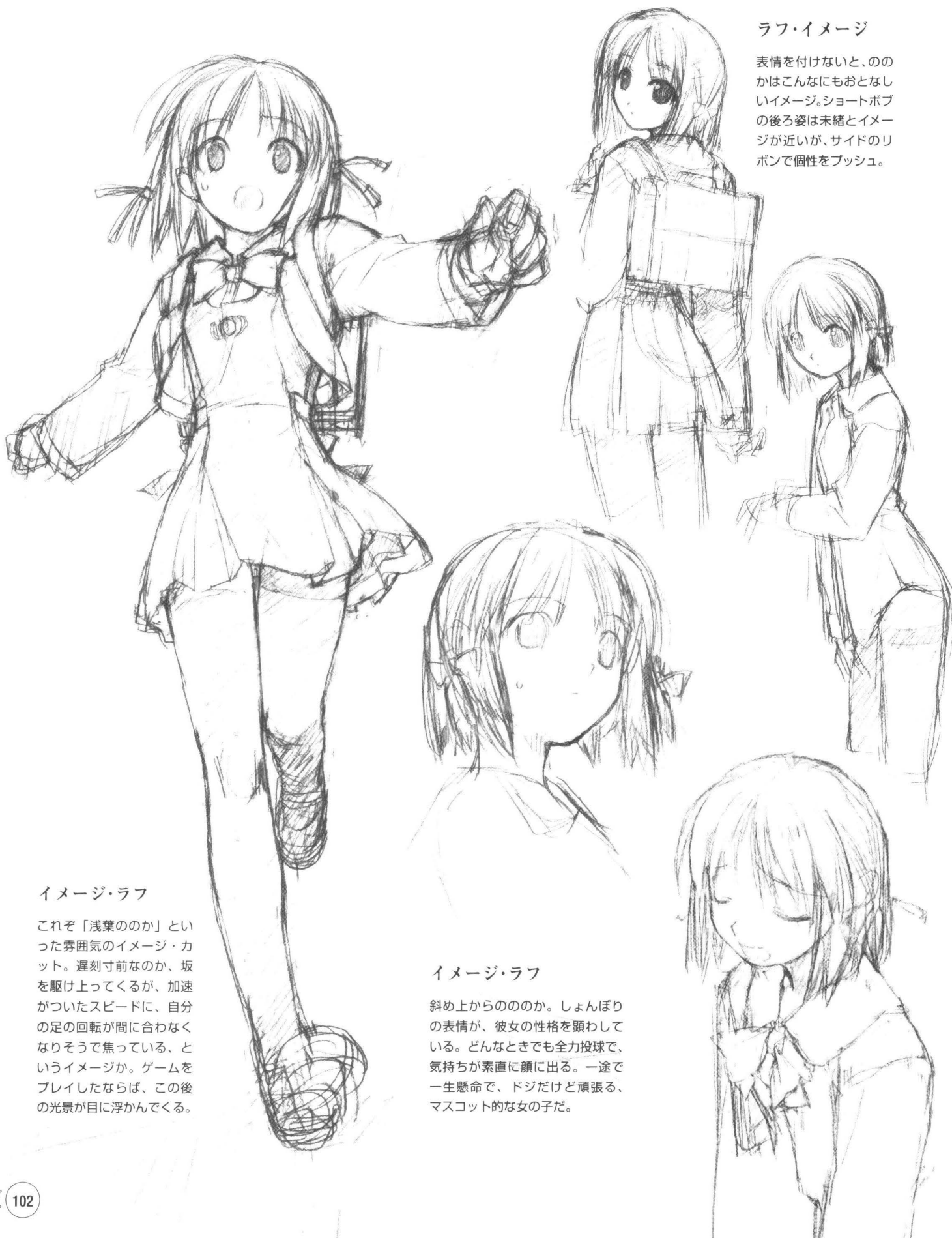
元イラストと構図の差が明確なラフ。やはりヒロイン中心のアングルになっている。

浅葉ののか

Nonoka Asaba

橋本タカシ氏曰く「落書き」のパロディ・イラストからデザインが決定したというののか。ゲーム本編では健気な後輩として登場するが、デザイン決定エピソードも健気のひとことこと。ラフやイメージ・イラストも、そんなちょっと切ないののかの魅力が描かれている。

ラフ・イメージ

表情を付けないと、ののかはこんなにもおとなしいイメージ。ショートボブの後ろ姿は未緒とイメージが近いが、サイドのリボンで個性をプッシュ。

イメージ・ラフ

これぞ「浅葉ののか」といった雰囲気のイメージ・カット。遅刻寸前なのか、坂を駆け上ってくるが、加速がついたスピードに、自分の足の回転が間に合わなくなりそうで焦っている、というイメージか。ゲームをプレイしたならば、この後の光景が目に浮かんでくる。

イメージ・ラフ

斜め上からのののか。しょんぼりの表情が、彼女の性格を顕わしている。どんなときでも全力投球で、気持ちが素直に顔に出る。一途で一生懸命で、ドジだけど頑張る、マスコット的な女の子だ。

イメージ&イベント・ラフ

描かれたイメージ・イラストを見ると、女の子と主人公の距離感がダイレクトに伝わってくる。司とののか。学年の違い、家族関係、いろいろな要素が、ふたりの立ち位置を微妙に揺り動かす。遠くから司を見つめるののか。その切なさが絵から伝わってくる。

イベント・ラフ

相手がののかだと、なにかイケナイことをしているようにも見える。エッチの時も健気なののか。表情に素直さと一緒に現れている。

イベント・ラフ

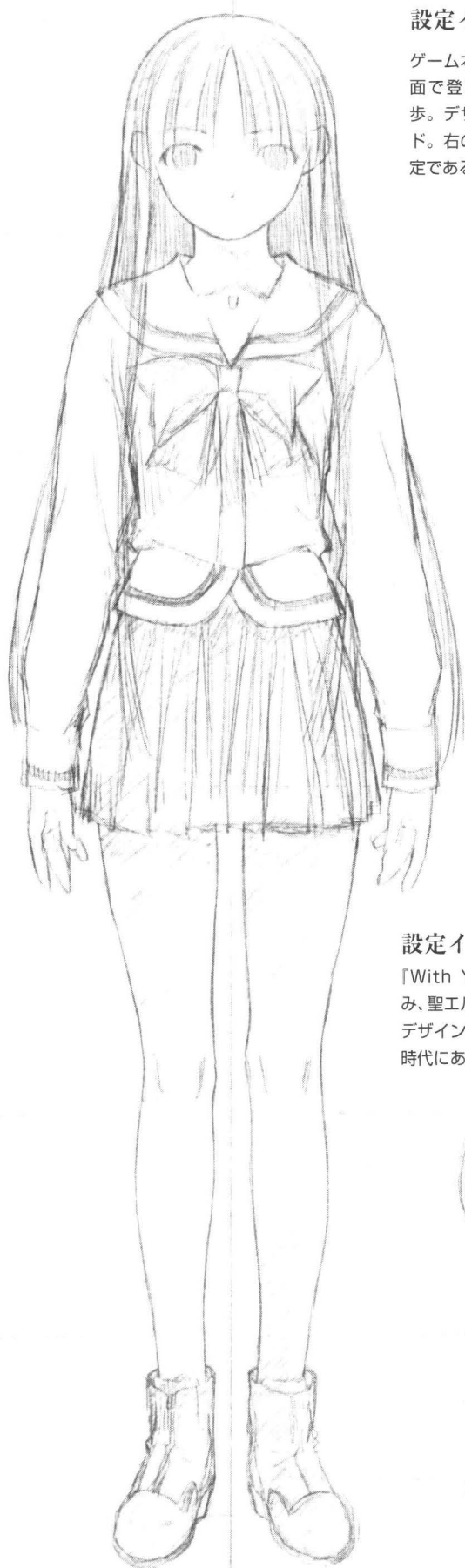
エッチシーンでも、他のヒロインと比較して密着度が高く思える。一度義兄妹となり、1年後に別離を経験したからか、その献身的な性格がエッチにも現れている。表情に最初に目がいく構図が多いのが、ののかCGの特徴だ。

柊歩

Ayumi Hiiragi

学校が違うだけでなく、登場ヒロインのなかで、一人だけ夢を追いかけ働いている歩。美乃の対極に立つキャラクターとして、ゲームに登場した。草薙氏の「モデル」というひとことに、橋本氏も一発回答でキャラクターをデザインしたという逸話を持つ。

設定イラスト

ゲーム本編では、当初しかめっ面で登場することが多かった歩。デザインはもちろん冬モード。右のイラストは、手袋の設定である。

手袋
コレです

モデル
制服(外)

設定イラスト

『With You』でお馴染み、聖エルシア学園冬服。デザインは『With You』時代にあったとのこと。

設定イラスト

モデルという職業を意識してか、他のキャラクターに比べて、表情のバリエーションが豊富。さらに髪型や衣装などの変化もあり、見ていて楽しい表情集だ。凛とした眼差しが印象深い。

イベント・ラフ

街中に貼られていた献血ポスター。柔らかな微笑みが、いかにも病院のポスター風だが、見る側が自然に受け取れるのも、プロのなせる技だ。

イメージ・イラスト

和服姿の歩。結い上げた解れ髪と、すらりと伸びたうなじがセクシーだ。襟元の雰囲気から、正月の晴れ着のイメージか。

イメージ・イラスト

しかめっ面モード。寄せた眉根と睨み付けるような視線。いったい誰に向けて睨み付けているのか、これまた本編を知る人には自明かも。

イベント・ラフ

歩と司のエッチ・シーンのラフ・イラスト。身体を完全に司に預けた歩を見るだけで、物語が浮かんでくる。情景を伝えるだけの記号的なイベント・イラストにせず、1枚1枚にドラマ性を感じさせてくれる。

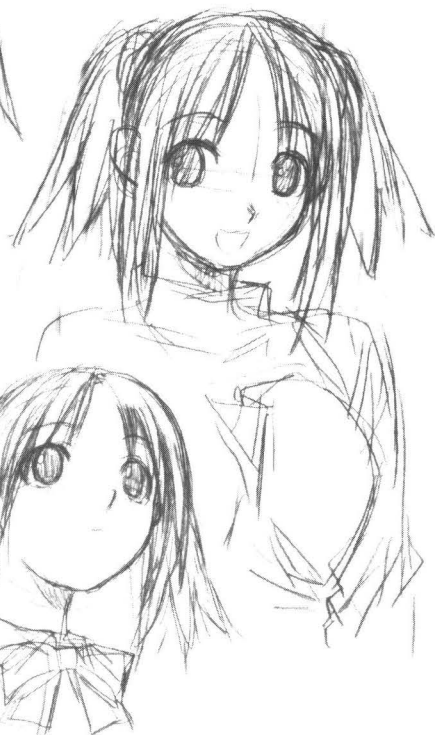
イベント・ラフ

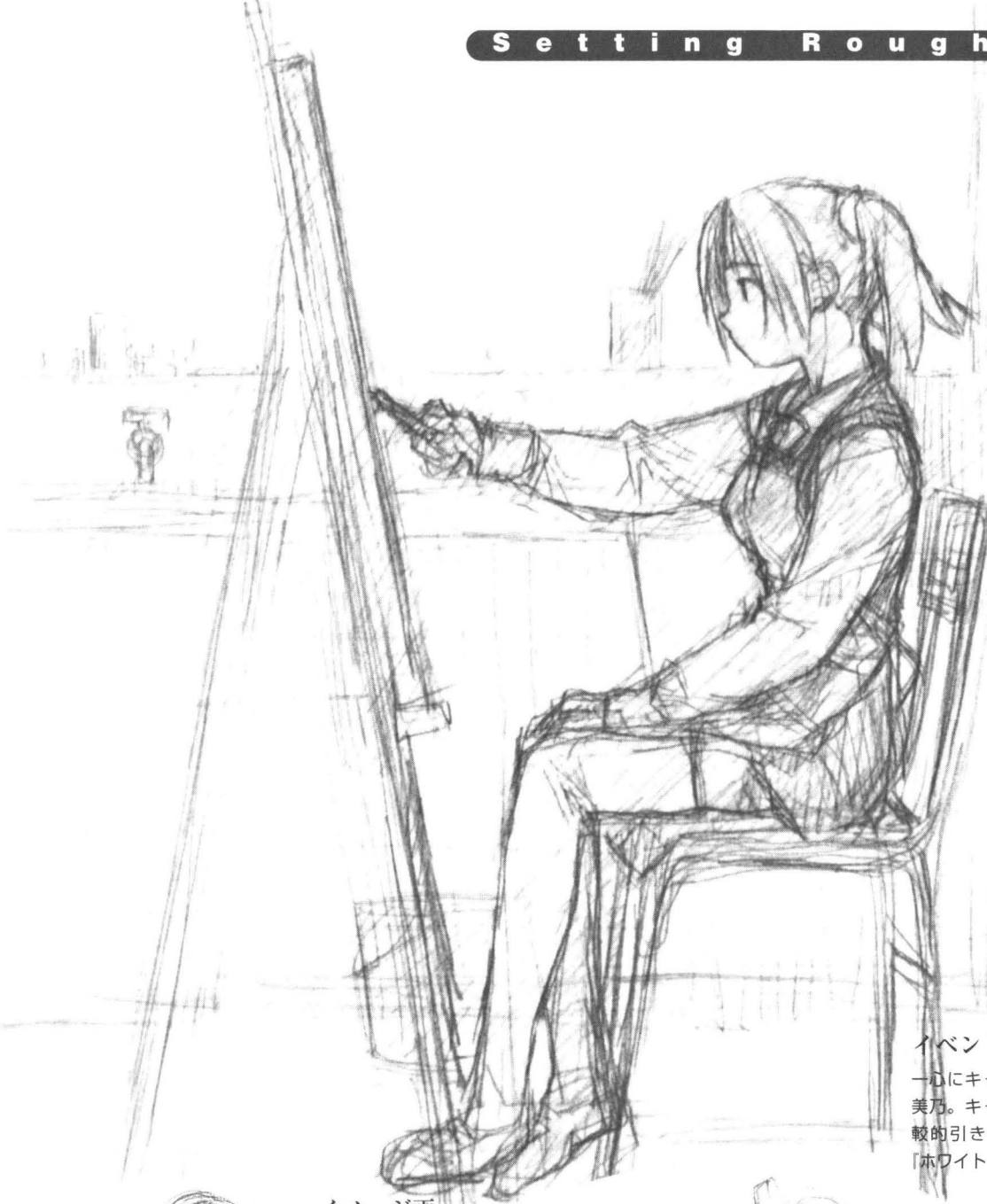
司に後背から抱きかかえられ、身体を弄ばれる歩。18禁タイトルでは珍しくない構図だが、F&Cの恋愛系作品ではあまり見ることがない1枚ではないか。今回紹介したイラストのなかでも、アダルト性という意味では上位にランクされるイベント・ラフだが、残念ながらこちらも本編未使用。あまりに濃厚すぎるカットということで、全体のバランスを考慮しての決断だろうか。

春日美乃
Yoshino Kasuga

キャラクター・デザインに苦心したという美乃。ツインテールという設定だったが、『With You』直後でもあり、色々装飾を付けすぎたのが迷いの原因だったそうだ。最終的には他のキャラクターたち同様にシンプルにまとまったが、その分地味めな性格になってしまった!?

イメージ・イラスト

なぜか涙ぐみながら、こちらを振り返る美乃。このイラストは、まだキャラ・デザイン決定前である。証拠はツインテールのリボン。完成版では更にシンプルに、髪を結わえている。

ラフ設定画

一番上から3枚は、髪をまとめる位置も高く、毛先などは記号が残る。更にデザインでブラッシュアップを重ね、最終形のシンプルな女の子になった。

イベント線画

一心にキャンバスに筆を走らせる美乃。キャラによりすぎない、比較的引きの構図が見られるのも『ホワイトブレス』らしさ。

イメージ画

美乃の性格を表現する2枚のイラスト。右は初期作品で、ツインテールが微妙に違う。

遠峰凪沙

Nagisa Toomine

司の従姉弟で、浪人生。「うつむいた表情が似合う女性」がコンセプトで、髪型などもそれに則ってデザインされた。年上で、ほとんどひとり暮らし状態の司にとっては、そのまま母親代わりの存在。「この作品には母親的なキャラクターが多いんです」とは草薙氏のコメントだ。

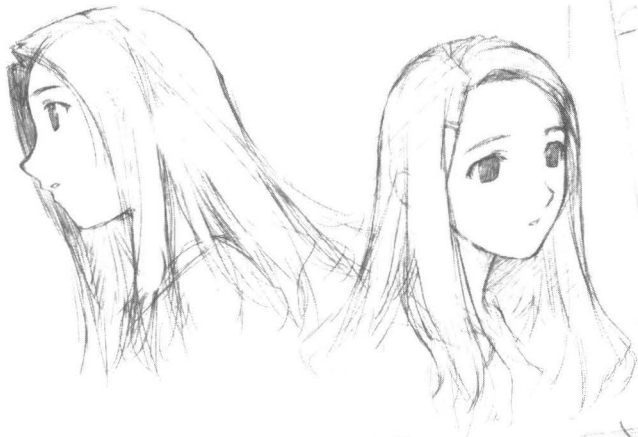
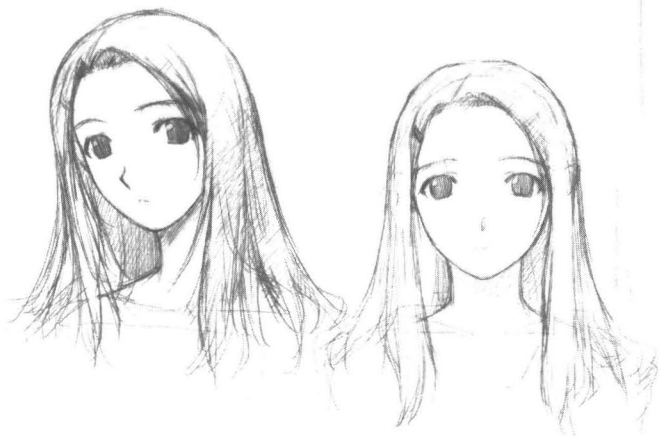
設定イラスト

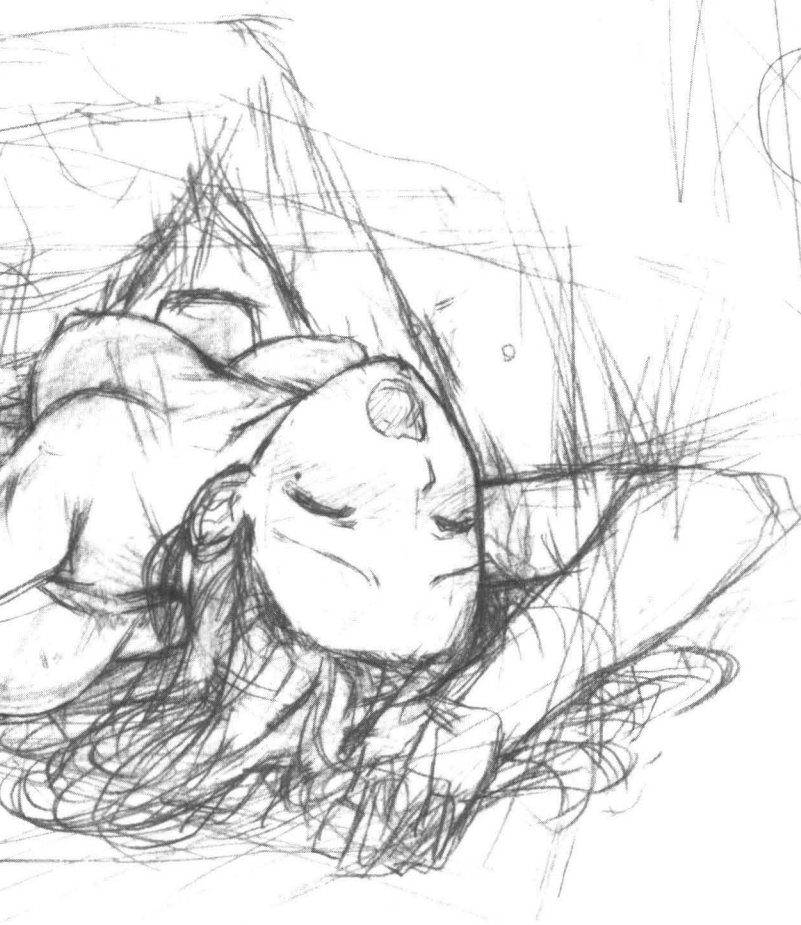
イラストに並記されているように、凪沙のコンセプトは「浪人生」で「うつむいた顔が似合う」のふたつ。そのため、初期のイラストでは斜め上からのカットが目立つ。髪型も変遷あり。

初期設定画

かなり初期に描かれたと思われる1枚。髪型も顔つきも、かなり幼く描かれている。「浪人生」はありだが、この凪沙だと母性を直接は感じさせない。

設定イラスト

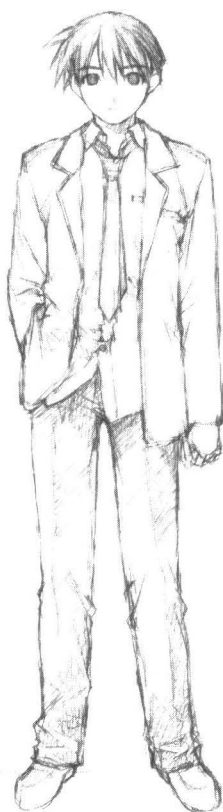
髪型がワンレングスになり、額を出したことでずいぶん大人っぽくなった凪沙。瞳の大きさ、服装などにも大人っぽく調整されている。

設定イラスト

ほぼ完成形態となった凪沙。どことなく憂いを含んだ表情が目立つのは、「うつむいた顔が似合う女性」というコンセプトからか。右のパジャマ姿では、前髪が落ちている分だけ、他のヒロインの年齢に近く感じる。

イベント・ラフ

歩のページで紹介した未使用エッチCGに勝るとも劣らない、濃密なセックス・シーン。ラフ画である分、さらに妖艶なイメージになっているのだろう。このシーンも本編には未収録。作品の方向性は見事に統一されているが、正直こういうCGも見たかったというファンも少なくないのでは？

サブキャラクター

Sub Character

美少女ゲームである以上メイン・ヒロインに注目が集まるのは当然だが、『ホワイトブレス』という作品を語るとき、多彩なサブ・キャラクターがストーリーを動かしている点も見逃せない。各キャラクターの設定イラストを、ここでは一気に紹介していきたい。

司

ネクタイを弛めた着崩しが特徴。ラフというより、自由気ままという印象が強い。

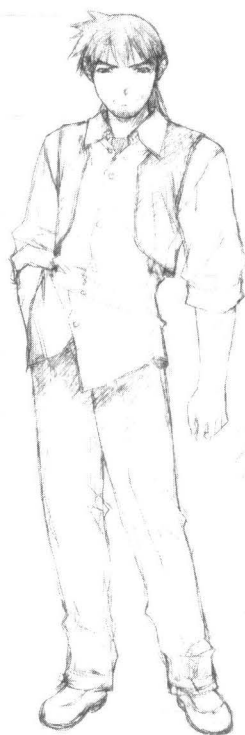
鳳刹那

主人公と比べて、きっちりした制服の着こなしが、刹那の育ちの良さをアピール。

那由多みかん

『ホワイトブレス』で日の目を見たレポーター。橋本タカシ、渾身のデザインだ。

凪沙の彼氏

いかにも今風の大学生。調子のいい性格が、服装のデザインなどにも現れている。

柊郁

タイトスーツが、彼女のセンスの良さとシャープな印象を際だたせている。

春日太平

トレーナーとジーンズが子供っぽい活動性をアピール。子供は風の子なのだ。

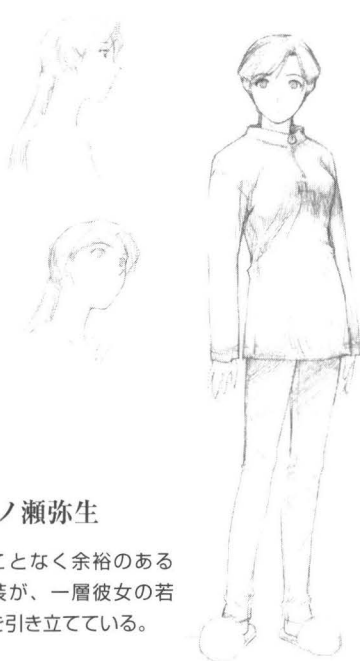
美馬祐士郎

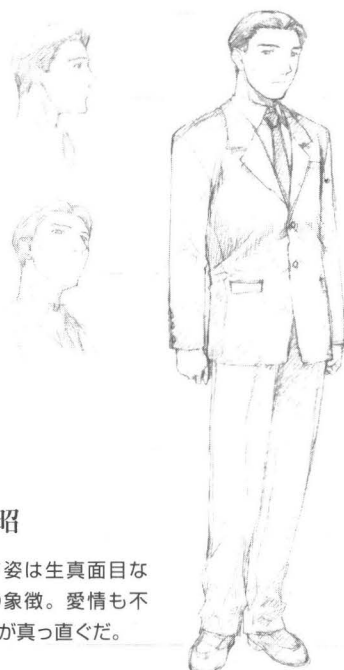
コットンシャツとチノパンという服装と、無造作に束ねた長髪がトレードマーク。

春日洋子

ゆったりしたワンピースは兄の太平と対照的に、おとなしい女の子を印象づける。

一ノ瀬雅人

温厚な表情と飾り気のない服装が、優しく芯の強い人柄を表す。

一ノ瀬弥生

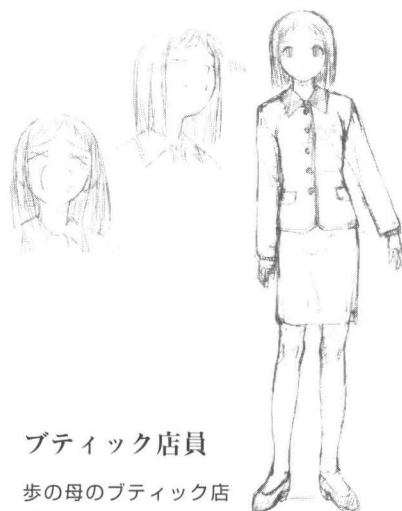
どことなく余裕のある服装が、一層彼女の若さを引き立てている。

橘泰昭

スーツ姿は生真面目な性格の象徴。愛情も不器用だが真っ直ぐだ。

天女目雫

和服に黒髪の神秘的な存在。眼差しに強い意志が込められている。

智恵子

凪沙の元彼の現彼女。いかにも我が儘そうな表情が性格を映す。

ブティック店員

歩の母のブティック店員。地味だが失敗ばかりで、表情も涙顔。

◎日の目を見なかった幻のキャラクター

群像劇として、たくさんのキャラクターが登場する『ホワイトブレス』。しかし、他にもデザインされながら日の目を見なかったキャラクターも多数。ここでは未緒の兄と、姉御肌の駄目シスターを紹介。彼らの活躍する物語も見てみたい。

万里店長

頑固だが人の良さそうな表情が印象的。ロケハン先の店長がモデル。

一ノ瀬史弥

未緒の兄。さわやかで社交的で真面目。現在は県外の大学に通うために不在だ。

榊麻耶

祐士郎の知り合いの駄目シスター。少々乱暴だがノリのいい姉御肌の女性。

制服&カバン設定資料

Set Material

主人公たちが通う茜坂学園は、藤沢市近郊の海に近い高台にある。男女共学で学生は近隣から通学してくるのがほとんど。そんなオーソドックスな茜坂学園の女子制服は、予想以上に細かい部分まで設定されている。ここでは設定イラストを中心に紹介していく。

ジャンパースカート

左肩のスナップと腰のベルトで固定する、オーソドックスなジャンパースカート。前と後ろにふたつずつのプリーツが特徴。ちなみに夏服は、スカートとブラウスという組み合わせになる。

コート

茜坂学園指定コートは、フロントがダブルでフード付き。こちらもデザインはオーソドックスだが、丈は若干短め。

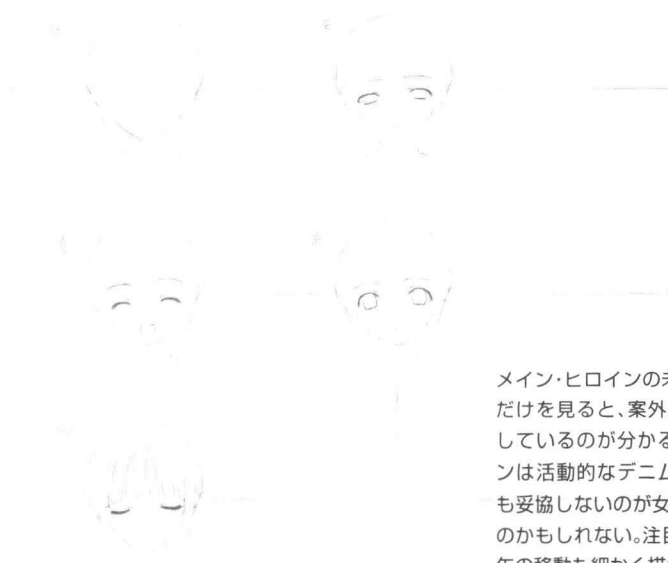
鞄

学園指定の鞄は、ベルトを調節することで、手提げ、肩掛け、背負いと3種類のスタイルを使い分けられる優れモノ。未緒とののかは背負うタイプで、美乃は手提げ型を愛用している。鞄のフロントに学園ネームが入っているが、目立たないデザインになっているのが学生には嬉しい。

設定＆イメージボード集 ／原画イラスト

キャラクター立ち絵&表情

様々に設定された各キャラクターの立ちCGと表情の線画を掲載。それぞれの差分データ用線画も併せて紹介していこう。

一ノ瀬末緒

メイン・ヒロインの末緒は、評定衆だけを見ると、案外幼い顔つきをしているのが分かる。ファッションは活動的なデニムのミニ。冬場も妥協しないのが女の子の意地なのかもしれない。注目は弓道着。弓矢の移動も細かく描かれている。

下着姿

制服

指定リュック（前）

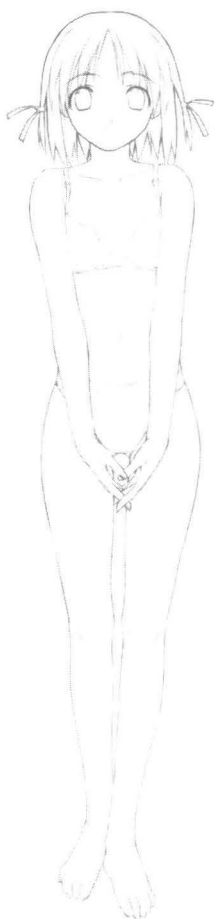
コート

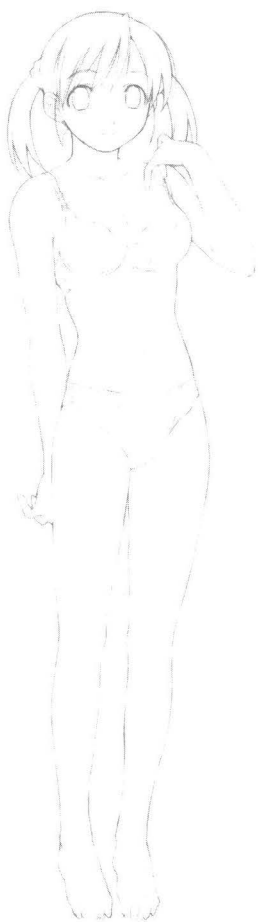
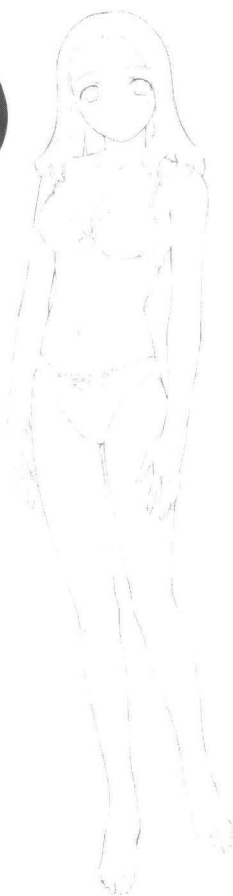
私服・部屋着

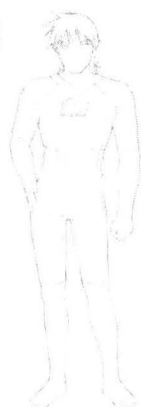
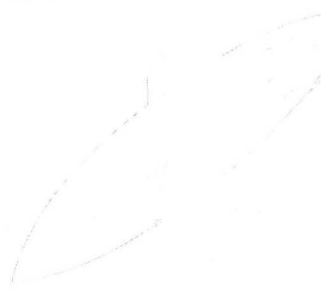
私服・外出

弓道着

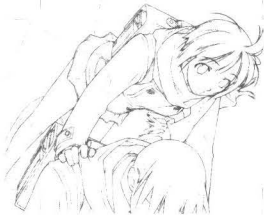
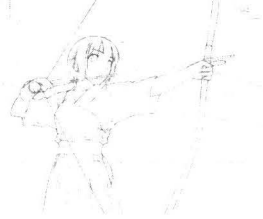
弓矢移動用ケース

弓矢移動用ケース

くっきりとした瞳と眉毛が、ののかの表情をはっきりと表現する。それが顔全体で感情を表しているようで、幼いイメージに繋がってくる。私服はシンプルだがニーソックスがワンポイント。アルバイトではエプロンを着用する。

モデルという設定なので、敢えて様々な装飾を外した歩。表情の変化は、主に目。見開くことはほとんどなく、その分、気の強さが感じられる。制服と私服のギャップも、学生とモデルという二面性を持つ歩の設定にピッタリだ。

ののかと一緒で眉と瞳で表情を変化させているが、幼さではなく、人の良さを感じさせる。私服は活動的で、「楽に動けるのが好き」というタイプなのだろう。制服の着こなしなども、他の女の子ほどは気にしていないのかも。

『ホワイトブレス』のヒロインのなかでもっとも年上だけに、表情もおだやかなことが多い。変化もあまり大きくなく、それが余裕に繋がっているのか。外出着はさすがに大人っぽいが、室内ではラフな感じ。このあたりにも大人の余裕？

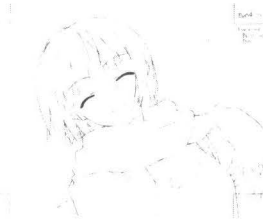
鳳利那
下着姿
制服
コート
私服
アルバイト
美馬祐士郎
ウエットスーツ
私服
エプロン
サーフボード
喫茶店ロゴ案
藤沢の海岸通りに店を構える喫茶店「Big Wednesday」のロゴ。サーフィン好きのマスターらしいネーミングだ。ロゴにも波のイメージを取り込んでいる。
春日洋子
春日太平
一ノ瀬雅人
一ノ瀬弥生
橘泰昭
柊郁
那由多みかん
京介
一ノ瀬史弥
榊麻耶

イベントシーン

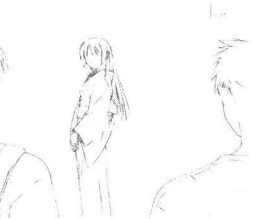
『ホワイトブレス』で使用されたイベントCGは差分を含めて160枚。ここからラストに向けて、その全てを紹介していく。原画集としての資料性はもちろん、完成CGと見比べて、F&Cのグラフィックの実力を堪能していこう。

一ノ瀬末緒

二人乗りで下校

弓をかまえる

ラーメン屋で一緒に

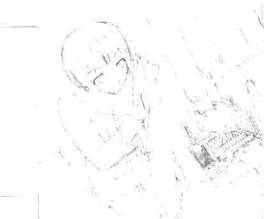
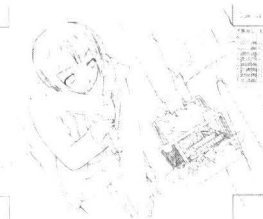
告白1

告白2

告白3

告白4

母

寝起き姿

一緒に朝ごはん

司と夕食のお買いもの1

司と夕食のお買いもの2

司と夕食のお買いもの3

司と夕食のお買いもの4

ひとつの毛布で1

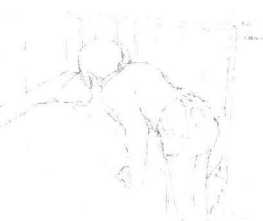
ひとつの毛布で2

ひとつの毛布で3

ひとつの毛布で4

ひとつの毛布で5

ひとつの毛布で6

水着

寝ている司にキス

抱き合う二人1

抱き合う二人2

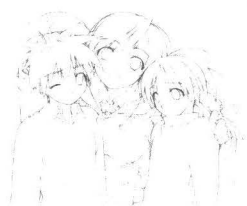
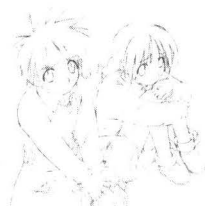
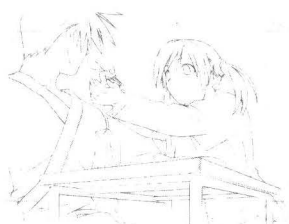
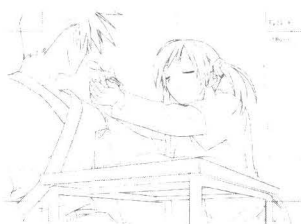
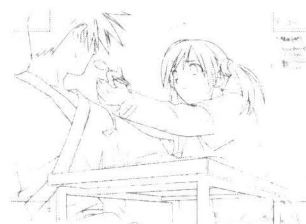
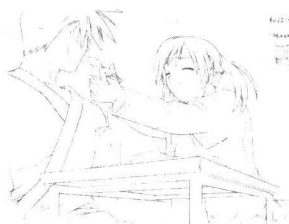
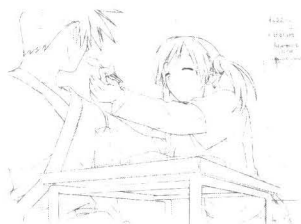
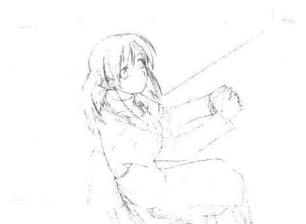
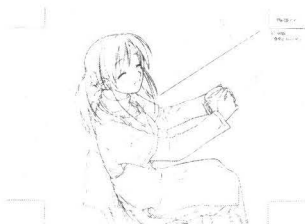
抱き合う二人3
抱き合う二人4
抱き合う二人5
抱き合う二人6

抱き合う二人7
抱き合う二人8
二人一緒に歩いて登校1
二人一緒に歩いて登校2

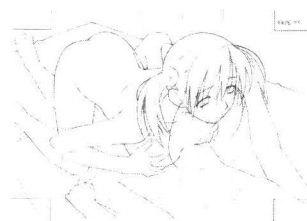
二人一緒に歩いて登校3
二人一緒に歩いて登校4
二人一緒に歩いて登校5
未緒とH・脱衣1

未緒とH・脱衣2
未緒とH・脱衣3
未緒とH・脱衣4
未緒とH・脱衣5

未緒とH・後ろから1
未緒とH・後ろから2
未緒とH・後ろから3
未緒とH・愛撫1

未緒とH・愛撫2
未緒とH・正常位1
未緒とH・正常位2
未緒とH・正常位3

美乃とH・愛撫4

美乃とH・胸で1

美乃とH・胸で2

美乃とH・胸で3

美乃とH・胸で4

美乃とH・騎乗位1

美乃とH・騎乗位2

美乃とH・騎乗位3

浅葉ののか

美乃とH・騎乗位4

美乃とH・騎乗位5

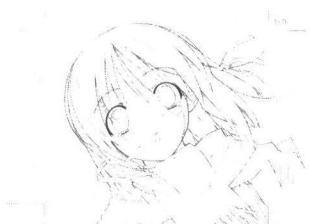
美乃とH・騎乗位6

声をかけるののか

ミサンガを編むののか1

ミサンガを編むののか2

ミサンガを編むののか3

校庭にいる司を見つめる

あふれる想い1

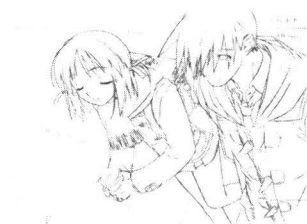
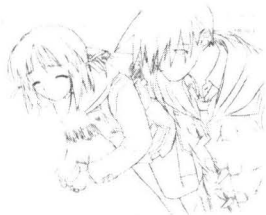
あふれる想い2

あふれる想い3

あふれる想い4

あふれる想い5

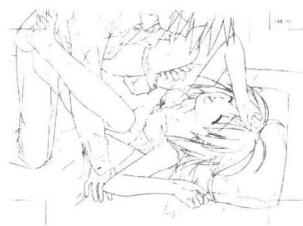
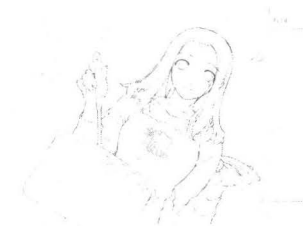
あふれる想い6

司と二人で歩く1

司と二人で歩く2

凪沙とH・正常位1

凪沙とH・正常位2

凪沙とH・正常位3

凪沙とH・正常位4

柊歩

凪沙とH・フィニッシュ1

凪沙とH・フィニッシュ2

仕事風景

献血ポスター

キャンペーンガール1

キャンペーンガール2

父の形見1

父の形見2

父の形見3

父の形見4

父の形見5

母との確執1

母との確執2

母との確執3

葛藤1

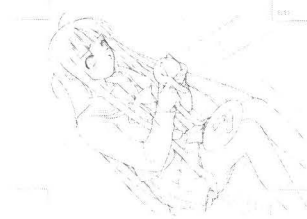
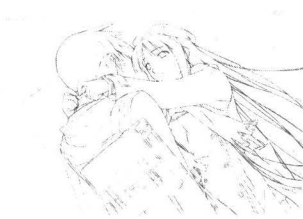
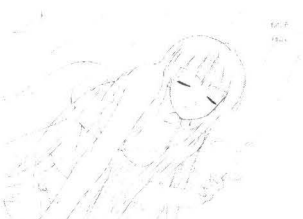
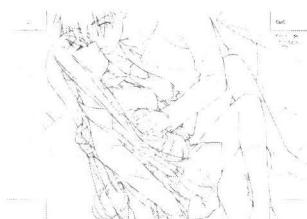
葛藤2

葛藤3

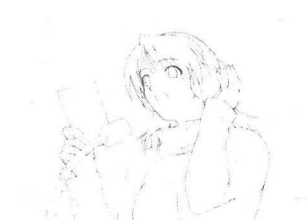
葛藤4

母と娘1

母と娘2

母と娘3 母と娘4 とりもどした形見1 とりもどした形見2

とりもどした形見3 リンゴの皮をむく歩 形見分け1 形見分け2

形見分け3 水着1 水着2 水着3

歩とH・キス1 歩とH・キス2 歩とH・正常位1 歩とH・正常位2

歩とH・正常位3 歩とH・正常位4 歩とH・バック1 歩とH・バック2

その他

歩とH・バック3 レイディオ藤沢 クリスマスパーティー 病気再発